



生命（いのち）の  
哲学要項集



小林 道憲

生命（いのち）の哲学要項集

小林 道憲

目次

存在について

存在と関係 生成 個性性と出来事 相互連関性の世界

宇宙について

マクロコスモス ミクロコスモス 世界 自然

生命について

自己形成 環境 形態 行動 進化 時間と空間 生成流転

精神について

精神と物質 脳と心 意識 物と心

認識について (1)

感覚と知覚 記憶と思考 発達と進化

認識について (2)

相互連関性と認識 世界内視測と世界内行為 自己形成的世界

歴史について

歴史と変動 歴史と偶然 歴史と進化 歴史の認識 歴史の解釈 歴史と物語 歴史と行為

倫理について

社会 行為 価値

宗教について (1)

畏怖 大地 死 創成 儀礼 罪と悪

宗教について(2)

死と苦 解脱 根源的生命 相互連関 生成と時 迷い

宗教について(3)

罪と救い 愛と命 煩悩と救い 歴史と救い



## 存在について

### 〔存在と関係〕

「存在とは何か」という問いは、人間が世界を自覚した時以来問われてきた問いである。考えてみれば、何かが存在するということ、また、世界そのものが存在するということは、実に不思議なことであって、それは、何よりもまず、われわれに驚きの感情を起させるものである。存在するものが存在するというまさにそのことが、驚きなのである。存在するものの存在に対する驚きから、存在とは何かを問う哲学が始まる。存在するものを存在するものとしている存在とは何か。

「ある」とはどういうことなのか。「ある」といわれるあらゆるものを「あるもの」とらしめている「ある」ということは、どういうことか。すべての存在するものを存在するものたらしめている「存在」とは、何を意味するのか。

存在は多様に語られる。存在という語は、述語づけられることによつて、多様な意味をもつ。存在は一であるが、その意味は多である。

主語は、本来、それだけでは空虚であつて、述語がそれに付け加わることによつて、はじめて、主語として立ち現われてくる。主語は述語の十字路なのである。透明人間が、帽子を被つたり、包帯を巻いたり、コートを着たりして、はじめて人間に似た形を現わすように、諸述語の偶然的集合が、むしろ、主語を形づくっているのだと考えるべきであろう。

だから、主語の何であるかを明らかにするためには、主語を規定する述語の何であるかが規定されねばならない。しかし、そのためには、述語は、さらにそれより大きな述語に包摂され、それによつて規定されねばならない。こうして、述語は、次々とより大きな述語によつて述語づけられねばならないことになる。しかし、それは、あたかも宇宙の果てを探るように、再び空虚に出会うことになるであろう。

判断式は、通常、主語と述語と繫辞の三項からなる。ところが、この判断式を、主語（個物）の方向に見ても、述語（普遍）の方向に見ても、実体は見出せない。この判断式そのものが、空の海に浮かび出てくる波のようなものである。

主語と述語は関係の項にすぎず、それ自身は実体性をもたない。繫辞が表現するものは、非実体的関係である。「SはPである」という判断式を考えた場合、SにもPにも実体性はなく、へであるは関係を表現しているだけである。

普遍と個物は相関的であって、一方のみでは成り立たない。両者とも、それ自身としては実体性をもたない。実体性を求めて、個物と普遍のどちらの方向を徹底していても、この実体性を求める旅は、空虚の奈落に落ちて帰って来れなくなるであろう。

西洋の存在論は、アリストテレス以来、「実体とは何か」を追究してきたが、実体はむしろ無いのだと言わねばならない。それは、まるで青い鳥を求めるように、この無いものを追い求めていたことになる。

存在は関係なのである。主語や述語は、関係によって立ち現われてくるものだとみなければならぬ。

存在が多様に語られるということも、存在者が、他の多様な存在者との関係において、存在者たりうることからくる。存在者は、他者との関係の中で、多義性をもつ。事物は、その意味を初めからもつていてではなく、事物相互の関係の中から獲得するのである。

実体は関係である。関係の離合集散によって生成変化する過程の一面面が実体と見えるにすぎない。あらゆる事物は、他とのつながりの中で自己自身を決定する。

物とは関係態である。事物が何であるかは、諸事物との連関性のもとで知られる。諸事物間の関係が、当の事物を形成する。事物は、諸々の関係から独立した実体として存在するのではなく、他との関係の連結点としてのみ存在する。

ここに一輪の白いユリの花がある。ということは、そのユリの花が、赤ではなく、白であることによってである。しかも、それが白であるということは、それを見ている私も含めて、他者との関係によってである。

すべてのものが関係性によって生じてくるものだとなれば、すべてのものは生起してきたものであり、出来事である。存在するということは、出来事として立ち現われてくることである。世界は、物によって構成されているのではなく、出来事によって形成されている。

無量の水を湛えた海面に波が起きるように、事物は、出来事として、空の場から立ち現われてくる。

花は本来空であるが、その空なる花は、春まだ早い時期に、一輪の梅花となって花開く。そして、そこに、春が開花する。

夜空に瞬く星々、野に咲く草花、一つ一つが現に現われ出たものであり、現前したものである。おのずと発現したものであり、創発してきたものである。

川の流れの渦は、絶え間ない流体運動の中の相対的に安定したパターンにすぎず、渦という不変の実体が存在するわけではない。それと同じように、物という不変の実体が存在するわけではない。

アリストテレスの間違ひは、「存在とは何か」を「実体とは何か」に還元し、独立存在者としての「実体」を求めようとしたところにあった。

もともと、自己同一性をもった実体としての個物というようなものは存在しない。それは、諸属性の結び目にすぎない。

物体は、質料的にも、形相的にも、絶えず変化し、そこには、いかなる実体性も認めることはできない。あらゆるものは、瞬間毎に生成消滅を繰り返していると言える。

どんなに物に実体性があり、同一性と連続性があるように思われようとも、それは虚妄である。物がそれ自体として存在するという考えは、一つの虚構である。すべてのものは、蜃気楼のように、また夢、幻のように、実在性のない幻影である。

自己同一的に持続するものは、この世界には何一つ存在しない。表向き充実した堅固な個体が存在するよう見えても、それは無数の構成要素の相互作用にすぎない。(物自体)も、カントの言うように認識できないのではなく、もともと存在しないのだと言わねばならない。実体といわれるものも、諸構成要素の瞬間毎の離合集散にすぎない。

実在は、むしろ、現象としてのみ表出されるものと考えねばならないであろう。実在は、現象を離れてはありえない。現象の世界を超越する世界に、実体とかアイデアとか物自体を求める必要はない。

### 〔生成〕

存在は生起し、生成する。生成こそ実在である。存在は生成に還元されねばならない。

すべては生成するのであって、生成するものを、仮象として見ることはできない。どうして、プラトンのように、生成の世界を越えたところに、生成しない世界を見る必要があるうか。

存在は生成の瞬間の軌跡である。不断に動く実在を一瞬一瞬止めて見るとき、存在として立ち現われてくるにすぎない。

すべてが生成変化する世界では、へあることはへなることであり、存在することは生成することである。

すべては休むことなく動く。銀河も、星も、物質も、生命も、片時もなく変化している。すべてはそれであって、それでない。あるとは、変わりつつあることである。

実体はもともと関係にすぎず、この関係の離合集散が生成である。関係性の或る瞬間での組み合わせは、次の瞬間では、別の組み合わせに変わっていく。それが、事物の生成消滅である。

現実の事物は絶えず変化し、運動している。日に日に新しく創造されていくもの、刻々と変わっていく動的なもの、それが実在である。生成こそ実在である。古きものが去り、新しきものが現われる。存在するものは、一つとして永続しない。

存在の本質は生成変化することにある。存在の意味、存在するものの存在を、生成として把握しなければならない。

ここに、一輪の白いユリの花がある。その色や形は時とともに変わる。個物は、常に変わり、滅んでいく。一つ一つが、生じた滅する。永続する個物はない。

現実は生成であり、変化である。無から有へ、有から無への変化、それが、生成の本質である。生成の過程では、今ここに何かがあるとともに、ない。今ここで、何かが消滅すると同時に、出現している。

有であって無であり、無であって有であるものが、生成である。生成において、はじめて、有は有とされ、無は無とされ、有は無になり、無は無になる。有と無の両者をその中に含まずに、生成消滅しないものはない。いかなるものも、その誕生そのものの中に、その滅亡の萌芽を宿している。

生成は、矛盾律を乗り越える。「或るものが、Aであってかつ非Aであることはない」というのが矛盾律である。しかし、現実には、すべてのものは生成する。Aは非Aになる。生成は、軽やかに矛盾律を乗り越える。

矛盾律は、静態的論理である。ものごとを止めて見ようとするときの論理である。しかし、ものごとは常に動き、生成してやまないのだから、この静態的論理では、生成するものご

とをつかむことができない。生成変化する現実を生成変化するままに把握するには、われわれは、この静態的な形式論理を乗り越えねばならない。乗り越えるなら、Aが非Aになり、存在が非存在になることは、何ら不思議なことではない。

この世界は生成の世界であり、流動の世界である。この世界は、川の流れのように、瞬時も止まることなく変化していく。世界は不動の存在ではなく、絶えず運動し、時々刻々と生成変化する活動である。

われわれは、生成するものを生成するものとして、動くものを動くものとして、そのままに見なければならぬ。実在を、静的にはなく、動的にとらえねばならない。存在を、静的なもの、固定的なものと考えてはならない。動くものを、動かないものによって把握することはできないのである。動くものを動かないものから、生成を存在から見ようとするとともに、誤謬がある。

### 〔個性性と出来事〕

存在するものは、生成するものである。この生成の視点から見ると、個性が統一的存在としてあるという常識的な考えは覆される。確かに、事物は、通常、同一性を保っているように見える。しかし、いつまでも同一性を保っているという保証は、どこにもない。どんなに堅固な岩でも、瞬間ごとに変化し、風化していつか消えている。一輪のユリの花も、やがて実を結び、枯死していく。

個性が何であるかということを追究していくとき、われわれは、そこに、他者との関わりを見出す。個性は、それだけで存在するものではないのである。物体にしても、生命体にしても、多種多様であり、変化しつづける。それらは、変化しながら、まわりの個性と相互関係をもつ。個性がそこに実体として存在するとみるのは、一つの抽象であり、虚構である。

個性は関係においてある。関係を離れて個性はない。個性は、自己自身に関係しながら、同時に、他の個性と関係している。個性の状態は、個性と個性の関係性からしか把握でき

ない。

個体は、むしろ、関係の項にすぎない。そうである以上、関係項としての個体は、関係の変動によって変化する。関係項としての個体は、関係に従って自己を決定し、いつも他との関係において変化していく。関係項は、他の関係項と関係全体との相関性から、自己自身を変え、そのことによって、また、関係そのものをも変えていく。

或るものは、他のすべてのものとの関係においてのみあり、或るものの中には、他のすべてのものとの関係が内包されている。だから、一つのは、互いに他を含み、他に含まれる。

ここでは、事物の個性性も、実体としてではなく、出来事としてとらえられる。出来事が、事物の個性性を一時的に形成するにすぎない。しかも、出来事と出来事は相互に重なり合い、相互に流れ込み合う。一個の孤立した出来事というものはない。諸々の出来事が絡み合い、互いに関係し合っている。そのような出来事の連関から、一つの出来事がすべての出来事を統合しつつ生起してくることを、われわれは、事物の生成として理解しているのである。

この世界に存在するものは、諸事象の関係の結節点として、その都度へ出来事として現出してくる。諸事象の関係は集合して、一つの出来事として生成し、離散すれば、一つの出来事は消滅する。

物とか個体といわれるものは、出来事として生成してくるものであり、果てしない途上にある。そこには、ただ事象と事象の相関関係があるのみであり、物の実体性はない。

存在は出来事であり、事象である。物ではなく、事である。世界は、無数の出来事によって構成され、動いている。存在するものは、働きであり、動きである。実在するのは、出来つつあるものであり、生成しつつあるものである。しかも、事態は絶え間なく動き、何一つ止まってはしない。

ある一つの出来事が生起してくるには、それ以前のすべての出来事、さらに現在のすべての出来事が縦横に関係している。一輪のユリの花の存在も、それを眺めている私の存在も、世界のすべての出来事の集結として生起してくるものである。それは、どれも一回きりの出来事なのだから、一輪のユリの花と私との出会いも、また、一回きりの出会いである。

あらゆる事物は関係によって成立している。多様な要素の多様な関係が複合して、多様な関係の網の目を作り、多様な相互連関の世界を成立させている。

### 〔相互連関性の世界〕

世界は、無数の出来事の相互連関の世界である。だから、任意の一つの出来事のうちには、他のあらゆる出来事が相入している。世界は、無数の出来事が相互に他を含みつつ生成する世界である。

個体は、相互連関性の網の目の連結点であり、独立した実体ではない。個体は常に他とのかかわりを含む。すべての個体は連なっている。個体と個体は非連続であると同時に、連続している。

世界は、万華鏡のように、無数の事象が映し合いながら生成し続ける場であり、事象と事象が相交わり合いながら不断に自己を生み出していく世界である。世界における諸事象は、他の事象との連関によって動的に変化し続ける運動そのものである。

相互連関の世界では、あらゆる要素が、それぞれ他の要素との連関において規定されている。ここでは、一つの要素は、他と切り離されて存在するのではなく、他の一切の要素との結合の中にある。一つの要素は、独立した存在でもなく、孤立した存在でもない。相互連関の世界は、本来分離することができない世界であり、多くの要素が相互に浸透し合っている世界である。

世界の中のすべての事象は他のすべての事象を映し、これらと密接につながっている。一つの事象が他のすべての事象を映している世界では、一つの事象の特性は、それだけで決



めることはできず、他のすべての事象との連関によってのみ決定される。

相互連関の世界は、無数の事象が重なり合い、錯綜し、影響し合っている世界である。だから、一つの事象が生起するには、それ以外のすべてのものが作用し、無数の原因や条件の連鎖が働き出ている。したがって、現在の一つの事象は、それ以前のあらゆる事象の働きを前提している。

相互連関の世界では、一つの事象は、他のすべての事象との連関性において、それ自身である。だから、すべての事象には、他のすべての事象が含まれる。

ここでは、存在するものは独立して存在することはできず、すべて連関し合っているから、一つのものの存在にもすべてのものが参加している。自己と他者も、分離することはできない。

実在は、個別性として、多として現われるとともに、それらは互いにつながり、連関し合っていて一つになっている。一の中の多、多の中の一、それが実在の原理である。

ここでは、個別的一は全体的多を映し、全体的多は個別的一を映している。多は一つの中にあり、一は多の中にある。

一輪のユリの葉先に宿る一滴の露にも、山川草木、日月星辰、無数のものが映し出されている。と同時に、山川草木、日月星辰、無数のものも、一滴の露とつながっている。

あらゆる事象が相互につながり、相互に映し合い、相互に含み合うことによって、世界は成り立っている。だから、一つの事象の生起の中には、他のすべての事象が参入し、逆に、また、一つの事象の生起は、他のすべての事象の生起に参入する。あらゆる事象は他のすべての事象からなるのである。

相互連関の世界では、全体と部分が相即し、全体と部分が相互に他の中に含まれる。だから、ここでは、部分を理解しなければ全体は理解できないが、同時に、全体を理解しなけ

ればその部分も理解できない。全体が部分を限定し、部分が全体を限定することによって、世界は自己を形成していくのである。

ここでは、部分は、他の部分と相互に作用し合いながら、全体を形成するが、その部分は、また、その全体からも影響を受けて変化し、変化することによって、また、全体に影響を及ぼす。したがって、ここでは、全体を部分に還元してしまうこともできず、部分を全体に統合してしまうこともできない。全体と部分は密接に結びつき、全体の中に部分が含まれると同時に、部分の中に全体が含まれる。全体と部分は分離することができず、全体と部分が相即することによって、世界は成り立っている。

逆説的に言うなら、部分は全体よりも大きい。全体と部分は切り離しがたく結びついているとともに、部分は絶えず全体を破る可能性をもっている。世界の生成は、全体と部分の矛盾葛藤から起きてくるのである。世界は、部分と部分が相互に限定し合い、全体と部分も相互に限定し合って、自己自身を形成していく創造的世界である。

世界は相互連関の場である。ここでは、個と個が縦横に相互作用するとともに、そのことによって場が形成され、その場と個がまた相互に作用し合い、世界は螺旋的に生成変化していく。個が場を限定し、場も個を限定し、場も個も変化していく。個と個は、相互作用して場を形成するとともに、その場を自己自身の中に読み込み、その変化によって、また、場そのものを変えていく。個の中に場が働き出、場の中に個が働き出、個と個、場と個の相互作用の中から生成は起き、その生成がまた新しい場を生み出していく。

事象と事象が互いに働き合う動的相互連関から、世界は不断に形成されていく。無数の事象の相互作用を通して新たな関係が発現し、世界は刻々として新たに創造されていくのである。

相互作用からの自己形成、これが生成する世界の本質である。要素と要素、要素と全体の相互作用から、新しい組織や形態が創り出されてくる。世界は、絶えず自己自身を創出しながら、瞬時も同じ一つのものであることはなく、川の流れのように、常に新しい。

世界を構成する要素は相関的にのみ発現し、この要素と要素の相関性と連動から、緊密な相互作用が起き、新しい秩序が形成される。ここでは、小さな要素のわずかなゆらぎでも、他の要素との連動によって増幅され、全体として大きな変動が現出する。しかも、その全体の変動が、また、要素同志の相互作用に影響を与え、常に変動していく。ここでは、部分部分が部分の中に入り込み、全体が部分の中に入り込み、それぞれ緊密に絡み合っているから、その過程を各要素に分解することはできない。

ここでは、部分と部分の相互作用から全体が形成されるとともに、その全体がまた部分部分に反映し、全体と部分の相互浸透が繰り返されることによって、秩序形成がなされる。全体の中に部分があるとともに、部分の中に全体があつて、それぞれ影響し合いながら、世界は形成される。

多様な諸要素が相互に作用し合つて世界を形成するとともに、その世界が諸要素に映し取られて、世界は変動してやまない。われわれは、このような不断に変化し続ける世界の一部である。世界は、刻々として新たな世界であり、片時も一つところにとどまることはない。世界は、間断なく自己自身を再配置し続ける動的世界である。存在するとは、このような世界の自己形成の一瞬の軌跡に参加することである。

世界の非決定性ということも、万物の相互連関性ということから出てきている。この世界では、あらゆる部分が相互作用しているから、未来を正確に予測することはできない。

世界は運動であり、変化であり、生成であり、創造である。動くことこそ、実在である。生成する世界は、絶え間なく新たなものを生み出し、変化し続ける。そこには、予見不可能な創造性と不確実性があるが、しかし、その予見不可能性と不確実性こそ、自由がある。

不断に新しいものが生成している世界にこそ、自由はある。現在の創造の瞬間から、新しいものが生まれる。瞬間はいつも新しさを含んでいる。その新しいものを生む創造性は、予測することができない。予測することができない創造性にこそ、自由は宿っている。

世界は変化してやまない。世界は絶え間なく自己を差異化している。生成する世界は、休むことなく自己を乗り越え、新しいものを創造し進化している。そこに、世界の向上と飛躍がある。自由の源泉も、そこに求められねばならない。

生成こそ、世界の本質である。存在は生成と不可分である。存在は生成の一樣相なのである。

## 宇宙について

### 〔マクロコスモス〕

宇宙は、その創成以来、絶えず自分自身を形成する過程の中にあり、今なお、その過程の中で動いている。宇宙は、絶えず変化し、流動し、進化しつつある。宇宙そのものが歴史的に変化し、成長する。宇宙は、混沌状態から誕生して以来、休むことなく変化し続け、生きもののように、ダイナミックに自分自身を組織化し、発展してきたのである。

宇宙は生成変化そのものであり、流動そのものである。宇宙は、絶えず自己自身を創造していく過程である。世界の中のすべてのものは、この無限の過程の出来事である。出来事と出来事は互いに作用し合って、宇宙の生成変化を担っている。

宇宙は、常に生成し、変化し、流動する生きた活動体である。宇宙は不動のものではない。

この宇宙は、有から無へ、無から有へ、不断に生成消滅を繰り返す場である。宇宙は、もしかししたら、日に日に生まれ、日に日に死し、瞬間ごとに生まれ、瞬間ごとに死しているのかもしれない。

ヘラクレイトスが万物流転を説いたように、この宇宙は常なる変化であり、永遠の生成である。同じ流れに立つ人に対して、異なる水が流れ来たり、さらに異なる水が流れ来たる。われわれは同じ流れの中に立ち、しかも同じ流れの中に立たない。

## 〔ミクロコスモス〕

われわれが住むこの宇宙は、エネルギーと波動に満ちた真空の海のゆらぎから忽然と生成してきたものである。ビッグバン以前の真空も、全くの無や空虚ではなく、むしろ無尽蔵なエネルギーを蔵していたと考えねばならない。このエネルギーの海から、物質は生成してきたのである。真空のエネルギー状態のわずかなゆらぎによって粒子は生成し、その反発力によって宇宙の膨張も起きてきたのであろう。

ミクロの物質の世界は生成消滅の世界である。エネルギーをもった場が常に振動し、エネルギーの流れが間断なく変化する中で、粒子が瞬時のうちに生成と消滅を繰り返している。多くの種類の粒子が生まれては消え、別の粒子を生み、種々の粒子の相互作用の中で、一つの粒子が別の粒子を吸収し、他の粒子に変わり、それがまた、別の粒子を放出して、他の粒子に変わっていく。その過程の中で、エネルギーは質量に変わり、質量はエネルギーに変わり、エネルギーの流れが、流れ来たり、流れ去る。ここには、もはや不滅の物質という概念は存在しない。

物質を構成する基本要素は、むしろ、エネルギーをもった各種の場の振動つまり波動である。物質の根源は、共鳴する場の振動によって奏でられる交響曲のようなものとしてとらえねばならない。宇宙は、もはや堅固な物質から構成されているのではなく、根源的な活動力とその相互作用によって形成されている。

ここでは、粒子は空間から切り離すことができず、独立した実在とはみなされない。粒子の生成と消滅は、場の運動に他ならない。水の流れとそこに生じる渦とは区別されないように、場と粒子も区別することができない。場のエネルギーが局所的に集中している部分の運動が、粒子として現われるのである。

非局在性の問題も、このことから説明することができる。素粒子レベルで起きる現象の中には、二つの粒子が、何の因果的連関もなく、あたかも互いに連絡し合っているかのようになり、同じような特性をもって振る舞うという現象が見られる。そのような現象は、二個の

粒子が非局所的に結びついていること、つまり、部分部分は宇宙全体の場とつながっており、宇宙全体の場から切り離せないということを意味している。

ミクロの世界では、一つの粒子として現われるものも、まわりの場から独立した個ではなく、常に全体の場の中へと統合された部分として、絶えず変動している。われわれが通常目にしている個々の事物は、この根源的な場の表現なのである。粒子と粒子の相互作用は、この場において可能である。宇宙に存在するすべてのものは、相互に結合し、一つの連統体の一部を成し、宇宙全体の不可分の部分を成す。

物質世界でも、場において個と個は相互に関連し、そのことによつて場が個の中に映し出される。場の中に個が働き出、個の中に場が働き出、場と個の相即の中で、個と個は相互に作用し合つて、個は変化する。また、個が変化することによつて場も変化し、場が変化することによつて個も変化し、個と個、場と個の相即の中で、個と個、場と個が絡み合いながら、世界は常に流動変化していく。

ミクロの世界では、もはや物体とか粒子とか言われる固定された実体概念は通用せず、すべては運動であり、変化であり、過程である。粒子として観測されるものは、進行する宇宙の無限の過程の一途上にすぎず、出来事にすぎない。ここでは、存在するということが活動するということである。粒子といつても、間断なく再配分されていくエネルギーの移り変わりにすぎない。それは、孤立した出来事ではなく、常に他の出来事と関連した出来事である。

ミクロの世界は独立した部分に分解することはできず、すべてが一体である。物質と物質、物質と空間、空間と時間、質量とエネルギー、すべてが相互に結合して、不可分な全体を成す。素粒子といつても、常に他の系との相互作用を通してのみ、自己を決定できるようなものである。この宇宙では、万物は相互に結合しており、相互に依存し合つており、互いに分離することはできない。

しかも、物質は、自分自身の中に秩序形成能力をもっている。そのため、物質は、絶えず複雑さと多様性を増加させていく。プラズマ状態の物質でさえ、それを構成する各粒子は、

全体の働きを心得ているかのように動く。

この宇宙は、永遠の生成であり、常なる変化であり、不断の流動であり、無限の創造であり、活動である。宇宙に生起するあらゆる事象は、相互に関連しながら、絶えず生成変化して、純粹活動力としての宇宙を形成する。

自己形成、この原理は、物質の最下層にまで及んでいる。生命世界と物質世界の間には、それほど大きな溝はない。生命世界も、物質世界も、連続した自己形成過程であり、それは宇宙の自己形成にまで及ぶ。宇宙は生きたものである。

### 〔世界〕

宇宙は、相互に関連し合った諸事象から出来ている。事象と事象は互いに結合し合って、全体を形づくっている。宇宙の中のどんなに小さな事象も、宇宙のすべてのものと密接につながっている。しかも、この事象間の相互関連によって動的調和を保ちながら、宇宙は常に生成変化していく。

極小から極大まで、宇宙の中のすべての事象は他のすべての事象を映し、これらと密接につながっている。各個体は、それぞれに自分自身の異なった視野から宇宙を映し取りながら、相互に映し合い、相互に作用し合って、世界を形成している。しかも、あらゆる個体は、生成流転する大宇宙を映して、常に変動してやまない。われわれは、現在の瞬間瞬間において、この生成流転する純粹活動としての宇宙の中心に接触しているのである。

宇宙は、宇宙自身の中に無数の表現点をもち、至るところに無数の中心をもっている。この宇宙にはどこにも中心がなく、同時に、至るところが中心である。かくて、宇宙は万物の内であり、万物は万物の内であり、共に変化していく。

銀河にしても、星にしても、原子にしても、分子にしても、植物にしても、動物にしても、この宇宙に存在するものは、常に運動し、生成変化し、進化発展してやむことがない。宇宙万物は、生きて動くものである。万物は、宇宙の大なる生命の働きに貫かれて、常に生

成発展している。

世界はもともと不完全な体系であって、それを記述しようとすれば、いつも無限遡及や循環論や自己言及に陥る。無限遡及こそ、世界の無限の形成を可能にし、循環論や自己言及こそ、新しい世界を作り出していく。むしろ、それらは、生成のためには必要なものである。

自己は、そこに静止して存在するのではなく、ダイナミックに自己自身を形成していく。自己は、自己の中から自己でない自己を生み出し、それを自己に連結し、こうして自己は自己を乗り越えていく。自己は、自己であって自己でない。それが、自己を、生成変化する自己として、自己形成していく自己として把握したときの論理である。

自己言及的循環のもとで、自己自身の行為が巡り巡って自己自身に帰ってきたとき、自己はそれだけ一歩前へ前進する。このとき、自己は、自己の中に自己を位置づけ、そこからまた新たな自己を生み出す。自己は連続しているとともに、連続していない。自己は、日に日に生起している。自己は、絶えず自己自身を更新し、自己超出していく運動である。

この宇宙は、常に内部にゆらぎを抱え、節目節目の分岐点でどの方向へ進んで行けばよいのか迷っているような時がある。この時、どちらの方向を取るかは、偶然が左右する。だから、まえもって次の状態を予測することは、本来不可能である。世界は偶然によって成り立っている。否、世界そのものが偉大な偶然なのである。

世界は、偶然から作り出される即興劇である。宇宙や物質、生命や社会、どれをとっても、その生成変化は、それを構成する諸要素の偶然の出会いから起きる。偶然の出会いが、多くの分岐点をつくり、複雑性を作り出していく。かくて、宇宙から社会まで、思いもかけないことが次々と起き、多くの偶然が重なって、一つの流れが作られる。ほんのちよつとした事件をきっかけとして、予想をはるかに超えた巨大な事件が生起する。偶然は、人生同様、世界の運命を左右している。

世界は、偶然の出会いから一つの方向を定め、もはや歴史的に逆戻りのできないものにま



で拡大してしまう。人間の歴史ばかりでなく、宇宙や物質、生命の形成や進化そのものが常に偶然に左右されている。

かくて、世界は不可逆な歴史をもつ。人間の歴史ばかりでなく、宇宙も、物質も、生命も、過去の履歴をもち、その上に現在の経験を積み重ね、未来の新しい経験に引き継いでいく。実際、宇宙も進化し、物質も進化し、生命も進化する。社会も発展し、われわれの精神も、経験を積み重ねて成長する。その過程は不可逆であり、不断に新しいものを産出する過程である。

もしも、この世界が決定論的で可逆な法則に支配されているのなら、思いもかけない予測不可能なことが起きるといふようなこともなく、新しいものが登場するということも何一つないはずである。しかし、世界は時々刻々新しい。世界には、絶えず、新しい出来事が積み重なっていく。新しい出来事が付け加わった分、過去と現在には飛躍があり、非連続がある。かつて生じたものは、再び生起することはない、現在生起しているものは、将来再び生起することはない。永遠の新しさ、それが、常に自己自身を形成していく不可逆な世界の真理である。

諸要素の相互作用から自発的に自己自身を形成していく世界の構造は、物質世界や宇宙、生命世界や社会すべてに見られる。決定論的法則では、この自発性をつかむことができない。決定論は、世界の次の段階に創発してくる新しいものを予測することができない。そこには、決定論的法則では把握しきれない飛躍がある。

決定論的世界観では、現在の創造の瞬間をとらえることができない。創造の瞬間には、自由がある。だから、たとえ初期条件が一定であっても、結果は一義的には定まらない。同じ初期条件からでも、多くの結果が生じうる。自己形成する世界は、人間世界や生命世界はもちろん、物質世界でも、初期条件には縛られない自由をもつ。

## 〔自然〕

自然は、自己自身を形成しゆく創造的自然である。世界は絶え間ない流れのうちにある。

世界は、自己自身を生産し、千変万化する生成する世界である。世界は、 $\langle$ ある $\rangle$ ではなく、 $\langle$ なる $\rangle$ のである。

自然は、休むことなく新しいものを生み出し、自分自身を新しく形成してやまない $\langle$ 生きた自然 $\rangle$ である。それは、 $\langle$ 自然 $\rangle$ という言葉がすでに表わしている。 $\langle$ 自然 $\rangle$ とは、おのずから自己自身を形成するものなのである。

われわれは、生きた自然、創造的自然をとらえる努力をしなければならない。自然は、自分で自分を産出する系であり、新しいものを生み出し、自己自身を形成しゆく創造的な系である。機械論的自然観は、このような生きた自然、生産的自然を、何一つ説明しえなかった。

真の自然は、自ら運動し、生成変化し、自己自身を形成する過程そのものである。東洋の自然という概念にしても、ギリシア語のピュシス ( $\psi\upsilon\chi\eta$ ) という概念にしても、ラテン語のナトゥラ (*natura*) という概念にしても、いずれも自己産出という意味をもっていた。

ところが、デカルト、ニュートン以来のヨーロッパ十七世紀の力学的世界観は、この豊かな自然の意味を当の自然から剝奪してしまった。そして、自然を、単なる質量と運動にすぎない死んだ物質と数量の支配する世界に閉じ込めてしまったのである。 $\langle$ 生きた自然 $\rangle$ という概念をとらえることができなかったのは、そのためである。

生成変化するということ、絶え間なく新たなものが生成するということが、実在そのものの姿であって、それは予見不可能である。自然は、決定論的法則を破る自由をもっている。そのような自然を、力学的自然観のように、決定論的自然法則によって、無理やり把握しようとしたなら、自己自身を形成してやまない自然を殺してしまうことになるであろう。

## 生命について

### 〔自己形成〕

宇宙は、銀河を形成し、星を形成し、惑星を形成してきた。ミクロの世界でも、宇宙は、素粒子から原子、原子から分子、分子から高分子へと、物質をより複雑化し、より秩序化してきた。生命の誕生は、この宇宙のマクロ進化とミクロ進化の極限で起きている。生命の発生は、宇宙の自己形成過程の結果である。宇宙の創成から生命の誕生まで、宇宙は、常に自分自身を形成し進化してきたのである。

宇宙に存在する諸物質は、より複雑化し、より秩序化して、生命体のような有機体をつくらうとする傾向をもっているのだと言わねばならない。宇宙は生命を生み出す力をもっており、適切な条件にある惑星なら、どこでも生命は発生しうる。数千億個の星によってなる銀河を数十億個も含んでいる宇宙には、生命を生み出した惑星は数限りなく存在するであらう。

生命世界は、物質世界に深く根を下ろしている。物質世界も、生命世界の根と接触することによって、その豊かな意味と有機性を実現する。生命と物質の間にそれほど明確な境界がないとすれば、生命原理は、むしろ物質そのものの中に宿っていたのだと考えねばならない。自然は本来（生きた自然）であり、生命の萌芽はどこにでも遍在していると言わねばならない。

生命は一つの形成力であり、その形成力によって物質が編成され、秩序ある構造がつけられて、一つの統一ある形態が出来上がる。その形成力は、質料に形相を与える力である。それが、物質を形成して、様々な形態を生み出す。形の背後には力がある。生命とは、物質を組織し、個体を形成し、種を形成し、どこまでも自己を創造していこうとする形成力なのである。

生命体は、最も原始的な形態でも、統合性を保ち、物質やエネルギーを代謝し、自己増殖する有機的なシステムである。

DNAを構成する分子構造が解明され、そのDNAに書き込まれている遺伝子情報のすべてが解読され、その全リストがつけられても、生命現象の全体は解明されたことにはなら

ない。生命とは、それらの物質を構成し、秩序ある情報を書き込む自己形成能力だからである。

生命は、他の力を借りずに、自動的に一つの生命体を創り上げる。そして、その生命体を踏み台にして、また次の新しい生命体を創造していく。生命は、そのような自己創出体なのである。これは、奇蹟と言ってもよいような宇宙の働きだと言わねばならない。

エントロピー（無秩序度）は不可逆的に増大するという熱力学の第二法則に反して、生命は秩序をより増大させ、エントロピーを減少させてきた。生命は、分散から集積へ、無秩序から秩序へ、不可逆に上昇していく。

物質が一旦生命性を獲得すると、自由は飛躍的に増大する。物質は物理法則に従うが、生命は物理法則に抵抗する。重力に抵抗して植物は成長し、鳥も空を飛ぶ。

生命とは、物質が自由と目的、個別性と多様性、全体性と複雑性、形と統一性を獲得しようとする志向性である。この生命の本質は、物理化学的還元主義ではつかめない。

生命の本質は、縦横に張り巡らされた相互作用のネットワークにある。したがって、生命現象の源泉を、何かある物質、例えばDNAに還元できるものではなく、種々の物質の相互作用それぞれ自身が生命作用だと言うべきであろう。

生命現象は循環によって成立しており、どれが何の原因であるかは、明確に決定できない場合が多い。むしろ、互いが互いにとって原因でもあり結果でもあるという循環的相互作用そのものが、生命だと考えねばならない。

生命体が形成されるには、有機物がある意味体系をもって有機的に構成されていなければならない。生命現象とは、この諸物質によって構成される意味体系であり、この意味体系そのものは物質ではない。生命とは、むしろ、そのような配列の中に組み込まれた情報なのである。それは、素材還元主義や機械論ではとらえることはできない。

## 〔環境〕

生命体は、どれも、周囲の環境と物質やエネルギー、情報を出し入れして自己を維持していく開放系である。しかも、生命体の一つ一つの細胞や遺伝子に分割しても、それ自身がまた周囲の環境と物質・エネルギー・情報の交換をして、一つの秩序立った組織を形成していく開放系である。

生命体は、代謝機能によって、自分自身の成分を分解して物質やエネルギーを放出するとともに、その分、逆に物質やエネルギーを外部から取り入れて、流動的な平衡状態を保持する。生命体は環境から切り離して考えることはできず、環境との深い関係の中でとらえねばならない。

生命体は、物質やエネルギーを代謝することによって、各部位を相互に連絡し、構成分子の成分を変えながら、外界に適應して、自らを維持していく。この内と外との相互作用のもとで、絶えず内部を変化させながら自己を維持していく作用にこそ、単なる機械との違いがある。生命体は、機械的な秩序ではなく、流動的秩序であって、外から攪乱されても、絶えず自らを調節しながら、自らを適應させて生きていく。生命体は、単に、外界の刺激に反應しているだけの受動的秩序ではなく、むしろ、外界に対して能動的に対応していく能動的秩序である。

代謝は、ある意味で激しい活動である。この物質やエネルギーの交代があるために、人体の場合でも、比較的短い期間でほとんどの細胞が新しいものに入れ替わってしまう。とすると、生命とは、それを構成する物質そのものではなく、物質やエネルギーを絶えず交代させていく働きそのものだと言わねばならない。

主体と環境の相互作用によって常に自らを変化させながら、生命体は自己自身を維持していく。機械論的な生命観では、生命体を各部品から出来ている自動機械ととらえ、周囲の環境との複雑な相互作用を無視して考えがちであるが、これでは、生命体の全体をとらえることはできない。生物は、主体と環境の相互作用によって、自己自身を環境に適合させるとともに環境を自己自身に適合させ、自らを維持していく。

生命体は、主体と環境の相互作用によって成り立っており、環境がすべてを決定しているのでも、DNAに組み込まれているプログラムがすべてを決定しているのでもない。それどころか、DNAそれ自身がまた一つの生命体であって、それは、絶えず外部の環境を読み込みながら、自らも絶えずそれに適応して、内と外との相互作用の中で生命現象を営んでいるのである。むしろ、この相互作用そのものが生命なのである。

原始的なバクテリアも、原生生物も、植物も、動物も、人間も、物質の循環やエネルギーの流れに貫かれて連続している。生命世界は、循環の中で連続している。むしろ、外部環境の変化をも含めた変化全体を生命活動だと言うべきであろう。生命体は環境に貫かれている。

生命体は、物質やエネルギーの代謝を通して、地球上の全生命圏と連絡するとともに、太陽系や銀河、全宇宙ともつながっている。

生命体は、単に地球上の環境に適応して生きのびていくだけの存在ではなく、同時に、地球環境をつくり変えていく存在でもある。生命体は、受動的であるばかりでなく、能動的でもある。生物は、自分で環境を改造する能力をもち、積極的に環境を創造していく力をもっている。

どんなに原始的なものであっても、一旦生命体が生まれれば、それは自分自身でも環境を創造し、これを、自分自身の環境として取り込んでいく。こうして、生命体は、より複雑化し、進化していくことができる。生命は、主体と環境の相互作用を通して自己自身を創造していく。

生物は、生きていくために環境を必要とする。しかも、生物は、その種や形態に応じて、それぞれ独自の環境世界を環境から選び取っている。物理的な空間構造が、あらゆる生物にとつての共通な環境ではなく、各生物は、それぞれの種に応じて、固有の空間を選択しているのである。

生命世界は、生命体によって無数に切り分けられた主観的な世界から出来ている。これら無数の主観的世界が互いに影響し合い、映し合い、巧妙に組み合わせられて出来上がっている万華鏡のような世界、それが生命世界なのである。

同じ一つの世界も、無数の生命体によって、無数の環境世界として映し出されている。無数の環境世界に分かれることによって、一つの世界は出来ているのである。

動物は、自らを身体行動として表現し、それを環境に投影し、自らの環境世界をつくって、一つの意味ある世界をつくる。

各動物は、自分自身にとって意味のある事物しか見ないし、同じ事物でも、それぞれ別の性質を見ている。同じ一つの対象でも、いろいろの生きものによって、全く違った仕方で見られている。

各動物は、その種独自の環境世界をもつ。環境世界は動物の数だけ存在する。動物は、それぞれ異なった運動器官によって、環境から全く別々の意味をとらえ、全く別々の経験をしている。動物のもつ運動器官は、外部環境を認識する道具でもある。目ばかりでなく、手や足も外界を見る。

### 〔形態〕

宇宙の根源に働き出ている創造的な力は、動物も植物も含めたあらゆる生命体の身体として表現され、その中に働き出ている。

生命体の身体は意志の表現である。生命体が環境に挑戦し、環境をわがものとしようとするところから、身体諸器官の多種多様な形態は現れ出ている。

脊椎動物の体肢のように、それが水中の遊泳に使われようとも、陸上の歩行に使われようとも、空中の飛行に使われようとも、それは、移動しようとする同一の働きを表現している。その同一の働きが、形態学的には等価と見られる相同器官となって表現される。この

場合、その動物が身を置いている環境の違いによって、その機能も形態も様々な形で表現される。働きは一であるが、その表現形態は多なのである。

この宇宙は、原始的な原核生物から高等生物に至るまで、無数の生命体として、自分自身を、この地球上に表現する。生命体がもつ身体とその器官は、自己を自覚しようとする宇宙の表現である。各生命体が感覚器官や運動器官を通して世界を映し取り、独自の世界像をつくりあげるのは、いわば、宇宙の自己自覚を生きようとしているのだとも言えよう。

人間をはじめ、多くの動物が切り取ってくる知覚像は、また、世界自身の自己自覚像でもある。例えば、眼も、多くの視細胞から出来上がり、その視細胞は無数の蛋白質から形成されているのだから、眼とは、また、物質そのものの自己自覚でもあると言わねばならない。眼は、認識しようとする生命主体の表現であると同時に、いわば光の自己自覚でもある。

動物たちが長い進化の歴史の中で、種々の工夫をして発達させてきた眼の多様な形態を考えるなら、そこには、生命体の物を見ようとする激しい意志を感じないわけにはいかない。眼は、生命そのものの認識意志の表現である。宇宙に根ざす根源的生命力が認識作用として現われ出、それが物質の中を貫いて、複雑な視覚器官を形成したのであろう。

眼があるから、物が見えるのではなく、物を見ようとするから、眼は出来るのである。形態は意志の表現である。生命体に宿る宇宙の根源的な形成力は身体器官として表現され、外界の物質と連続する。

生命は、自分自身を多様な形に表現する。生命は多様化する統一性であり、多になる一である。生命は無限の形成力として働き出で、運動や消化、呼吸や循環、生殖など、様々な機能をつくりだし、それに合致した構造と形態を形成していく。

生命は、多種多様な目に見える種となって表現される。しかも、種の本質は形である。どの生物も、個体は分裂や生殖によっていずれ消滅していくが、しかし、それは、また、同じ分裂や生殖によって再生し、個体から個体へ形態が持続され、種が継承されていく。し



かも、それでいて、生命の形態は、ある一定の形にとどまるということはない。形は力の表現であり、その力は常に変化をその中に内包している。

生命は、何よりも多種多様な形として現われ、そして、それが誕生し、成長し、老化し、死んでいく流動的な過程である。生命は形であり、変化であり、生成である。

生物の形態の多様性は、環境による選択という概念によっては説明し切れない。生命は、同じ条件下にあっても、無限に多様な形態を取りうる。そこに、生命の自由がある。生命の自由は、一が一としてではなく多として現われるところにある。

動物にしても、植物にしても、生物の形態や色彩には、自己保存という目的以上の表現が見られる。それは、ただひたすら自分自身を多種多様な形で表現しようとする大自然の表現欲の現われでもある。この動植物の形態の多様性は、単に、動植物の環境に対する合目的な適応という概念では説明し尽くせない。同じ環境の中でも、無限に多様な形態の動植物が生み出されるからである。そこには、単なる目的論を越えた生命の自由な働きが息づいていると言わねばならない。

自然は、まるで器用な職人のように、様々な機能に合わせて、様々な形態を、一つの原型から自由自在につくりあげていく。自然は、主題と変奏を自由に繰り返して見事な作品をつくる偉大な音楽家である。

生命の進化の諸段階では、その段階を上昇するに従って、その形態表現の自由度はより増加する。貝類の微妙な模様から鳥類の美しい羽模様に至るまで、その自由闊達な自然の造形は、ほとんど自然の遊びと言ってもよいような自由な自己表現に満ちている。そこには、無限に自己自身を表現しようとする宇宙の神秘が息づいている。この地球上の動植物の身体形態とその外観の無限の多様性は、宇宙そのものの自己表現なのである。

## 〔行動〕

生命体は、環境から分かたれていると同時に環境に通じ、環境との絶えざる相互作用の中

で自分自身を維持していく。動物の行動は、この環境との非連続と連続を統一する生命体の作用である。

主体と環境は、身体とその行動によって、区別されるとともに連続する。身体を通じた動物の行動は、主体と環境の間であって、両者を媒介する。この行動の媒介があつて、はじめて、主体と環境は一つになる。

原生動物や節足動物や脊椎動物が思い思いに工夫して表現する定位と移動と摂食の一連の行動は、動物の自己保存にとつて必要不可欠な行動である。しかも、この行動は、植物の同化作用同様、主体が身体器官を通して環境を同化することに他ならず、主体と環境との連続性を表現している。

動物の行動様式は、その形態同様、絶えず変化する主体と絶えず変化する環境の相関によつて決定される関数であり、解がほとんど無限にある関数である。

身体を通して環境に働きかけることは、同時に、身体が環境から働きかけられることでもある。身体を通じた主体と環境の相互作用の中で、受動と能動は一致する。

身体器官は、主体が環境に対して行なう受動・能動両作用の道具であり、この道具において、生命主体の受動性と能動性は一つになる。道具としての身体において、生命主体の内と外は統一され、主体と客体は一つになる。しかも、動物たちは、これを身体行動として表現する。

生命主体は、目的への志向性であり、身体はその手段である。この目的・手段の連関の中で、環境は意味づけられる。かくて、主体と環境は、身体を介して一つになる。身体は、主体と客体、心と物の合一点なのである。

道具は、身体の延長である。というより、延長された身体である。この道具の使用によつて、動物の環境世界はより拡がり、動物はより環境に開かれる。道具の使用によつて、動物は環境に積極的に働きかけ、これを加工し、改変することさえできる。そのことによつ

て、動物の視野はより拡大し、環境の意味も変わり、場も変わる。

### 〔進化〕

生命は、絶えず変化するまわりの環境に対して自己自身を改変し、進化という形でも自由に新しい形態を創造し、たくましく生きていく。

生命の流れは川の流れるようである。流れる水は片時も一所にとどまらないように、生命の流れも絶えることなく変化していく。川の流れが、川底や川岸の障害物に絶えずぶつかって、その流れの方向を変えるように、生命の流れも、絶えず変化する状況に面し、その形態を変えていく。

生命の流れは、一つの変わらぬ自己形成能力によって駆り立てられており、環境の変化に対して、多種多様な適応の方向を見出し、流れを分岐させていく。その多様な適応にこそ、生命の自由と能動性がある。

脊椎動物の進化の過程は、生命そのものに、より多くの困難に挑戦し、それを乗り越えていこうとする意欲があることを物語っている。脊椎動物が水中生活から陸上生活へ移行したのも、必ずしも、陸上生活が脊椎動物にとって生きるのに適していたからではない。脊椎動物が地上の生活から空中を飛行する生活に移行した時も、同様である。それにもかかわらず、脊椎動物は、自分自身の体の仕組みを大幅に変容することによって、陸上へ這い上がり、さらに空中にまで飛び立った。そこには、より向上し、より発展しようとする生命の意志とでも言うべきものがある。

ある環境を与えれば必ずある一定の形態や行動が現われるというものではないから、生命体がどのような形態や行動をとりうるかということは予測することができない。そこに、生命の創造性がある。

生命体の生きんとする方向性そのものは必然であるが、生命体の取りうる形態や方向は偶然性に満ちている。しかし、偶然性を内包しているがゆえに、生命は自由でもある。生命

の根源の流れにおいては、偶然と必然と自由は一つである。

生命は、人生と同じように、将来どうなるか分からない非決定的未来に対して、どのような方向にでも自己自身を展開していく。そこには、自由があると同時に、不安もあり、創造性もある。

人の一生にも、思わぬ偶然によって、思わぬ人生を歩んでしまっていることがしばしばある。そこに、人生の偶然があると同時に自由もある。それと同じように、生命進化は多種多様な方向へと枝分かれしてきており、将来、どのような方向へ枝分かれしていくかは誰にも分からない。そこに、生命の自由がある。

進化をモデルに考えるなら、生命現象は逆戻りや再現の不可能な現象である。生命は、常に変化し、常に発展していく動的秩序であり、いつも、一方向的に不可逆に変化していく。条件を同じくしても、完全に同じものが、全く同じ仕方で繰り返されるといったことはない。不可逆な生命の時間のどの瞬間をとっても、生成発展していく世界の断面が現われる。

宇宙そのものが、その始元から絶えず進化し、生成してきた。宇宙そのものが不可逆なのである。生命現象も、その中で絶えず秩序をつくりあげていくとする不可逆現象である。片時も同じであることのない生成の流れの中で、生命の時間は不可逆である。だからこそ、それは生きられる時間となる。

生命現象はどこまでも一回的なものであり、歴史的なものである。生命は、空間上に諸物質を秩序づけて自己を表現するが、それはまた時間上での創造でもある。しかも、生命進化の長い歴史上で、その都度その都度生み出されてくる生命の表現形式は繰り返すことができない。

生命の時間が不可逆で一回限りのものであるとすれば、生命進化の道が将来どのような道筋を通って、どのような新しい形態を生み出すかは予知することができない。生命進化が取りうる道は無数にあり、樹木のように、どの方向にでも枝分かれしていくことができる。どのような方向へ流れていくかは、その時々々の環境と生命主体の相互作用による。そこに

は、偶然性が含まれる。そこに、生命進化の不確定性、あるいは非決定性もある。

生命の進化は、環境の変化に対する生命体の主体的な対応から生まれる。生命体は、時間面で、自ら主体的に変わり、新しい形態や機能を空間面に表現する。そのことによって、また、環境もつくり変えられていくのである。ネオ・ダーウィニズムは、進化の原理を自然選択と適者生存に求め、環境にのみ主導権を与えて、生命体の主体性を度外視したが、この考えには限界があると言わねばならない。

生命は、まわりの環境の変化に対して、自由に自己の形態を変化させる。そこにまた、生命の偶然性も、自由もある。自己保存という生命の必然は、環境の変化という偶然と出会うことによって、自由を発揮してやまない。必然と偶然の戯れの中にこそ、自由はある。この生命の自由は、機械論的決定論と目的論的決定論の両方を超える。

あでやかな模様をしたチョウの美しさは、同じチョウの異性を引きつけるために工夫されているのではない。チョウの異性には、その美しい模様は見るべきでないからである。それは、いわば自然の遊びとも言えるべきものであり、何かある目的をもった機能ではない。自然は遊びを好む。

動物の外観は、個体保存や種族保存という目的論を越えた造形意欲に満ちている。そこには、自然に宿る無限の自己創出能力と自由な創造力が感じられる。

### 〔時間と空間〕

生命体にとっての空間は、個体によって何ら影響を受けない古典物理的な絶対空間ではなく、絶えず個体によって影響を受ける。それは、個体相互間の関係によって形成される相對空間である。場とか環境と呼ばれるものは、この相對空間を前提する。

生命そのものは、絶えず変化しながら同時に同一性を維持する持続それ自身であって、それは、本来分割することのできないものである。これをあえて物質的な諸部分に分割すれば、生命そのものはたちまち見えなくなってしまう。

生命の時間は、瞬間瞬間の現在において空間と接触するとともに、過去と未来が結びつき、  
不断の創造が行なわれる場である。

不可逆性と一回性と非決定性という特徴をもった生命の時間は、生命にとっても、ある意味で苛酷な時間である。それは、何度も繰り返しができ、いつでも予測できる機械論的な時間ではない。だが、生命は、このような苛酷な時間を、瞬間ごとに過去を保存し、瞬間ごとに未来を蔵して、絶えず未来に向かって創造していくことによって生き抜く。  
不断の生成、それが生命にとっての永遠である。

生命は、空間的に自己を表現しようとするばかりでなく、時間的にも自己を表現しようとする一つの働きである。生命体は、どの瞬間においても、同じ状態であることはなく、絶えず変動している。そして、その一つ一つの状態を絶えず空間上に表現しながら、時間的にも変化していく。しかも、それ以前の過去の状態と、その後の未来の状態を、現在の中に同時に含みつつ変化していく。

ある環境のもとでの生命の進化は、遺伝子によって決定されているのではなく、生命体と環境との相互作用によって起きる。この相互作用によって、生命体は新しい形態を創造していく。生命体は、時間と空間が交差する場において、自分自身を変え、進化していく。空間における矛盾を、時間の次元に置き換えて解決していく。

生命体は、時間と空間の接点において絶えず生成変化していく。生命体は、時間的には持続として、空間的には身体として、宇宙を表現する。この時間と空間の接点のところで、不断の生成は生起してくる。それは、生成することが存在することに他ならない宇宙の自己表現なのである。

常に新しい状態や形態、構造や機能を形成する生命の働きそのものの中に、時空の交差はある。形成とは、空間上に新しい形を表現することであると同時に、時間的に生成していくことである。時空は、常に接触し連続している。その接触面・連続面において、創造作用は営まれる。

生命体は、空間的には形態として現われ、時間的には絶えざる変化・生成として現われるが、生命作用の瞬間瞬間のところで、この空間性と時間性は連続している。生命現象は、同じ一つの時空連続体、つまり宇宙の自己表現なのである。時空連続体としての宇宙は、永遠の過去から永遠の未来へ向かって、休むことなく生成変化していく巨大な流動である。生命体は、時間的にも、空間的にも、宇宙の子である。

生命の流れはリズムミカルな流れである。生命にとってリズムは欠かせない。生命の時間は脈打つ時間であり、単なる直線によって表象されるような物理的時間ではない。そこでは、同じような形のもが同じような間合いをおいて繰り返され、一定のリズムをもって途切れることなく反復される。

一個の生命体は、鏡のように、宇宙全体を映し取っている。無数の生命体は、それぞれ別々の視野から、宇宙を映し出す。そして、種々の生命体が、思い思いに宇宙のリズムと共振している。無数の生命個体の中に、無数の宇宙の映像がある。

宇宙は動くことなく存在しているのではない。宇宙そのものが、絶えず振動し、運動し、流動し、生成変化してやまない。この宇宙の生成する時間を、生命体も、その持続と変化の中に映し取っている。あるいは、宇宙の持続する時間が、そのまま、あらゆる生命体の一つ一つを貫いている。

あらゆる生命体の個体は、大宇宙を映す小宇宙である。各個体がもつ身体とその形態、身体諸器官、さらに、それを構成する細胞や遺伝子の一つ一つが、宇宙の自己表現なのである。しかも、この宇宙は常に生成流転している。あらゆる生命体は、この生成流転する大宇宙を映して、常に変動してやまない。生命を生み出しえなかつたなら、宇宙は永遠に孤独であつただろう。

### 〔生成流転〕

宇宙そのものが、一から多への常なる生成流転である。銀河集団は分化して無数の銀河と

なり、銀河は分化して無数の星や惑星となる。一から多へ、流動変化する生命の流れは、この宇宙の休むことのない生成流転の一つの表現である。

生命は、統一性における多様性、多様性における統一性、一の中の多、多の中の一を原理としている。生命ばかりでなく、自然一般が、限らない多様性とその統一性によって成り立っている。真の實在は、一であって、多である。

生命は、時々刻々変化しつつある純粋な活動である。活動という点では一であるが、絶えざる変化という点では多を含んでいる。生命は、多を含む一である。

生命体は、どの段階でも、部分の単なる総和としてではなく、部分部分が有機的に組織された全体として働き、常に部分には見られない新しい特性を発揮する。生命とは、部分を統合して全体を組織する自己形成能力なのである。

生命体は、各部分が互いに作用し合いつつ組織された全体である。この全体そのものは、機械論的方法によってはとらえることができない。全体とは、部分を内に含みながら、なお諸部分よりも以上の意味をもった統一だからである。各部分は、他の部分との相互作用、および、その相互作用によって形成される全体との相互作用によって動いている。このような動的秩序は、単に、部分部分に分割してそれを加算するだけではつかみえない。

生命世界においても、個と個の相互作用を通して場が形成され、その場においてまた個と個が相互作用する。そして、自ら変化し、変化するとともに、場そのものをも変えていく。個の中に場が働き出、場の中に個が働き出、場と個の相互作用の中で、場も個も変化していく。この生成の場においてこそ、生命の無限の創造性は生まれ出てくる。

自然は動かぬ秩序ではなく、動いてやまぬ秩序であり、生成発展そのものである。すべては変化し動いていく。生命は、常に生成発展する過程である。

生命は、矛盾律が示すような「一が一でないものである」ということはありえない」という世界に、いつまでもとまってははいない。絶えず変化しようとする生命の形成力は、それ



自身の中に一と他を同時に含んでいる。

生命は、絶えず変化し流動していく。それは、流動してやまない宇宙の自己表現である。ここでは、存在することは生成することに他ならない。宇宙は、休むことなく変化流動している。すべては、水の流れるように変化し、とどまることがない。生成こそ宇宙の原理である。生命体は、流動変化してやまない宇宙そのものの表現である。

確かに、生命体には、個体の消滅つまり死というものがある。しかし、生命体にとって、死は消極的なものではなく、むしろ積極的なものである。生命体は、死を通して新しい生命体を創造し、そのことよって、なお生命そのものを持続させていく。また、生命体には、種族の絶滅という悲劇もある。しかし、生命は、この種族の絶滅をも乗り越えて、新しい種を生み出し、生命そのものを持続させていく。生命は、絶えず死と再生を繰り返しながら、過去から現在へ、現在から未来に向かって、変化し存続していく。

死とは、宇宙生命への帰還に他ならない。肉体も魂も、ともに死を通して宇宙生命へと回帰する。そこから生まれ、そこへと死す以上、生と死は一つである。万物は、そこから生まれ、そこへ消滅し、永遠の循環を繰り返す。

生命体の死は自然への帰還である。しかし、この自然は生きた自然であり、それはまた絶えず新しい生命を生み出してやまない。

## 精神について

### 〔精神と物質〕

宇宙は絶えざる生成であり、それは、物質として自己を表現し、生命として自己を表現し、精神として自己を表現する。物質と精神を一つに内包しているこの地上の生命体は、活動してやまぬ根源的宇宙の象徴である。

心あるいは意識と言われる生命の働きは、生命体そのものがそこから誕生してくる物質そのものの根源に深く根を下ろしている。宇宙の根源的統合力が、素粒子から原子へ、原子から分子へ、分子から高分子へ、より複雑化していく物質の発展として現われ、そこから、より高度な自己形成体として生命体が誕生し、これが明確な形で意識作用を発現するのだと考えられる。

生命現象は、物質によって構成される諸部分の相互作用によって生じるものであるが、この相互作用そのものは、物質的部分には還元できない。意識や精神も、この物質の目に見えない相互作用、つまり、生命の働きそのものから生まれ出てくるものである。

宇宙は生成そのものであり、流動そのものである。それは死んだものではなく、絶えず自己自身を創造していく生きてきた過程である。だからこそ、諸物質によって構成されるわれわれの地球は、生命を生み出し、精神を創出した。精神の創出も、宇宙そのものの創造作用である。とすれば、このわれわれの地球ばかりでなく、生命を生み出し、精神を創出した天体は、無数に存在するであろう。

アメーバの行動を観察するなら、そこには、原始的な形での知覚作用もあれば、記憶作用もあり、思考や意志、情動作用さえあるように見える。ただ、それらが全く原初的で、明確に分化していないというだけである。

単細胞動物には脳神経系はないが、それでも、いくつかの異なった行動様式を選択し、それなりの自由度をもっている。脳神経系がなくても、原初的な意識はあり、心はある。心や意識の作用を脳の機能の反映とのみ断定してしまうことはできない。むしろ、選択し自由生きようとする意志、意識とか心と言われる働きの方が、化学物質でも、電位の変化でも、原形質構造でも、神経細胞でも、脳中枢でも、あらゆる手段を使って自分自身を表現しようとしているのだとも考えられる。

## 【脳や心】

脳を形成した動物は、どれも、多かれ少なかれ考える能力をもっている。この思考という

心の統合作用は、もともと、生命という働きそのものに起源をもっている。生命そのものが、本来、高度な統合能力によって成り立っているからである。どんなに単純な生物も、それが生命体であるかぎり、統合能力をもっている。統合能力がなければ、生命はもはや生命ではなくなるであろう。

生命体は、絶えず、主体と環境の相互作用の中で自己自身を維持していく。特に、動物は環境に開かれ、より多くの自由をもっているために、常に相異なる行動を適切に選択していかねばならない。心は、この主体と環境の関係を解釈しながら、選択の器官としての脳を道具として、適切な身体行動を選択していく。

脳は心の表現である。脳があるから、知覚や認識、記憶や判断、情動や思考が可能なのではない。知覚し、認識し、記憶し、判断し、思考し、情意を働かそうとするから、脳が出来、それがより高度化するのである。認識し判断しようとする意志が、脳を生み出す。脳の進化の背後には、生命のより向上しようとする志向性があり、より秩序化していこうとする宇宙の自己形成力が働き出ていると考えねばならない。

脳はまた、心の道具である。科学者は、心を探ろうとして、道具を調べているにすぎない。音楽を探ろうとして、楽器を調べているのにすぎない。しかし、道具がそのまま心なのではなく、楽器がそのまま音楽なのではない。楽器の構造をどんなに調べてみても、音楽の美しさは理解できないであろう。

脳生理学的にニューロンの内部構造を調べても、また、ニューロン間を流れる電気的・化学的興奮の流れを説明しても、心の作用は把握できない。さらに、情報科学的に、この複雑なニューロン・ネットワークの構造を説明したとしても、なお、心は、虹を追うようにつかむことができないであろう。

環境の物理化学的現象は、身体におけるニューロンの興奮に置き換えられるが、この置き換えられるものは情報である。生命体は、もともと、情報を交換しながら環境とかかわっている。情報システムとしての脳は、この情報代謝の最も高度な機構だと言えよう。環境と生命体の間でも、生命体内部でも、交換され、翻訳され、置き換えられていくような

情報が、心というものだと理解してよいであろう。脳は、この情報交換の道具である。

### 【意識】

物質は自分自身を秩序化し、自分自身を形成していくが、この物質の自己形成過程の中に意識の根は内在する。物質の中に意識はあり、物の中に心はある。意識されるものが意識するものになり、意識するものが意識されるものになる。それが宇宙の構造である。

人間の自覚的意識の源泉を尋ねていけば、動物がもっているような独特の感覚に至りつき、さらに、その根を尋ねていけば、植物や原始的生命のもつ無意識状態に辿り着き、さらに、その源泉は物質世界へとつながっている。

意識は宇宙の外にあるのではなく、宇宙の中にあり、宇宙の一部である。近代の科学は、この意識作用を物質作用から徹底的に排除し、物質世界を機械論的に記述しようとした。しかし、実際には、意識作用も宇宙の中にある。意識は、宇宙の不可欠な部分である。

意識の流れは、潜在的には植物の方向へも流れている。食虫植物に見られるように、植物でも、ときたま動物のような明確な意識的行動をとることさえあるのは、そのことによる。

動物も植物も、原生生物も原核生物もともに共有し、物質の中にさえ根を張っている自覚的意識以前の意識、生命そのものの流れと言ってもよいようなものを、われわれ人間は、睡眠から覚醒にいたる瞬間、あるいは、覚醒から睡眠にいたる瞬間のところで直観することができる。人間がもつ自己意識というものは、この広大無辺な意識の海の冰山の一角にすぎず、それだけが意識なのではない。

動物のもっている触覚、視覚、嗅覚、聴覚、味覚など、発達した感覚器官には、どこまでも外界を認識しようとする動物のやむことのない意志が宿っている。

意識は片時も同じ状態であることはなく、不可逆であり、持続そのものである。しかも、この持続する意識は目にも見えず、分割することもできず、拡がりも形ももたず、部分も

もたない。それでいて、それは、身体を動かし、環境をつくり変え、新しいものを形成していく働きである。

われわれは、自己自身の意識の内部を覗くことによって、不可逆な時の矢を理解することができる。意識の時間にしても、生命の時間にしても、現在は過去を背負い、未来を孕みながら、常に変動し、変化していく。しかも、この意識や生命も宇宙そのものから生み出されてくるとすれば、宇宙は本質的に不可逆だと考えねばならない。

諸情報を統合し記憶にもたらす心の統合力は、生命というものが本来もっている根源的な力の現われである。この統合力は、身体の統合力に通じ、単なるニューロンには還元することのできない生命の力である。

われわれ人間も、単なる脳神経機構による記憶ばかりでなく、遺伝子や免疫機構や代謝機構での記憶作用に多くを負っている。記憶は、ただ脳内のみ存在するわけではない。記憶は、生命体そのものがもつ基本的な機能であり、そのためには、どのような方法でも利用される。

生命体は、それぞれが、その段階ごとに、生命発生以来四十億年の長い歴史を記憶しており、その記憶によって環境に対処しているのである。

生命体は、単なる個体のみで生きているのではなく、個体の経験や知識や判断や思考のみで生きているでもない。あらゆる個体は、むしろ、その個体に内在する宇宙の偉大な形成力、あるいは生命力に支えられて生きている。多くの動物が本能に基づいて的確な行動をし、環境に的確に適応しているというありふれた生命現象の背後には、単なる一個体だけによる記憶ではなく、それを支える広大な生命の記憶の海がある。記憶は、単なる個体の記憶ではなく、生命そのものの記憶である。

動物は、深遠な生命の記憶作用に支えられて、環境との相互作用の中での確かな行動を行なうことができる。生命は、壮大な記憶の体系である。それは、われわれ人間の個体発生が、魚類時代からの種族発生を短時間で繰り返すことにも現われている。進化論上の記憶にし

ても、本能レベルでの記憶にしても、個体の意識レベルでの記憶にしても、生命活動は、広大な記憶の海の表面に現われる波のごときのものである。この生命活動を支える記憶は、遠く宇宙の記憶にまで通じている。

現在生存している各種の生命体は、どれも、現在の段階で、生命発生以来の長い歴史を記憶している。そして、その長い記憶の中から、全くどうなるか分からない未来に対して対処していく方法を見出し、新しい創造を行なう。生命にとっての時間は、現在の中で過去と未来が接触している持続の時間なのである。

物質は、常に生成発展し、自己自身を形成して、生命体を生み出す。そして、動物に至って、感覚・知覚作用や記憶・思考作用、さらに自然改変能力までもつに至った。この動物がもつ認識作用や自然改変能力は、生成発展する物質の自己自覚と自己形成作用の発展形態とも言える。

認識能力や形成能力は、物質の外にあるのではなく、物質の中にある。物質が物質を認識し、物質が物質を形成するのである。物質が生命を生み出し、自己認識能力や自己形成能力が増大するに従って、物質はより多くの自由度を得る。

認識するという働きは、物質の外にあるのではない。物質世界の内にある。とすれば、この物質は、心をもった物質なのである。あるいは、物質をもった心なのである。物と心、物質と精神は一つである。

## 【物と心】

生命体は、環境に適応して、自動的に動く。生命体は、外部環境から目に見えない意味を受容して、それに対して反応する。この意味を受容や反応が、心に他ならない。ある生命体が外部の環境に対して反応するとき、その生命体は心をもっていると言うことができる。生命体の身体は確かに物質に他ならないのだが、それは心をもった物質なのである。心と一つになった物質なのである。

生命体は、通常の物体から比べれば、はるかに高度な秩序をもった物質である。そして、この物質をより高度に秩序化する働きが生命という働きであり、この生命の働きの高度な発現が心なのである。

心をもつに至った生命体は、意志によって逆に物質を動かす。意志は、高度な統合能力であり、秩序化の能力であり、統一力である。これなくして、知覚、記憶、思考、情動など、われわれの意識作用は統一したものにはならないし、秩序ある行動も出てこない。意志という高度な統合力は、生命というものがもっていた統合力に源泉をもつ。しかも、それは身体そのものに源泉をもつ。

生命体の個体はもともと身体と精神の一つになったものである。それが、ある一定の方向から見れば物としても見え、他の方向から見れば心としても見える。生命体の個体は、ある一つの全体的なまとまりであり、それ自身は単なる精神でもなく、単なる身体でもない。現に働き出ているものは、単なる物でも単なる心でもなく、両方が一つになったものである。

精神と物質、心と身体は、同じものの異なった面であり、両者は相補的なものと考えられる。心の働きと身体的構造、精神の活動と物質の機能は相補的なものであって、心と身体、精神と物質のいずれが実体であるかと問うことは、そう問うこと自身適切でない。また、同じように、心と身体を明確に分離する身心二元論も不適切だということになる。

われわれは、唯物論からも、唯心論からも、二元論からも、それを前提にした相互作用説からも、脱却しなければならない。精神と身体は連続している。それは、時間と空間、精神と物質の連続体としての宇宙の表現なのである。

様々な形態をとる生命体の身体は、本来、そこで主体と客体が一つになり、精神と物質が一つになる場である。身体は、それ自身、生命の表現であると同時に、また、物質の表現でもある。身体は、物と心が一つになった宇宙の象徴なのである。

生命の流れの中では、物と心、心と物一つである。生命の流れの中では、物の中で心は

働き、心の中で物は働き出ている。われわれの心も、身体の各器官として自己自身を表現する。しかも、その器官は高度化した物質によって構成されている。

脳と心、物質と精神は、一枚の紙のように、表裏一体である。一枚の紙が、表なくして裏はなく、裏なくして表はないように、心なくして脳や身体はなく、脳や身体なくして心はない。一枚の紙は、裏に力を加えれば、表に影響が出、表に力を加えれば、裏に影響が出てくる。それと同じように、脳や身体に混乱が起きれば、心も混乱するし、心が混乱すれば、脳や身体に混乱が起きる。しかし、だからと言って、それらの働きは、心や脳の一方に還元されるものではない。また、別々のものが相互作用しているのでもない。両者は、一枚の紙のように、表裏一体をなして一つになっているのである。

この宇宙は、心をもった物、物をもった心によって成り立っている。宇宙は、物と心が一つになっている世界である。物質と精神は、同じ一つの過程の二つの面である。物質と精神は、表裏一体をなして、同じ一つの宇宙の働きを働いている。

物質と精神は、水と波のように一体であって、別々ではない。波は水に担われてエネルギーを伝えるように、精神は、物質に担われて作用を及ぼす。

実在は過程であり、出来事である。物質と言っても、それ自身、明確な形もイメージももたないエネルギーの場から始まって、素粒子、原子、分子、高分子、そして、生命体へと、常に生成発展していく。この物質を構成し、生命体を生み出し、個体を形成し、進化させる目に見えない力、部分を総合して調和のとれた全体をつくりだす高度な統合力、つまり心は、物質そのものの根源に根差している。

## 認識について (一)

### 〔感覚と知覚〕

感覚は刺激に対する反応ではない。感覚には運動が伴う。動物は、環境の中で動きながら、



自分自身の生き方を選択する。それに応じて、動物は、自分にとって必要なだけの情報を環境から抽出するための機能を感じ器としてもっている。

感覚刺激そのものは神経細胞の興奮にすぎず、瞬間ごとに与えられては消えていく信号にすぎない。感覚刺激から認識が成立するのではない。行動する身体が感覚刺激を統合する時、初めて外界の認識は成り立つ。

体性感覚は諸感覚の統合の基礎であり、しかも、この体性感覚の根幹は運動感覚にある。もしも、運動感覚を含む体性感覚の統合がなかったなら、あらゆる感覚はバラバラになり、統一したものをもたないであろう。

諸感覚の身体的統合によって、われわれは物を統合されたものとして受け取る。体性感覚を基礎とした諸感覚の統合によって、物は物になる。

共通感覚のもとで、世界は世界になり、対象は対象になる。共通感覚は、事物を事物にする地帯である。共通感覚の基盤が失われると、世界は単なる感覚刺激の束にすぎなくなり、世界を世界として構成することができなくなる。また、自己も自己として成立しない。共通感覚的統合なくして、自己の統合もない。統合はへわれ考えるにあるのではなく、へわれ感ずるにある。共通感覚がなかったなら、世界も自己も実在性を失うであろう。共通感覚は身体感覚であり、主体と環境を根源的に結びつける基盤である。

動物は、何より探索によって、環境から自分にとって有意義な情報を抽出する必要がある。つまり、知覚する必要がある。感覚的刺激が情報として意味をもつには、知覚が働かねばならない。感覚は知覚を前提し、知覚は環境の中で行動する身体を前提している。

動物は、環境内を動き回ることによって、環境の意味を把握する。動物は、単に対象を見て観察するだけでなく、行動して、対象が自分にとってどのような意味をもっているかを知る。動物は、多様な環境の中を、行為しつつ知覚し、知覚しつつ行為し、これらを調整しながら、環境に対して柔軟に適応していつているのである。

動物は能動的行為者であり、行為者であることによって知覚者である。動物は物を能動的に知るのであり、行なうことによって知るのである。知覚によって対象の意味は把握されるが、その把握そのものは行動を前提としている。

知覚は行為である。行為から知覚は出発するのであって、知覚から行為が出發するのではない。しかも、行為の変化とともに知覚も変化する。

香りや色彩や音色など感覚的性質は、事物それ自身に備わっている客観的なものでもなく、われわれの感覚器官が感じるだけの主観的なものでもない。バラの花そのものが赤いのもなく、われわれの眼が単に赤く見ているにすぎないのもない。感覚的性質は主体と環境の相関である。変化する行為と変化する環境の中で、主体と環境が出会う瞬間に生成してくる出来事が知覚である。

知覚は受動ではなく、能動である。受動はむしろ能動の結果である。活動することが知覚することである。

能動と受動、主観と客観、自己と世界が一つになっているところに、認識は成立する。認識は世界から独立してはいない。

運動によって知覚が成立し、その知覚によって、次の運動が引き起こされる。知覚と運動は常に循環している。この循環の過程で行為が調整され、調整されることによって意味ある行為が成り立つ。運動や行動は、脳からの指令によって引き起こされるものではない。

知覚は、主体と環境の循環的相互作用である。しかも、主体も変化し、環境も変化する。動く主体と動く環境の循環的相互作用の中に、知覚は生成してくる。

ここでは、能動的であることが同時に受動的であり、受動的であることが同時に能動的である。環境に働きかけることは、同時に環境から働きかけられることである。しかも、この過程の中で、われわれは環境を体験するばかりでなく、環境を体験している自己自身をも体験する。他者知覚は自己知覚を含む。動物も人間も、行為することによって、環境と

同時に環境の中に置かれている自己をも知覚しているのである。

自己の知覚も対象の知覚と同時に現われる。対象を見ることは自己を見ることである。物に触れるということは、触れている自己について知ることである。環境を知ることとは自己を知ることである。

自己の自覚は、主観が主観を自覚することによって生まれるのではない。自己の自覚は、主体が環境に能動的に働きかけることによって生まれてくるのである。

われわれは、行為することによって認識し、認識することによって行為する。認識するから行為が生み出されるのではなく、行為するから認識が生み出されるのである。

行為は身体を通してなされる。身体は認識の生み出される場であり、認識の背景である。同時に、身体は動く。身体は、何より運動する身体である。この身体の運動性から、知覚は生じる。

#### 〔記憶と思考〕

記憶は、身体行動と深く結びついている。記憶は、身体および身体の置かれた場所と深くつながっている。道に迷うものは道を覚えると言われるように、身体行動を通して覚えた記憶は永続する。記憶は、身体に組み込まれたものである。

過去の経験の記憶は、今ここでまさに起きつつあることにいかに対処するかということと深くかかわっている。記憶は単なる保存ではなく、環境の中でどのように行動していくかということと直結している。環境との相互作用の中で生きるということ、つまり、行為し認識する過程の中に、記憶という機能もある。

記憶は、脳の中のみ閉じ込められてはいない。記憶は、行為・知覚・環境の循環の中にあると考えねばならない。記憶も、主体と環境の相互作用という文脈の中でとらえねばならないのである。記憶は、環境に開かれた開放系である。

動物は、ものごとを身体で覚える。脳の発達は、むしろその結果にすぎない。記憶は行為であり、身体と深いつながりをもっている。

思考と行動は一体である。動物は行動しながら考え、考えながら行動する。身体行動を通じた思考こそ、本来の思考である。

人間も、動物も、主体と環境の相互作用の中で環境に適応していくために、種々の解決法を試みている。環境に対する行動の多様性こそ、思考の起源がある。環境の変化に対して行動を調整しながら、多様な対応のしかたを選択するところに、行動の柔軟性があり、このような行動の柔軟性こそ、思考が働いている。

識別や予見、推理や洞察など、思考は、心や脳の中だけで行なわれているのではない。思考も、環境との相互作用の中でとらえねばならない。主体と環境の相互作用の中で、主体が環境に対して柔軟に適応していこうとするところに、思考は働き出ている。主体と環境を媒介するところに、身体があり、行為があり、思考は、その身体行為と深く結びついている。

環境は、われわれがその中で生きていく場所として、われわれに与えられている。環境なくして自己はなく、自己なくして環境はない。自己は環境の中で行為し、行為することに よって体験し、体験することによって環境を理解する。

主体が環境に対して新しい対応のしかたを発見すること、それが洞察である。動物には、新しい行動様式を獲得し、新しい対象や新しい状況に適応する能力がある。この創造的能力は、対象の意味を転換し、自己と環境の関係を乗り越え、問題を解決していく。

行為によって、環境はその意味を変え、新しい環境の意味が発見される。それが発明とか発見と呼ばれるものである。そのことによって、また、環境そのものも変更されていく。

## 〔発達と進化〕

認識はどこまでも体験であり、行動によって獲得されるものである。そして、その体験による獲得こそ、学習である。知識を獲得するには、まずもって働きかけねばならない。知識獲得は行為であり、実践であり、能動的な過程である。そのような行為的認識が学習である。

認識とは活動である。主体が行為を通して環境に働きかけ、環境を切り取り、その新しい意味を創造する働きが認識である。認識は、環境の中で主体の行為である。行為と認識は不可分である。環境の中で主体が生きているということから、行為も認識も創発してくる。

発達の過程でも何より重要なことは、活動すること、行為することである。初めに行為があり、運動がある。知覚や認知の発達は、このような活動から生じる。発達するから認識が進み、行動が複雑化するのではなく、行動するから認識が進展し、発達もたらされるのである。

発達も、主体と環境の相互作用の中で考えねばならない。環境の中で、行動することによって認識し、認識することによって生き方を獲得する。それが発達である。

認識なくして生存はない。認識によって、与えられた環境が生存にとってよりよい環境かどうか判断され、環境への適応が可能になる。生命と認識は深く結びついている。よく知るものこそ、よく生きるのである。

生物は、生きのびるために、環境に応じて自己自身を変化させる能動性をもつ。それどころか、生物は環境に対して積極的に適応し、環境を作り変えてさえいく。生命は、よりよく生きようとする能動的系である。そこでの生物の側の自発性と能動性を無視することはできない。

生命の進化は学習過程でもあり、認知過程でもある。生命体そのものが自らの行為を通して環境を学習し、認識をより深め、それを記憶し、その情報を次の世代へ伝達する。生命の進化は、認知能力の増大化と複雑化の過程でもある。

認識は、環境から受動的に情報を得る過程ではなく、むしろ環境に対して能動的に働きかけ、環境から積極的に情報を見出す過程である。環境の認識には、生命主体の能動性がなければならぬ。よりよく行動し、よりよく認識しようとすることから、進化も起きる。

すぐれた形態と機能をもっているから、すぐれた認識と行動ができ、生存していけるのではなく、むしろ、生存するためによりすぐれた行動と認識をしようとするから、よりすぐれた形態と機能が形成されてくるのである。動物は行動によって認識し、認識することによって進化する。

初めに行動がある。行動は、進化の結果ではなく、原因である。動物の形態形成そのものにも、行動は深い影響を与えている。

行動の進化は認識の進化をもたらし、認識の進化は形態の進化をもたらし、形態の進化は行動の進化をもたらす。行動・認識・形態の循環的な進化によって、動物はより創造的に生きようとしてきた。

進化とは、動物主体の向上しようとする努力である。動物主体の内発的な力と環境との呼応によって、進化は起きるのである。主体と環境の相互作用の中に行動と認識はあり、その行動と認識なくして、進化はありえない。

道具は身体の延長であり、身体の仕事を増大する手段である。道具は、それ自身、本来環境に属する外在物であるが、これが道具として動物主体の身体図式のうちに組み入れられると、そのことによって、道具は身体の一部となる。

人間ばかりでなく、動物の視野は、道具の使用によって拡大する。環境の認識とは、行為の可能性についての気づきであり、それは、道具の発明によって大きく広がる。行為によって世界は開かれるのである。

それどころか、道具の使用によって、世界の意味さえ変わる。道具はもともと環境の意味

を転換することによって発明されるものであるが、同時にまた、道具の発明によって、環境の新しい意味が発現してくる。

動物の道具の使用や製作能力は、生命主体が環境に働きかけ、環境を改変し、環境を創造していかうとする能動性の表現である。道具の使用も製作も、未来を切り開く生命の創造的働きなのである。行動は生命の飛躍である。

道具の発明によって、環境の意味や価値が大きく変化する。その面から言えば、環境の意味や価値は、環境の中に客観的にあるのではなく、主体によって積極的に創り出されてくるものである。

人間が技術的能力を飛躍的に開発したこと、人間が世界を自覚したこととの間には深い対応がある。人間が火を発見したとき、人間にとって世界は一変したに違いない。技術を通して、対象は、われわれ人間に新しい相貌をもって迫ってくる。

人間にしても、動物にしても、それがもつ図式や仮説は道具の発見や製作によって変化し、それとともに世界の意味も変化する。人間も、動物も、身体や道具や介在物を通して外界に探りを入れ、外界を知り、図式や仮説を修正する。特に、動物が高度化するにしたがつて、図式や仮説の変更はより柔軟になり、世界の意味がより自由に変更されるようになる。図式や仮説の変更可能性にこそ、自由がある。

科学の探究の歴史は、いわば人間の探索行動の歴史である。動物が探索することによって外界を認知するように、人間も、観測し実験することによって、世界の新しい意味を見出すとしている。しかも、世界の新しい意味の抽出は、次の新しい観測や実験を呼び起こし、さらに、次の新しい認識をつくりだす。科学も、このように、行為と認識の循環から生成発展していくものと考えねばならない。

近代科学の実験は、その時代の技術的成果の粋を集めて、実際に自然の中に自らの行為を投げ込み、その行為に対する自然からの応答を聞くこととするものであった。ここでも、行為する主体と応答する環境は分離していない。近代の自然科学でさえ、人間と自然、主体

と客体を区別するデカルト的な二元論にすべて基づいていたわけではないのである。科学的探究の現場は、むしろ、主体と環境の非分離に立脚していた。

環境の意味と価値は、その中で行為する主体の変化によって変わる。動物主体の発達や進化という事実を考えるなら、環境の意味や価値はそこに客観的にあるものではなく、主体と環境の相関の中で積極的につくりだされてくるものと考えねばならない。主体は、環境の中で行為することによって進化し、進化とともに、環境の新しい意味を生み出していく。意味や価値は、主体と環境の循環的な相関から創発してくるのである。

環境は常に変動し、それに応じて主体も進化していく。だから、主体は、単に世界を所与のものとして受け取り、その中から意味と価値を抽出するだけにとどまってははいない。主体は、むしろ環境の中に新しい意味を創造していく。

主体と環境の相互作用の中にこそ、認識は生成する。主体と環境は相互に限定し合い、連関し合っている。認識は、認識する主体と認識される環境の関係である。しかも、主体も動き、環境も動き、関係も動くから、動く主体と動く環境の呼応にこそ認識は成り立つのだと言わねばならない。

主体は環境から切り離された存在ではなく、環境の中で経験を積み成長する生きた主体である。主体は、環境の中で活動することによって、環境を認識する。認識者は認識される世界の中にあつて、認識される世界との相互作用の中で、認識を成立させている。主体と環境は別々に存在するものではない。

主体と環境は相互作用し合う過程である。主体は環境に働きかけ、環境は主体に働きかけ、主体も環境も螺旋的に変化していく。そこには、環境に働きかけることによって環境から働きかけられるという循環がある。行為と認識も、主体と環境の循環的な過程の中にある。

主体は、行為によって認識し、認識することによって発達し進化する。しかも、この発達と進化によって新しい世界が開かれ、行為も認識も新しい段階に飛躍する。こうして、主体は環境を創造する。環境が主体をつくと同時に、主体が環境をつくる。環境が主体を



形成するとともに、主体が環境を形成する。この相互作用から、主体も環境も自己形成していく。

## 認識について(2)

### 〔相互連関性と認識〕

認識も、世界の相互連関性の中でとらえねばならない。相互連関性の世界では、どの出来事も連関の網の目の中に置かれているから、一つの事象の中には他の無数の事象が映し出されている。世界は、万華鏡のように、無数の事象が相互に映し合う相互射映の世界である。認識は、事象と事象、事象と世界の相互射映の事態の中に成り立っている。各事象が各視点から世界と事象を映し取ることが、認識である。事象と事象の関係の中に、認識は働き出ているのである。

素粒子、原子、分子、生命、惑星、星、銀河など、宇宙の中のすべての事象は他のすべての事象を映し、かくて宇宙全体を映す。万物は認識し合い、感知し合いながら、生成しているのである。

万物の映し合いの世界としての相互連関性の世界では、一が多を映すとともに、多が一を映すから、まったく同じ一つのものでも、それを見る視点の違いによって、それは異なった相で立ち現われてくる。一つの事象が各事象のそれぞれの視野から眺められ、多様に受け取られるのである。

一つの世界の中で、多くの観測者が、それぞれのパースペクティヴから世界を映している。そのため、それぞれの観測者が描く世界は様々に異なつて現われるが、しかし、同時に、それは同じ一つの世界の現われでもある。一は多として現われ、多は一を映すのである。

各事象は、それぞれの違ったパースペクティヴから、同じ世界を違ったしかたで表現する。各事象は、世界をそれぞれに異なつた視野から映し取りながら、相互に映し合い、世界を

形成している。各事象は世界の中にあり、世界は各事象の中にある。世界は、世界の中の各事象が描く無数の世界像の映し合いからできているのである。

世界は、常に特定のパースペクティヴのうちにか現われない。世界は、私には、私の視点から見た世界の相貌しか見せない。したがって、われわれには、世界を完全な形で把握することができない。認識は完結しないのである。

異なった身体と行為に応じて、世界も異なったしかたで現われ、異なったしかたで解釈される。それぞれの身体的行為的パースペクティヴから世界を映し取り、世界を解釈することが認識である。

世界は、相互に関係し合う出来事から生成してくる。実在は関係の中でしか立ち現われない。知覚も、その一つの局面である。知覚する主体も、知覚される客体も、世界の相互関係の一部であり、出来事である。

知覚が成立する関係性の中には、知覚されるものも知覚するものも含まれている。知覚されるものと知覚されるもの、知覚されるものと知覚するもの、知覚するものと知覚するものなどの諸連関の中で、知覚は成立するのである。知覚は、知覚者自身をも含む事物の関係性の認知なのである。

知覚は出来事である。知覚するものも、知覚されるものも、それらの関係も、それらを取り囲む状況や場所も、すべてが含まれている出来事である。それは、それら多くの出来事の諸連関から創発してくる出来事なのであって、その中に世界の生成過程そのものがある。しかも、知覚者は、この出来事に積極的に参加している。

認識とは、客観が主観に投射されることでもなく、主観が客観を構成することでもない。むしろ、客観が客観を感じること、それが認識である。眼が光を見るのではなく、光が光を見るのである。

出来事は、事象間関係の結節点に生じるものである。出来事がまず先にあって、そこから

主観も生じ、客観も分かれ出てくると考えねばならない。

われわれは、主観—客観の二元論から脱出し、主客関係以前に帰り、主客二元論を克服しなければならぬ。主観や客観を解体し、それらを出来事という働きとして見るなら、世界には、出来事の相互連関のみが生起しているだけである。主観も客観も出来事から生成してくるのであって、出来事そのものの中には、主客の対立はない。

#### 〔世界内観測と世界内行為〕

われわれは、世界の外に立って世界を観測しているのではなく、世界の内にあって世界を観測している。しかも、身体や観測装置を通して観測しているから、その観測が観測事実に影響を及ぼす。

観測は一つの行為なのである。われわれは世界内観測者であり、世界内行為者なのだから、われわれは世界を攪乱する。観測されるもの外に観測するものがあるのではなく、観測されるものの中に観測するものがあるのである。われわれは渦中を生き、渦中で知る。渦中で行為し、渦中で認識する。

渦中の運動と変化の中には、デカルトが考えた時空の座標軸もなければ、ニュートンが前提した絶対時間も絶対空間も存在しない。逆に、渦中の運動や変化の方が空間と時間を紡ぎだしてくる。事物が空間と時間上を移動することが、運動や変化ではなく、むしろ、運動し変化することそのことから、空間と時間が生成してくるのである。

観測者が世界の中で身体を通して行為することによって、観測者の視点は形成され、そこに観測者自身の描く世界像が自ずと現れ出てくる。

知覚者が世界内で行為し生きていくことから、知覚も見出されてくる。太陽の光の中で、目も行為しているのである。

動く環境の中での動く主体の世界内認識、それが知覚である。われわれは世界の中で動き、

その動きの中で世界を観測し、世界を生きている。世界の中には、知覚者自身も含まれている。人間も動物も、写真で風景を見るように、世界の外から世界を見ているのではなく、世界の中で世界を見ているのである。

観測されるものの中には、いつも観測するもの自身が含まれている。観測されるものと観測するものは分離することができない。

われわれは、世界の中で行為しつつ認識し、認識しつつ行為し、現実に参加している。認識は行為であり、行為は形成である。行為によって世界は変わる。われわれは、単に客観的対象を外から認識しているのではない。

動物も人間も、世界から分離された観察者ではない。認識とは、外界を単に表象することではない。

世界内観測者であるわれわれは、世界を世界の外から見ることはできない。世界を世界の内から見ることは、世界内認識なくして、真に世界をとらえることはできない。

われわれは世界内観測者であり、世界内行為者である。観測は行為である。世界の中で観測するという行為は一つの行為である。したがって、観測することは、現象をある一定方向に導くことにもなる。観測される現象を正確に把握するには、その中に含まれている観測者の行為をも考えねばならない。

運動する身体を通して世界に働きかけ、世界の中に自己自身を投入することによって、世界は立ち現われてくる。われわれは、世界内で身体を通して行為している生きた主体である。だから、行為の変化に応じて、世界も変化する。

この宇宙は、観測者とは別のところに存在しているのではない。われわれ観測者は、身体を備えた主体として、この宇宙という舞台に身を投げ出して行為し、行為しつつ認識している。劇場の中に身を投じている観客のように、われわれは世界の中に身をもって飛び込み、その場に居合わせることによって世界を認識している。われわれの認識は、どこまで

も行為的実践的認識である。

主体は、世界を世界の外から眺めている認識主観ではなく、どこまでも、世界という舞台に自ら登場し、身を挺して演技している行為する主体である。この行為する主体によって、世界は認識される。しかも、世界と出会うこの認識主体も、世界自身が創ったものである。

われわれは世界の中にあつて世界を見る者であり、しかも、その見ることが世界に影響を与えている。観測するものが観測されるものに影響を与え、観測されるものが観測するものを触発し、観測者と観測対象は相互に作用を及ぼしながら、世界の生成変化という劇を演じている。観客が劇の進行にも参加するように、観測者は、観測するという行為を通して、世界の自己形成に参加している。観測者は世界の劇の共演者なのである。この宇宙は参加型の宇宙なのである。

科学者が行なう観測や実験でも、観測や実験という行為が世界の中に投げ出されることによつて、そこに世界が現われ出てくる。その経験の生成を体得することが、科学の観測や実験という行為である。それは、世界外観測でも、世界外行為でもなく、それ自身世界の自己形成に関与している世界内観測であり、世界内行為なのである。

もともと、科学自身が世界内認識であり、世界内行為である。実際、科学者は、観測機器や実験装置という手段を通して、観測や実験という行為を世界の中で行なってきた。だからこそ、観測機器や実験装置の発達にともなつて自然も別の様相をもつて現われ、それに応じて、科学自身が自分自身のパラダイムを変えてもいかねばならなかったのである。

自然科学は、観測や実験を通して自然を操作する。科学の観測や実験も、それ自身、観測するものと観測されるものの相互作用の中にあり、現象を攪乱している。

近代科学では、観測者や実験者は自然の外部におり、その記述も、世界の外部の視点からなされている。しかし、科学者と自然は互いに独立しているというこの近代科学の仮説は、実際には成り立たない。科学者だけが、まるで世界の外に超越する傍観者のように振る舞うことはできないのである。観測対象は観測主体から分離することができない。

自然科学の観測や実験も一つの世界内行為であって、それは世界を乱すとともに、それ自身世界の自己形成に参加している。実験や観測による客観的な検証という近代科学の手続きは、そのままでは成り立ちえない。

自然科学の認識も、本来は、行為的実践的認識である。自然科学の観測や実験も、身体行為を投げ込むことによって自然を知ろうとする行為である。そのことよってのみ、自然はわれわれの前に投げ出される。自然科学者たりとも、まるで写真を見るように、世界外存在者として振る舞っているのではない。われわればかりでなく、動物や植物も、そして物質さえも、世界の中にあつて世界を観測し、世界の自己形成に参加している行為者である。

科学は、歴史的に生成変化していくものである。科学の営みそのものが、世界の外ではなく、内にあるからである。科学自身が、道具の発達や発見による飛躍によって、自然の認識を変えてきた。それは、主観と客観の分離を証明するどころか、われわれが世界内観測者、世界内行為者であること、そして、観測と行為によって世界の見えは変わるといふことを証明している。認識する主観と認識される客観は分離することができないのである。

近代科学は、デカルト以来の主客二元論から始まったが、しかし、このデカルト的切断はもはや成り立たない。存在と思惟、客観と主観は深く結びついている。

技術という世界内行為によっても、世界は作り変えられていく。技術は、それ自身、世界の自己形成に積極的にかかわっている行為である。しかも、そのような技術的能力を持った生きものを世界が生み出したのだとすれば、世界は、世界自身を作り変える力を自分自身でもっていることになる。

人間が試みている技術的営みも、それ自身宇宙の自己形成の一環であり、宇宙の自己自覚の一軌跡なのではないか。人間が、物を作ることによって、自分自身を自覚するように、宇宙も、自分自身を形成することによって、自己を自覚しているのではないか。

生きているものは、その行為によって、自分自身の住む世界を作り変える。しかも、その作り変える能力をもったものを、世界自身が生み出してきた。世界は、世界自身を認識するものを自らの内に生み出すばかりでなく、世界自身を改造するものを自らの内に生み出す。世界によって作られたものが、世界を作っていくのである。生きている世界とは、そのような自己認識的で自己産出的な世界なのである。

われわれは世界の中で行為し、世界を形成している。行為は世界を変える。しかも、行為は選択である。選択は対称性の破れを生み出し、その破れがまた別の対称性の破れを産出する。かくて、世界は不可逆な歴史をもち、消し去ることのできない履歴を形づくる。だから、この世界の出来事は本来一回きりのものであり、繰り返すことができない。近代科学は、繰り返しの可能性から自然の法則性を見出そうとしたが、この科学現象の再現性にも疑問が投げかけられねばならない。

どんなにわずかであっても、行為は仕事をする。そして、仕事は、宇宙の構造に変化を引き起こす。私があるものをちよつと拾い上げただけでも、それだけ私は仕事をし、宇宙の構造を変化させたことになる。われわれは、世界の中で行為することによって、世界の生成に参加しているのである。

人間や生物ばかりでなく、原子や分子も感受し、運動している。そして、この運動が世界そのものを変えていく。世界内観測と世界内行為は、新しい経験を内から創発していく。

物質から人間まで、すべての存在者は、単なる世界内存在者にとどまらず、なにより世界内観測者であり、世界内行為者である。誰も世界の外にとどまることはできない。われわれが観測し行為するということは、世界の外ではなく、世界の中に投げ込まれて観測し行為するということである。だから、それは世界を根底から変革していく。ここでは、外は常に内に組み込まれ、内と外の区別はなくなる。

世界を動かすものが、世界の中にある。しかも、そのような行為者を世界自身が生み出しつつける。そのような世界では、世界が変わることによって自己が変わるとともに、自己が変わることによっても、世界は変わる。自己自身の行為は、無限の事象の相互連関性を

通って、世界全体に及ぶからである。ここでは、自己は世界に包まれつつ世界を包み、世界に組み込まれつつ世界を組み込んでいる。

宇宙が宇宙自身を認識する者を生み出したのも、宇宙が自己自身を自覚するためであったであろう。われわれが世界内認識者として世界を認識しようとしているのは、世界の自己認識でもある。われわれが宇宙の中に生きているとともに、宇宙もわれわれの中に生きている。

不断に進化し、絶えず新しいものを生み出してきた宇宙には、いつも自己観測が働いていた。宇宙自身が自己自身を認識することによって、宇宙は一步前へ前進する。この宇宙の自己認識の役割を宇宙の中の観測者が担うことによって、観測者は宇宙の生成に参加しているのである。

素粒子から人間まで、どれも、世界内にあつて世界を観測する世界内観測者である。世界を世界内において観測することが認識である。自己は世界の中にあつて世界を映し、その映された世界の中にまた自己は映されていることになる。部分の中に全体は映し出され、映し出された全体の中に部分はまた映し出されている。

自己は世界内観測者であり、世界内行為者である。この宇宙は、自己と世界を認識する自覚者を、宇宙自身の中に生み出したのである。われわれ人間の世界認識と自己認識は、世界の自己自覚でもある。自己が認識することは、世界が認識することであり、自己が行為することは、世界が行為することなのである。

この宇宙は、それを観測する観測者自身をもその中に含んでいる。そのため、その観測者は、宇宙を観測するとともに、その宇宙の中に自分がいるということをも観測し、その自分が宇宙を観測しているということをも観測しなければならない。こうして、この世界内観測は無限背進に陥り、完成しないことになる。

二つの鏡を並べて、その中で蝋燭の灯を映すと、その蝋燭の灯は無限に射映されていくように、世界内認識はいつまでも未完成である。認識されるべき世界の中に、認識する自己



も含まれているからである。自己が自己を認識するということは常に矛盾を含み、無限背進を免れないが、しかし、この無限背進を恐れるべきではない。

大海原に波が立つことによって舟が動く。と同時に、舟が動くことによっても波が立つ。道があるから私は歩く。だが、私が歩くことによっても道は出来る。世界が動くことによつてわれわれは動く。しかし、われわれが動くことによつても世界は動く。われわれは、そのような世界内行為者なのである。

春が来ることによって、花が咲く。しかし、花が咲くことによつても、春が到来する。

### 〔自己形成的世界〕

この世界は、自己自身を絶え間なく形成していく創造的世界である。世界がそうであるのは、世界自身の中に、世界を認識する世界内認識者が含まれているからである。

あらゆる要素は、他者を認識する主観でもあり、他者から認識される客観でもある。この世界は、そのような認識者を含めた世界である。認識者を含めた世界は、不断の運動の中にあつて完結することがない。認識者自身が世界を乱し、世界の自己形成に参加しているからである。

機械論的世界観の致命的欠陥は、その世界の中に観測者が含まれているということを見無視していることであろう。そこでは、物質の各要素は機械のパーツのようなものであつて、互いに感知したり認識したりはしないということが前提になつていた。しかし、実際の世界は、その中に観測者を含んでいる。物質でさえ他者を感じ、相互作用し、その相互作用から新しく情報をつくりだす。このような系は、機械論的自然観では説明することができない。

相互作用から自己自身を形成する世界においては、各要素は互いに感知し、互いに知覚し、互いに認識し合つている。この相互認識なくして、自己形成はありえない。ここでは、認識することは認識されることであり、認識されることは認識することである。

世界は、多対多の関係から動的に新しいものを創発していく自己形成的世界である。このことを基礎付けるには、世界を、出来事と出来事の相互連関性と相互内在性から形成される世界とみ、この相互連関性の中に相互認識と相互行為を位置づけねばならないであろう。認識と行為は、共に世界の中であって、万物の生成を助けている。

この宇宙は、また、認識のネットワークでもある。ここでは、あらゆる要素が至るところで情報を交換し合っている。この相互認識と相互作用から、世界の自己形成は起きる。

宇宙の進化、物質の形成、生命の誕生と進化、それらすべての過程に認識作用は働いている。そして、その認識作用が自己形成的世界をつくっていく。

情報とその認識なくして、組織化は起きない。秩序を自分自身で形成する系は情報系でもあり、認知系でもある。

多様な要素の相互連関によって成り立つ世界では、あらゆる要素は相互に映し合い、相互に浸透し、相互に共鳴し合っている。そこでは、海の中で音波を出し、互いに連絡し合いながら集団行動をとっている魚たちのように、各要素は相互に認識し合い、相互に結合している。そのことによって、世界は刻々として新たに創造されているのである。

このような世界では、もはや古典力学的な因果律による運動理解は成り立たず、むしろ、共鳴とか同調という概念によって世界をとらえねばならないであろう。この宇宙が生み出し形成したものは、互いに共鳴しながら、自己自身を創造していく。そして、そのことによって、宇宙自身が自己形成していく。認識という行為そのものが、宇宙という大河の流れそのものの中にあり、同時にその流れをつくつてもいる。自己形成する宇宙の不可逆な流れと認識は深く関係している。

自然は、自己自身を形成する秩序形成能力をもっている。そして、それは、自然を構成する無数の要素の相互認識によって引き起こされる。このことを突き詰めていくなら、主観と客観、意識と対象は分離することができないということに至り着く。つまり、客観とか

対象といわれるものそのものにも、感受作用や知覚作用、認識能力や判断能力を、組織化の階層の程度に応じて認めていかなければ、自己創造的な自然はとらえることができない。主観と客観、意識と対象を分離したデカルト的二元論を克服しないかぎり、へ生きた自然は理解できないのである。

真の實在は、主観を含む客観であり、生成する存在である。意識や主観が働いているからこそ、生成が起きるのである。

實在は活動である。万物は常に動き変化する。世界には生成変化するものしかない。変化するものを変化するものとして、動くものを動くものとしてとらえねばならない。変化し運動するものを、存在からではなく、生成そのものからとらえねばならない。世界は不連続の流れと変化そのものである。そこには、不滅の実体などというものはない。

知ることは在ることと一体になって、それを成ることたらしめている。存在から認識を切り離してはならない。存在と認識を切り離れたところに、近代科学ばかりでなく、近代哲学の最大の禍根がある。

存することは知ることであり、知んことは為すことであり、為すことは成ることである。為すことよって知る。それが、在んことを成ることたらしめている。知んことをなくして在んことはなく、為すことなくして成んことはない。

## 歴史について

### 〔歴史と変動〕

歴史の諸要素は独立したのではなく、相互に浸透し、共振し、ある分岐点に達すると、急激にその局面を変えていく。ここでは、諸要素が相互作用し、指数関数的な飛躍を起こす。われわれの歴史が急激に変動し、秩序の崩壊や形成を起こすのは、歴史がそのようなダイナミズムに基づいているからであろう。

歴史の大きな変化は、その中のちょっとした変化から起きる。片隅で偶然に生じた事件、片隅で偶然になされた発明や発見など、わずかなゆらぎが、結果として、戦争や革命など歴史の大変動をもたらす。われわれの歴史においては、すべての出来事が連鎖し反応し合っているから、片隅の些細な動きでも、相互連関性の網の目を通じて増幅され、大きな変動となって現われる。

外からの攪乱や内からの攪乱に出会って安定状態が保てなくなると、そこでのゆらぎが増幅されて、急激な変動が訪れる。一旦激動しだすと、予測不可能な変動に見舞われる。その動きは、もはや誰にも止められない。

人と人、人と物、情報と環境など、複雑な相互作用によって成り立つわれわれの歴史は、発展や成長、安定や挫折、崩壊や衰退を繰り返している。しかも、安定期でも崩壊の萌芽はあり、崩壊期にも秩序形成の努力はなされている。

歴史は、無数の出来事が相互に依存しながら生成消滅する過程によって成り立っている。ここでは、原因と結果は再帰的に循環しているから、これまでのような歴史の単純な原因追究は不可能である。むしろ、原因より過程を重視すべきであり、しかも、その過程は機械的な因果律では解けない。

歴史の動きを、外からではなく内から、歴史を動かしている当事者から眺めるなら、当事者自身は、いつも五里霧中の状態で試行錯誤を重ねながら動いている。だから、当事者には、もともと、結果に対するそれほど明確な見通しがあるわけではない。むしろ、事実が先行し、それに対して右往左往しながら対処しているうちに、当事者のうち誰一人として計画も意図も予測もなかった巨大な結果が生み出されていくのである。

無数の人間が相互に作用し合っている人間社会は、間断なく外部から人や物、金銭や情報が入り込み、平衡から遠く離れた状態にある。そのため、それは、環境に適応するために、みずからが住む社会の構造や機能を常に作り変えていく。

歴史は、混沌から秩序へ、秩序から混沌へ、崩壊と形成を繰り返しながら変動していく。秩序の中に無秩序があり、無秩序の中に秩序があることによって、歴史は変動する。混沌と秩序の動きが螺旋的に絡み合っており、歴史は動くのである。

人間の歴史には常に内部にゆらぎがあり、それが環境の変動に応じて増幅され、ある分岐点を超えると、新しい形態と構造を生み出していく。

そのような観点から歴史をながめるなら、反逆者や異端者の役割もよく見えてくる。反逆者や異端者によって一つの社会の内部に起こされた逸脱傾向は増幅され、それがもはやその社会の既成の秩序維持機構によって律しきれなくなるとき、その社会は崩壊し、新しい形態と秩序が生み出される。これら反逆者は、旧体制との抗争も辞さず、社会を変革していく。反逆者は、社会の崩壊と形成の動きを同時に促進し、社会の進化や発展に必要な原動力となる。

歴史は、生命同様、環境との相互作用から自己自身を形成する自己創出系である。われわれの歴史は、環境との相互作用を通して、絶えず新しい秩序や構造を創発していく。歴史は新しい環境をつくっていくとともに、そのつくられた環境がまた新しい歴史をつくっていく。歴史と環境は、相互に限定し合いながら、互いに変動していくのである。

人間の歴史は、多くの攪乱要因によって悩まされ迷いながら自己形成してきた努力の軌跡である。歴史は常なる生成の世界であり、終わりのない変転である。

歴史は、間断なく生成する出来事から形成されている。ただ、出来事だけが生起してくる。歴史は起こったことと起きることによって成り立ち、しかも、起きることは、それまでの起こったことすべてを含んで立ち現われてくる。ある一つの出来事が生起してくるには、それ以前のすべての出来事が縦横に関係し、孤立した出来事は存在しない。そして、出現してきた一つの出来事は、それ以前の出来事を集約するとともに、新しい要因を一つだけ付け加え、次の出来事に連なっていく。

出来事は、現われたかと思うと、すぐに消滅する。人の行為も、現われ出たかと思うと、

すぐに消え去る。出来事は不断に消滅している。出来事は瞬間瞬間の一回きりの出来事であり、一瞬しか存在しない。出来事の瞬間ごとの離合集散、それが歴史の推移であり、生成変化なのである。

歴史を形成する出来事は継続的に更新されていく。そして、一つの新しい出来事が生成してくることによって、他の出来事やそれまでの出来事のあり方が変化する。新しく出現してきた出来事は、新しい事態をつくり出す。歴史はあるのではなく、成るのである。歴史は、休むことなく新しきに向かって前進する運動であり、展開なのである。

出来事は関係においてある。他の出来事との関係から切り離された出来事は存在しない。出来事は、他との関係の中で生成する。そのため、一つの歴史的事件の価値も、次の新しい事件が登場することによって、大きく評価が変わる。出来事と出来事との関係は絶えず変動しており、その関係の変動に応じて出来事の意味や価値も変動し、その変動とともに、また出来事も変動する。こうして、歴史は常に変動する。

歴史は、無数の出来事の相互連関から成り立っている。出来事は、出来事の相互連関の網の目に出現し、それまでの諸関係を取りまとめ、何かを引き起こす。相互連関の世界では、出来事は他の出来事との連関において規定されているから、一つの出来事をそれだけ切り離して取り出しても、それだけでは理解することができない。出来事の意味は、出来事と出来事のつながりからしか把握できない。

相互連関の世界では、一つの出来事は他の出来事に影響を与え、その影響がまた他の出来事に及ぼされ、こうして生成変化はやむことがない。出来事と出来事は相互に浸透し、相互に連関し合って、歴史の生成変化を担っているのである。

歴史においては、一つの出来事の中には、他の多くの出来事が流入し、他の多くの出来事が参加している。そして、その一つの出来事から、また、多くの出来事が生み出されていく。

歴史は、不断に自己自身を形成し変転してやまない過程であり、新たなものを絶え間なく

創造していく働きである。歴史は果てしない途上にあり、常に新たな創造に向かって自身を駆り立てる活動である。

### 〔歴史と偶然〕

〈クレオパトラの鼻〉で知られるように、もしも事件が少しでも違った形をとっていたら、その後の歴史は大きく違っていただろうということは、われわれの歴史には山ほどある。大きな地震も、一つの小さな岩が滑り落ちることから始まるように、偶然に起こった些細な事件でも、歴史の流れを根底から変える力をもっている。歴史は、瑣末な偶然の出来事から大きな結果が生み出されるカオスなのである。

結果を知りうる立場にある観察者から見て、結果を引き起こす極めて小さな原因を確定することができないとき、それを偶然と呼ぶ。また、事件の当事者から見ても、到底予期できない原因によって大きな結果が生み出されたときも、その事件は偶然によって起こったと言う。

われわれの人生や歴史は、常に期待に反した想定外のことが起きる可能性をもっている。生きているということは、偶発的で予期できない事態に遭遇する可能性にさらされているということである。しかも、このような偶発的で予期できない事態によって、その後の経過は大きく変わり、その結果も、多くの場合予測できない。

われわれの歴史では、どんなに詳しく先行条件を検討しても、ある事件がいついかなる形でどのようなしかたで起きるか、その起き方を予測することはできない。個別には偶然の要素が入ってくるから、予測することができない。偶然は、一つの事件を別の方向に発展させていく大きな働きをする。

一つの出来事は、無数の原因が交わる結節点に生じる。しかし、結節点を構成する因果系列は無数にあるとともに、結節点そのものも無限に生じるから、結節点での原因の出会いには完全に解明することはできない。また、他の結節点に生じた出来事とどう出会うかも予測することができない。

二つ以上の事象が因果性という必然的關係なしに出会うことを、われわれは、また、偶然と呼んでいる。歴史的事件は、多くの場合、このような因果系列相互の偶然の出会いから起きる。その出会いからどのような新しい出来事が生じるかは、誰にも予測することができない。

歴史は出来事の相互連関からしか自己自身を決定することができないから、それが取りうる形は偶然性に満ちている。偶然の出来事は、ものが進んでいく方向にズレを起こしていく。そのわずかなズレによって、出来事の出会いのしかたは変わり、事態は大きく変化していく。

偶然性はどのような結果でも生み出す力をもっており、創造性を引き出す力も持っている。歴史がどのような方向に動いていくかは、ほとんど偶然によっている。偶然の出来事が人間の運命において演じる役割は大きいと言わねばならない。

偶然に満ちた不確実な歴史的過程から因果律に合ったものだけを選び、それ以外の偶然的事実を無視してしまうことはできない。偶然は、歴史家が求めようとしている原因結果の連鎖を遮断する。因果外偶然というものがある以上、すべてを因果律で説明することはできない。

両系列間に目的性以外の出会いが生じたときも、われわれは、また、これを偶然の発見と言う。このような出会いには、目的性も計画性もない。このような目的外偶然によっても、われわれの人生や歴史は大きく塗り変えられていく。

歴史においては、多くの出来事が出会うことによって、まったく新しい事件が創発してくる。多くの原因の相互作用から、予測不可能な結果が生み出されるのである。たとえ過去と現在のすべての原因をあげても、その出会いと相互作用から何が生まれるかは分からない。何が創発してくるかは出会いにより、そこにこそ偶然性が働いているのである。

歴史においては、右に転ぶか左に転ぶか、確率論では二分の一の確率であっても、どちら



に転ぶかによって、その後の歴史の展開は大きく変わっていく。歴史は、人生同様、一種の賭けなのである。

出来事は、偶然の出会いから生起する。歴史は出来事から成り立ち、その出来事は後に起こるすべての出来事に影響を及ぼす。偶然の出会いから生じる出来事こそ、創造の源である。二つ以上の因果の鎖の偶然の遭遇から、新しい形がその時その場でつくられる。その意味で、それは即興性に満ちている。

人生も、歴史も、一種の即興劇である。歴史も、人生同様、出会いと偶然に満ちたドラマである。したがって、歴史は、機械論や因果論ではつかむことができない。歴史の偶然は、科学者や歴史家が追究する原因結果の連鎖を断ち切る力をもっている。

歴史は、偶然の出会いから多様なものを生み出すとともに、世界を刻々と異なるものにして続ける。しかも、それはまもなく計画されたものではなく、別の経過を辿ることも可能であったような偶発的過程である。

無数の要因が現在において同時に出会い、共働することによって新しい形が生み出される。どのような形が生み出されるかは、その時その時の出会いによる。したがって、取りうる形態は様々で、どのような形態をとるかあらかじめ決定されてはいない。偶然の出会いから、新しい創造も生まれてくる。人生や歴史が取るに足りない出来事にも左右されるのは、そのことによる。

歴史は、気まぐれに継起するその時その時の条件によって、どんな結果でも引き起こすことができる。その意味では、歴史は運・不運によって形成されるとも言える。人は偶然に助けられ、偶然に災いされる。条件に恵まれ、結果がよければ、幸運であり、条件に恵まれず、結果が悪ければ、不運である。

歴史にはいくつもの分岐点があり、それぞれの分岐点で、どのような道が選択されるかは前々から確定されているわけではない。分岐点ではあらゆる可能性があり、どの可能性を選ぶかによって、その後の歴史の方向は大きく変わる。現実には一つの可能性しか実現さ

れないが、歴史の進む方向は、その時その時の分岐点では一つだけではない。

歴史は分岐点の連続である。それぞれの分岐点では、多くの可能性からたった一つの可能性が選ばれて、それがその後の歴史の方向を決していく。その可能性の選択には、偶然も大きく働いていると言わねばならない。歴史のベクトルは、分岐点でわずかな変更が加えられるだけでも、まったく別の流れをつくっていく。

歴史の分岐点にはいくつもの選択肢があつて、どの方向に進んでいけばよいか迷っている時がある。そのような迷いの中でどちらか一方を選択することによって、歴史の方向は決まっていく。二者択一する行為が歴史を限定し、歴史の変動を起こすのである。

歴史を動かす当事者の立場に帰り、その時その時の渦中の人物の心中にまで立ち返って考えるなら、歴史はほとんど「一寸先は闇」で動いていく。だから、心の動きも含めて、そのうちの何か一つが現実を起こつたのとは違った動きを少しでもしていたなら、違った歴史が展開されていたということは大いにある。

行為するということは選択することであり、対称性を破ることである。芯を下にした鉛筆が必ずどちらかに倒れるように、対称性の破れは、新しい構造や形態を形成する上で決定的な役割を果たしている。対称性の破れによって一定方向への自己組織化が起き、もはや歴史的に逆戻りのできないところまで進んでいく。この対称性の破れのところに、偶然は働く。偶然の出会いとか、偶然による情報の察知とか、偶然の事件が決断を促し、歴史を一定方向へと駆動していくのである。

歴史のあらゆる時点で偶然が大きな働きをしているとすれば、歴史は非決定的に動いていくことになる。どの出来事も他のすべての出来事との連関によってその方向を決定するか、未来は非決定的であり、それがどのような構造をつくるかは、確定的ではない。歴史は、無数の出来事の相互作用から自発的に新しいものを創造していく不断の過程である。決定論はこの自発性をつかむことができないため、歴史の次の段階に創発してくる新しいものを予測することができない。歴史には、決定論では把握しきれない飛躍がある。

複雑で非合理的なものを含む歴史を決定論の網によってつかもうとすると、その網の目からは、いつも歴史の大部分が逃げてしまう。歴史は、単純化することも合理化することもできない。歴史は、人生がそうであるように、まえても決定された法則や計画に従って動いていくようなものではない。だから、未来はもちろん、過去も非決定的なのである。

歴史は、自然の猛威とか、外敵の侵入とか、支配者の権力欲とか、英雄の野望とか、民衆の熱狂とか、法則化できないものによって動いていく。歴史には、法則に還元できない非合理的な複雑性がある。複雑な歴史現象を、単純化し一様化してはならない。無限に多様な複雑な事象から、性急に単純化された法則を抽出しようとすれば、歴史の複雑性を見落としてしまう。われわれは、複雑で多様な歴史的事象を、複雑で多様なままで理解しなければならぬのである。

未来を正確に予測することはできない。未来には、常に予期に反する出来事が起きるからである。われわれの歴史では、小さな事件を切っ掛けとして、予想を遙かに越えた巨大な事件が生起する。われわれは、一個人においてもそうだが、集団においても、経験を積んで成長していく面をもつ。この未来の創発性や新奇性を、決定論的法則は把握できないのである。

一つの結果が生まれるには無数の原因があり、因果の連鎖は、事実上時間的にも空間的にも無限に広がる。だから、一つの原因を一つの結果に機械論的に結び付けることはできない。歴史は一因一果ではなく、多因多果であり、そのため、同じ原因から別の結果が生まれたり、別の原因から同じ結果が生まれたりする。

歴史においては、すべての出来事がすべての出来事と相互に関連しているから、原因結果の関係も単純には決定できない。無数の出来事の相互依存関係からは、単純な因果律では律しきれないものが生じる。単純な因果律は、過去は現在を規定し、現在は未来を規定しているのとらえるが、過去や現在の経験を乗り越えて新しい未来を作り続けていく歴史を、このような因果律ではつかめない。

決定論は、また、未来に対しては予定論を唱える。歴史は一個の目的へ向かっての進行過程

程であり、まえもって決められたコースを歩んでいくと考える。しかし、歴史には、目的外偶然によって思わぬ方向に進んでいくことがあることを考えれば、歴史の進行方向を一定の目的に向かって進む過程と考えることはできない。行為が投げ出される場は相互連関性の場だから、そこには予測することのできない偶然が入り込み、歴史の進む方向を一つだけに限定することはできない。歴史はシナリオのない芝居である。歴史は、予定論のシナリオを狂わす偶然性によって成り立っている。

われわれの歴史には、国際情勢の変化とか、他の強国の威圧とか、常に環境の変動があるが、それに対処するための変革の方向は一つではなく、多様である。どのような方向を選ぶかは、自由に任されている。いくつもの選択肢と多くの可能性があるところに、〈選択の自由〉がある。そして、あらゆる可能性から一つの可能性を選ぶところに、自由がある。歴史を外部から眺めるのではなく、行為者の立場に立って見るなら、われわれは未来への自由をもつと言わねばならない。行為的連関の中にどのような行為が投げ入れられるかによって、歴史の方向は変わっていく。行為は、必然性と決定性を破る自由をもっている。

われわれは常に予測しがたい偶然に面している。しかし、この予測しがたい偶然に対して自分の生き方を選択するところに、〈選択の自由〉がある。偶然の中にあるからこそ、自由なのである。必然の中に押し込まれていたなら、自由はない。自由ゆえに飛躍があり、創造がある。創造と自発性にこそ、因果論的決定論からの自由も、目的論的決定論からの自由もある。

歴史の流れは不可逆である。歴史は、人生同様、逆戻りすることも、繰り返すことも、やり直すことも、取り返すこともできないものである。歴史がどこまでも創造的である以上、歴史現象は再現されることのない一回きりの現象である。無数の原因や条件から思いがけないものが創発してくることを考えれば、歴史は、二度と同じことを繰り返すことはない。

歴史では、実験は不可能である。実験をすれば、実験をしたこと自身が歴史的動きそのものを乱すから、歴史においては、実験によって同じものを再現することはできない。それが不可逆ということである。

われわれは、遠い過去から経験を積み重ね、それを累積して履歴を形成し、それを未来の新しい経験に引き継いでいく。経験を積み重ねて成長する過程は不可逆であり、不断に新しいものを産出する過程である。過去の蓄積は、未来に向けて新しいものを創造するために必要なことである。過去から現在へ、現在から未来へと、歴史は不可逆に流れる。

初期段階での選択によって、後戻りのできない長期的帰結がもたらされ、しかも、その選択のところに偶然が働いているとすれば、偶然と不可逆は深く関係していると言わねばならない。もしも、過去に別の選択をしていたなら、歴史の悲劇はなかったというようなことは大いにありうるのだから、ある一つの選択をしたということは、偶然にしろ取り返しのつかないことであり、それは不可逆な歴史を形成する。

歴史は選択と選択の連続であり、偶然と偶然の累積である。その偶然が、歴史に消し去ることのできない影響を残す。偶然こそ、歴史的不可逆性と一回性を引き起こす。歴史的な実は、過去において作用した無数の出来事の複雑な絡み合いと偶然の競合の結果であり、それ自身は一回的なものである。

生きられる歴史的時間は、前後が継起する時間であり、もしも前後の順序を入れ換えれば、それだけで別のものが出来てしまうような時間である。偶然は、この時間の前後を狂わすわれわれは、この前後継起する時間の中で、経験と体験を積み重ねていく。だから、歴史的時間の方向は逆向きにすることも、過去・現在・未来を互いに交換することもできない。時間の矢は逆行しない。現在の中に過去を保存し未来を孕みながら、不可逆な歴史は一方向に変化していく。世界そのものが、不可逆な時間の中で演じられる劇なのである。

歴史は、法則から外れた例外的偶然事や違った系列の偶然の出会い、別様でもありえた偶然の選択などによって、掻き乱されていく。しかし、それこそ、歴史の生成変化と創造的進化を引き起こす原動力である。偶然は歴史の生命である。歴史は偶然によって一変する。もともと存在そのものが偶然である。出来事が生起し、今このように在ることそのことが偶然である。歴史は、そのような偶然によって貫かれている。

自分自身がそのような歴史の偶然に投げ出されているということを自覚するとき、われわれ

れは、この過酷な偶然を運命として受け取らざるをえない。偶然に見知らぬところから襲って来たこと、偶然に翻弄されながらみずから選択し招いたことなどを、運命として受け取る。予測不可能も、非決定も、不可逆も、過酷な偶然である。過酷であるから悩むのである。

歴史の神は、まるで、気まぐれなゲームをしている子供のようである。われわれは、この歴史の気まぐれに玩ばれながら、みずからの運命を背負う。歴史にとつて、偶然は必然より根源的であり、運命は偶然により近い。しかし、だからこそ、われわれには、運命を背負いながら、新しい創造に向かう自由がある。

もともと、この宇宙そのものが無ではなく有の方へ傾いたということ、そのことが偶然である。この偶然そのものは、もはや他の何ものにも根拠をもっていないから、無いことも可能な偶然である。それは、なぜそのようにあるのかと問うことを許されない偶然である。世界はこの偶然から始まる。

歴史の全体を貫いているのも、この偶然である。単に歴史の始まりが偶然であるだけでなく、歴史の瞬間瞬間が偶然である。歴史の非決定性と予測不可能性、不可逆性と一回性は、この歴史を貫く偶然性に起源をもっている。偶然が歴史を動かす、世界を動かす。偶然こそ、永遠の生成変化を生み出す。有が無になり無が有になる接点に働いているのが偶然だとすれば、それは生成を呼び起こす。世界そのものが歴史的なのである。

### 〔歴史と進化〕

一般に、国家にしても、文明にしても、歴史は創造と破壊を通して進化していく。その創造と破壊の過程の中に、激しい変動がある。それは、苦悩と苦闘の歴史だが、それがなければ歴史的变化も移行もなく、社会は硬化して、新しい環境に適応できない。古い構造を壊し、新しい形態を創造することなしに、歴史の進展はない。歴史は、秩序から混沌へ、混沌から秩序へ、崩壊と形成を繰り返しながら新しいものを生み出し続けていく動的系なのである。

創造と破壊の歴史において、抗争は、むしろ歴史の創造原理としてなくてはならないものである。古い力と新しい力の激しい抗争は社会の秩序を乱し崩壊させていくが、しかし、その無秩序から新しい秩序は創造される。対立と抗争は生成の原動力である。

歴史は戦いによって動いてきた。歴史が飛躍するとき、戦いがある。万物は、戦いの中で生成消滅する。構築されたものは没落し、形作られたものは滅ぶ。絶えることのない変動と戦いの中で、歴史は盛衰するのである。

歴史の激動期には、古いものと新しいものの戦い、崩壊と建設のせめぎ合いによって歴史は飛躍していくから、そこでは、善と悪は表裏をなして動いていく。特に、歴史が飛躍する転換期には、善ばかりでなく、悪が横行する。歴史が加速度的に変化していくときには、醜い争いと闘争、戦慄すべき殺戮や略奪など、この上なく恐ろしい非業がなされる。

歴史は、人間の利己心や欲情の渦巻く舞台であり、人間の業によって成り立っている。歴史における悪は、動かすことのできない事実として支配している。しかし、そういう悪を通して歴史は変動し飛躍していくとするなら、悪もまた、歴史の創造的契機として、不可欠の役割を演じていると言わねばならない。

歴史は、創造と破壊を繰り返しながら飛躍する。歴史においてエポック（画期）をなす革命や戦争は、そのような非連続的飛躍の契機である。それは飛躍だから、規則的に起きるものではなく、不規則的に起きる。そこでは、歴史は、それ以前の段階を組み込みながらも、それを超克して、新しい構造や形態を創発していく。それとともに、新しい法則やルールが創造される。歴史は、自己の中から自己でない自己を生み出し、自己自身を超出する力をもっている。

歴史においては、多くの要素の相互作用から、新たな特性や形態、より複雑な構造や機能が、ごく短い期間で、自発的に、そして急激に創発してくる。それは、多くの場合、連続的变化ではなく、非連続的な飛躍によってなされる。

人類史も、いくつかの分岐点を境にして、突如としてより高度な秩序への移行が起き、革

命的な変化を遂げてきた。農耕牧畜の発見、文字の発明、国家の建設、高度な宗教や哲学や科学的知識の形成、商業や産業の発展などは、そのような歴史の創発現象であった。人類史は、そのようにして、単純なものから複雑なものへと進化してきたのである。

歴史は、無数の出来事の相乗効果によって新しい秩序を不断に生み出していく創造的進化の過程であり、いつまでも変化してやまない生命の活動である。ここでは、歴史を形づくる成員も滅び、社会も滅び、国家も滅び、文明も滅ぶが、それらの死を乗り越えて、歴史はその生命を保つとともに進化していく。

歴史に終局はない。歴史は、生きて動いていく流動であり、生命の飛躍によって成り立っている。歴史は在るのではなく、成るのである。

歴史は絶え間ない流れのうちにある。歴史は間断なく変化しながら、瞬時もとどまることなく流動していく。変転していく定めなさ、それが歴史である。しかも、その歴史の流れは、途切れることなく何ものかを創造しようとする流れである。日に日に新しく創造されていく過程の中で、飛躍が行なわれる。

歴史の流れは、不可測な流れである。流れる水は片時も一所にとどまらないように、歴史もまた一定の状態にとどまることはない。一定の状態にとどまることは、硬直化を意味する。どんなに苦痛を伴おうとも、変転することのうちに歴史の命はある。歴史には完成もなければ安定もない。歴史は常に生成の途上にある。

歴史は、変わるものと変わらないもの、新しいものと古いものの対立を同時に含んでいるが、矛盾対立を含むがゆえに生成していくのが歴史である。矛盾は、あらゆる運動と発展の根源である。矛盾を含むかぎり、歴史は命を保つ。

歴史の諸要素は、絶えず誕生し成長し滅んでいくから、どのような形態も永遠ではない。歴史は、生命と同じく、みずから形をつくりながらそれを変え、進化していく。どのような形も未完成で、生成の途上にある。何一つ安定した形はない。



川の流れが障害物にぶつかって渦を巻きながらその方向を変えていくように、われわれの歴史も、いくつもの渦をつくりながら変化していく。その渦の中には、どれ一つとしてまったく同一の渦はない。絶えることのない動きと変化の中にあるからこそ、恒常的な形も見えてくるのである。

歴史には切断面がある。歴史的時間は現在において非連続であり、この非連続な断層を境にして、未来は過去を乗り越える。そこでは、過去は、文字通り過ぎ去ったものとなる。一つの時代は滅び、新しい時代が生まれる。時代はただ連続的に推移するのではなく、非連続的に変転していくのである。歴史的時間は、一瞬一瞬断絶を孕みながら推移していく。生成のためには、消滅がなければならず、消滅のためには、生成がなければならぬ。そして、生成と消滅の間には、いつも断絶がある。歴史は縫い目のない織物ではないのである。

歴史の時間は絶えざる創造の時間であり、非決定的な時間である。各瞬間ごとに新たな世界が生まれている。歴史の出来事は、瞬間において発生する火花である。過去と未来は、この現在の瞬間において接触する。現在は、過去を含み未来を孕むと言われるが、過去から未来への推移には、瞬間の断絶がある。

現在の瞬間は、新しいものの生まれ出る陣痛の時である。現在の瞬間のところで、決定的過去は非決定的未来へと跳躍する。そして、過去の運命は未来の自由へと乗り越えられる。偶然は、この現在における飛躍において働いている。偶然が働くかぎり、歴史的時間には断層があり、非連続面がある。

螺旋的に飛躍していく時間は、偉大な革命家の決断や創造的な発明家のひらめきにも見られるように、現在の瞬間における行為の中からほとぼり出てくるものである。現在の瞬間における行為が、未来への跳躍を可能にする。(いま、ここ)での行為は、現在の中に含まれる過去を乗り越え、未来を開く。歴史は、瞬間ごとの決断によって、瞬間ごとに創造されていく。そこには断絶と飛躍があり、悲連続がある。歴史的時間の連続性を断ち切る瞬間における行為にこそ、永遠と歴史の接点がある。

歴史は、多くの出来事から成り立っている。しかも、出来事は、起きたかと思うと、すぐに消え去ってしまう。出来事は過ぎ去り、過去のものとなった出来事はすでに消滅している。だから、われわれは、歴史の出来事を直接見たり聞いたりすることはできない。そこには、ただ痕跡が残っているだけである。歴史は痕跡からしか知られないもので、残された記録や証言から推察する以外にないものである。

記録が残るか残らないかは、歴史が決める。歴史史料は歴史そのものによって制約されている。そのような制約された歴史史料によって歴史は構成されていくのである。しかも、歴史史料が残るか残らないかは、かなりの部分偶然が左右する。われわれが現在もっているある時代のイメージも、歴史の偶然によってつくられているものなのかもしれないのである。

歴史家が、ある時代やある事件のまとまった像を描きあげるには、事実の海から、それに必要なものだけを選び、他を省略する必要がある。われわれが読んでいる歴史は事実に基づいてはいても、実際には、歴史家の手によって多くの選択がなされてきた歴史である。選択のしかたによって、歴史像は変わる。歴史家は、自分なりの価値判断に従って、多くの史料から重要と思うものを選び、重要でないものを捨てる。そこには、否応なく、歴史家の主観的な価値観が入り込んでくる。

歴史家は、選択し解釈することによって、歴史家であることができる。事実は語らず、語るのには歴史家である。歴史家は、自分自身では経験しなかった事実を、多くの推測を用いて再構成する。歴史的事実は、歴史家によって物語られたものである。

（死人に口無し）と言われるように、もはや存在しない過去の事実に対しては、ある意味で、どのようなことでも言うことができる。どう言われようと、死人は抗弁できない。死者達は孤独で、どのようにも物語られていく。そのため、歴史は、ときには故意に歪曲されたり、改竄されたり、捏造されたりもする。

史料は、それを取り扱う歴史家の態度によって、いろいろな解釈される。同じ一つの史料からでも、異なった解釈が引き出される。歴史的事実は、むしろ、このような解釈や図式があつてはじめて浮かび上がってくるものである。史料の意味を明らかにするのは、史料そのものではなくて、歴史家自身なのである。

時代が変われば価値観も変わり、過去の歴史の中から何を重要なものとして選択するかも変わってくる。選択そのものは、その時代その時代の関心による。そのため、歴史叙述そのものが歴史的に変化していく。歴史は歴史叙述を越えているのである。

歴史家は、自分なりの図式を用いて、歴史的事件の因果関係を限定していくが、何を主な原因とし、何を決定的な原因と判断するかは、歴史家もつ図式に依存しているのである。したがって、歴史家は、同じ出来事でも異なった原因をあげることができ、異なった物語をつくることができる。歴史は、歴史家によってつくられるものである。

歴史家は、現在の立場に立っているから、過去の事件の結果を知る立場にある。歴史家は結果を見て、それに合う原因を探究しているのである。歴史的イベントは、原因から結果が引き起こされているのだが、歴史的探究は、結果から原因へと遡る。だから、何を原因とするかは、結果次第ということになる。結果がむしろ原因を生み出していることになる。

歴史的イベントを因果律によって説明する歴史学の方法は、歴史的イベントが起きて後の反省の段階でなされることである。それは、歴史的行為の現実から離れ、それを外部観測的に眺めたときになされる説明にすぎない。実際の歴史的行為は、ある意味で原因も分からず、どちらの方向に行くかの可能性も予測できず動いていくものなだから、実際の歴史的行為が、後の歴史家が説明する通りの因果的で合理的なものであったかは定かではない。

歴史的行為は、因果的に説明されたとき、まったく色褪せたものになってしまう。われわれは、習慣に基づいて、前に起こった事態が後に起こった事態の原因であると考えがちだが、歴史的行為をその内部から見ると、必ずしも、そこに必然的因果があるとは言えない。

渦中を行為している歴史的事件の当事者から見ると、未来は予測不可能で、偶然に満ちている。偶然が介在する予測不可能な世界には、因果律は適用できない。それでも、無理に因果律を適用しようとすれば、歴史における偶然性は除外されてしまう。偶然の問題を考えるなら、歴史の出来事の連鎖によって秩序づける歴史家の試みは挫折せざるをえない。

歴史的事件の連鎖は予想外の事件によって破られたり逸らされたりする危険がいつも伴っているのだから、たとえ、歴史的事件の説明のために多くの原因をあげるにしても、原因結果の決定的連鎖を見出すことはできないであろう。

歴史家は、複雑な歴史的事実という材料を因果というカテゴリーで整理し、意味と意味された事実を選び出し、合理的に説明しうる部分を取り出して、一定の類型にはめ込む。こうして、歴史家は、複雑な歴史を単純化する。歴史家は、歴史を、いわば時間的にも空間的にも縮約して叙述するのである。したがって、実際の歴史と歴史叙述には大きな隔たりが生じる。

歴史家は、史料から取り出されてくる雑多な歴史的事実から、ある仮説に基づいて、必要な事実を抽出してくる。歴史家が何を事実として選び出してくるかは、歴史家もつ仮説による。仮説なしに、歴史を研究することはできない。歴史叙述も、仮説に照らして選び出してきた歴史的事実を再構成することによって成り立つ。記述の単純化とか縮尺も、仮説なしにはできない。

歴史家が歴史を叙述する場合でも、ある一定の観点から重要な事実と重要でない事実を分け、それを加工してはじめて歴史の叙述となる。歴史研究者は、歴史的对象に自分なりの図式を当てはめることによって、歴史的认识を成立させていく。歴史家も、みずからの図式に基づいて歴史的事実に選択や単純化を施し、歴史を描写するから、同じ歴史的事件を描いても、その描き方は歴史家によって異なってくる。

歴史をどのように記述していくかは、記述する歴史家の人生観や世界観に依存する。歴史家のもつ史観がその歴史叙述を根底において規定しているのは、そのためである。歴史家

のもつ史観こそ、歴史叙述を生み出し、ひいては歴史的事実そのものをも生み出しているとも言える。

歴史家が目の前にしている史料は、種々雑多な記録や資料や遺物の堆積からなる。それは歴史的事実そのものではなく、その残滓にすぎず、常に不完全で、何とでも解釈することができる。そのため、同じ一つの史料からどのような意味を取り出してくるかは、歴史家のもつ図式に左右される。

歴史も、自然と同じように、観測者がある方法で観測したとき、それに応じて、確定した状態を示す。歴史も、認識者のパースペクティヴに応じて様々な顔を見せるのである。過去の歴史も、観測手段によって、新しい様相をもって現われてくる。

ここでも、観測の手続きが観測されているものに影響を与えている。歴史も、探究すればするほど、それに応じた多様な様相を示すのである。歴史家と歴史的事実は分かたることができない。歴史的事実は、歴史家のもつ図式次第で、見えてきたり見えなくなったりするものなのである。

歴史においては、叙述されるものと叙述するものを分けることができない。もともと、歴史的史料そのものの中に、すでに、史料によって語られる歴史的事実と、それを通して語る記述者とが、同時に重なり合って含まれている。さらに、その史料を用いて語られる歴史叙述の中にも、叙述されるものと叙述するものが同時に重なり合って含まれている。事実と記述は互いに重なり合って、歴史をつくるのである。

歴史的事実も記述次第である。歴史においては、完全に客観的な事実というものは存在しない。過去も、未来同様、決定不可能で不確定なのである。歴史家が記述する歴史的事実の中には、どうしても、歴史家の見方というものが入り込んでくる。そのため、歴史家は、歴史的事実という磐石な地盤に立脚することができない。

主観と客観はいつもつながっている。現象は主観と客観の相関するところに生じ、出来事は主観と客観の出会いところに生じる。歴史的事実も、主客の一致点に立ち現われる虚像

である。歴史研究も、主客非分離に基礎を置かねばならない。

歴史家は、ある文脈で語られた歴史的事実を、別の文脈に引き入れて解釈していく。そこには、史料から知られる歴史的事実の絶えざる変形と加工がある。そのような変形や加工に、歴史家の主観が入ってくる。歴史は、過去の史料作成者と現代の歴史家との二重の主観性の交わるところで語られていくのである。

かくて、歴史は歴史家の数だけあるということになる。同じ時代の歴史を記述するにも、何を重視し何を無視するかは歴史家によって異なる。それによって、描かれる時代像も、歴史家によって異なってくる。

また、時代的にも、歴史は常に書き変えられていく。以前重大視されていたことも、その後の時代には軽視されることもある。時代とともに変わっていく問題意識によって、歴史記述も変化していくのである。特に、革命や動乱の前と後では、歴史記述は大きく変わり、天と地ほども違ってくる。

史料から知られる過去の歴史的事実を歴史家が解釈する場合でも、その解釈には現在の立場が反映する。また、過去の事実を現在の立場から翻訳して解釈するのであれば、過去に起きたことの意味を十分に理解したことにはならない。歴史家は、現在の立場から過去の事実を組み立て直し、われわれの視点から理解できるように並べ替え、過去の事実の意味変換を行なう。それは、過去においては気づくことのできなかつた新しい連関性の発見につながる。歴史家は、現在の立場から過去の諸事実を合成し、過去をわれわれの過去へとつくり変え、それに新しい意味を与えるのである。

歴史家も、必ずしも不偏不党の立場で歴史を記述しているのではなく、一定の価値判断をもって歴史記述をしている。だから、同じ一つのことでも、多くの歴史家によって異なったイメージで描かれる。歴史家も、その出身や育ち、地位や経験など、無意識の背景をもっている。それが、歴史家の見方を左右する。歴史観そのものが歴史に拘束されているのである。歴史家の歴史叙述が、それが書かれた現在の立場や状況を反映するのはそのことによる。

どの歴史記述にも、そこには、現在の立場からの問題関心が潜んでいる。また、われわれが現在において生きているという立場から過去の人々の営みを積極的に意味付けて、はじめて、生き生きとした歴史叙述も可能になる。過去の事件の奥行きが見えてくるためにも、現在における体験がなければならない。われわれは、現在の経験を過去に反映させ、過去を現在の時点へと手繰り寄せながら、過去の歴史の中に積極的に参加する。過去を理解するということは、現代の目を通して過去を見ることなのである。

われわれは、現在の光に照らして過去を理解し、過去の光に照らして現在を理解する。現在と過去との相互写映を通して、過去も現在もよく理解することができる。われわれは過去によって生み出されるときも、過去もまたわれわれによって生み出されている。歴史は歴史家をつくり、歴史家は歴史をつくるのである。

さらに、現在は未来と深く関係している。現在は、時々刻々未来に食い込んでいく。われわれは、ただ歴史を眺めているのではなく、歴史を生きているのである。将来に向かっての決断のためにも、過去の経験は必要である。そのため、未来の行動にとって意味と価値をもつものが、過去の事実から選択されてくるのである。

歴史は、過去・現在・未来の映し合いである。過去は現在に流れ込み、現在は未来に流れ込むが、逆に、未来は現在に反映し、現在は過去に反映する。未来への関心は、現在において、過去への関心と接続されている。

しかも、現在はすぐ過去になり、未来はすぐ現在になる。川を下る舟のように、現在は未来に向かって動いていく。そして、現在が刻々と動いていくにつれ、未来も過去も刻々と変わっていく。ちょうど有視界飛行を行なっているパイロットのように、われわれは、未来に向かって突き進みながら、次々と新しい過去の風景をつくっていく。未来へ進むにつれて、絶えず過去の歴史は更新されていくが、その歴史の絶えざる更新は、現在の動きを反映している。歴史家は、そういう現在に立っているのである。

前へ進むにしたがって、絶えず新しい視野が開けてくるから、それにつれて、過去に対す

る視点が変わる。前に進むということは、常に新しい問題にぶつかるといふことであるから、それに応じて、過去への問いかけも違ってくる。そして、その視点や問いかけの変化に応じて、過去はその様相を新しくする。歴史記述が時代によって二転三転するのはそのためである。未来に向かって進んでいくにしたがって、歴史は新しく生まれ替わってくるのである。

歴史は三面の鏡である。過去は現在を映し、現在は未来を映す。未来は現在を映し、現在は過去を映す。われわれが過去の歴史を模範として現在を生き、未来を開いていけるのも、歴史が鏡だからである。われわれが未来に向かって生き感うとき、かつての危機の時代が蘇ってくる。そして、われわれは、歴史の鏡に映して、現在と未来を認識する。と同時に、過去をも認識する。われわれは、人生の経験を積み重ねることによって、かつての人々が何を悩み、何に苦しみ、どのような知恵を編み出して生きていったかを深く理解することができるのである。

鏡に映してこそ自分の姿を見ることができるよう、歴史を学ぶことは自己を知ることなのである。過去を認識することは、現在の自己を認識することなのである。(歴史は教師である)と言われることの深い意味が、そこにある。歴史を深く知ることが、人生を生きるための深い知恵を与える。現在と未来を知るには、過去に学ばねばならない。

歴史認識は単なる主観でも客観でもなく、主観と客観が出会うところに成り立つ。歴史家が史料を通して過去の事実と出会う瞬間、その直接経験のところに歴史認識は生成して行く。その認識には、歴史家の現在も過去の事実も同時に含まれる。現在と過去が一致するところに、歴史の認識は成立する。しかも、その現在と過去が出会う一致点は未来に向かって動き、動くにしたがって、過去も動く。動く現在と動く過去の一致点のところに、歴史認識は成立するのである。

歴史事実の一つの経験なのである。過去を想起するということは、現在の経験の中に過去を蘇らせることである。その想起の中には、過去も現在も未来も含まれている。現在は過去に働きかけ、過去は現在に働きかけ、両者とも、螺旋的に未来に向かっていく。そして、絶えず歴史を形成していく。歴史を認識しながら歴史を形成し、歴史を形成しながら歴史



を認識していくのがわれわれなのである。

### 〔歴史の解釈〕

解釈者は、その時代を背景にした解釈者自身の関心から、歴史を構成する。歴史上の人物にも、その人物が知り得ない同時代の多種多様な出来事が関与しているから、解釈者は、それらを、自分が立っている立場から再構成して理解する。歴史上の人物以上に歴史上の人物を理解するには、そのような解釈者の立場からの理解が必要なのである。

歴史的事実は何とでも解釈できる多義性をもつから、歴史的事実の解釈は、解釈者の立つ歴史的状况に左右される。さらに、その歴史解釈者の生きる時代も未来に向かって動いていくから、歴史の解釈には終わりはない。

歴史事象と解釈は関連している。歴史上の事実は、解釈なくして浮かび出てこない。記録がすでに解釈を含み、それをさらに解釈して歴史の物語はできているのだから、歴史家の解釈から独立した客観的歴史はない。歴史は、同時代においても、後代においても、常に解釈され、その解釈自身が歴史的に変動していくのである。

歴史的個人の行為や作品や思想は、体験の表現である。表現は生命の根源的な働きであり、意識によつて照らし出されない深みから出てくる。体験は一種の受苦であり、苦悩であり、感情である。それなくして、表現も創造もない。そして、その表現には、個人の体験ばかりでなく、共同社会の体験も表現されている。歴史的な生の表現を介して歴史的な生を理解することこそ、歴史学の課題なのである。

体験の表現を体験から理解し、それを表現することが解釈である。そのようにしてこそ、著者以上に著者を理解するという解釈学の目標は達せられる。そうでなければ、過去の人間の生き生きとしたあり方は記述されえない。

人は、経験を通して理解する。経験の過程は自分を乗り越えていく過程であり、苦痛を伴う。しかし、そのことによつて、経験は新しい経験へと開かれていく。そして、新しい経

験は新しい理解をもたらし、過去の人々の事績の深みをあらわにする。われわれは、現在における経験を過去に投影することによって、過去を理解することができる。現在の私の経験が過去の先人の経験を照らし、過去の先人の経験が現在の私の経験を照らす。過去の経験と現在の経験が鏡のように映し合うことが理解なのである。

私自身の体験から、歴史的人物や事件がよりよく理解でき、逆に、歴史上の人物や事件をよく知って、私自身がよく理解できる。われわれは、歴史的事実に働きかけることによって、歴史的事実から働きかけられ、自己自身を認識する。自己理解は他者理解であり、他者理解は自己理解である。体験と体験が表現を通して共鳴することが理解ということであり、それを通して、生を生自身から理解することができる。過去と現在との映し映されの関係が歴史理解なのである。

とはいえ、追体験は、文字通り後からの体験であり、そこには、体験間の食い違いがある。歴史家と歴史的事実、解釈者と対象の間には断層がある。しかし、それでもなお、体験同士の共鳴の中に、解釈は生まれてくる。追体験とは、私と過去の出会いであり、現在と過去の共鳴である。追体験は一種の創造である。

歴史的行為の意味は、それ自身によってではなく、その行為が置かれる解釈者の地平によって規定される。行為の意味は、行為主体の意図を越えて、それが置かれる場や連関によって規定される。意味は関係であり、現在の側にも、過去の側にも還元することはできない。歴史的事実の意味は最初からあるのではなく、歴史家と歴史的事実、現在と過去の関係によって生じる。

だから、ある行動や出来事の歴史の意味は、行為者の意図をいつも越える。歴史の意味は、歴史的事件そのものから起きてくるものではなく、その出来事の後に形成される状況から語り出されるからである。どのような視点から問題の出来事を見るかによって、出来事の歴史の意味は決まってくる。そこにまた、解釈という仕事がある。意味は、理解と解釈という作業を通して生成してくるのである。そのため、歴史的視点の変化に応じて、出来事の意味は変化する。行為の意味は関係によって多種多様に受け取られ、絶えず変換されていく。意味評価自身が歴史的なのである。

歴史学もそれ自身歴史の中の出来事であり、歴史の内部に息づき、歴史をつくっている。歴史解读者は歴史の傍観者ではなく、歴史の中で歴史を解釈することによって、歴史に参画している。解读者は、解釈によって行為しているのである。歴史学は、いわば歴史自身の自己観察なのである。

歴史によって包まれるものが歴史を包み、歴史を包むものが歴史に包まれる。そこでは、歴史が歴史記述を限定するとともに、歴史記述が歴史を限定する。

歴史解釈は歴史過程のうちで絶えず変動し、解釈そのものが歴史を形成する。歴史は、歴史の変化とともに書き換えられ、書き換えられるとともに、歴史そのものが変わっていく。歴史は、未来に向かっても、過去に向かっても、つくられていくのである。われわれが新しいものを経験すると、解釈自身が変わるばかりでなく、解釈される事実も変容する。解釈なくして歴史はない。歴史は解釈の王国なのである。

#### 〔歴史と物語〕

われわれは、ある文脈で語られた歴史を、また別の文脈に移し替えて語っている。文脈が変わると、過去の見えは変わり、意味も変化する。史料から得られた歴史的事実は、ある一定の文脈の中に置かれて解釈されたとき意味をもち、歴史は一つのまとまった形をなす。時代とともに変わっていく問題意識とともに、過去の事実の意味も変わり、歴史は常に更新されていく。

現在と過去の間には、通訳不可能な断絶がある。歴史家は、この理解することの困難な過去の出来事を、現在の言語空間に置き換える役割を果たしている。歴史叙述は、時代間の意味理解であり、そこでは、別の文脈への置き換えという作業がなされていることになる。歴史家は、現在と過去の間の通訳者なのである。だから、そこには、歴史家が立つ現在の意識的・無意識的文脈が働いている。そのため、過去の像は、現在の文脈から別様に描かれることになる。

過去の事実は、歴史が前進するにしたがって、多くの文脈の中に引き入れられて判断されていくから、その意味は一義的には決定されず、絶え間なく変化していく。特に歴史記述は、大概の場合、その結果から判断されることが多く、その結果にも、近い結果と遠い結果があるから、歴史的行為の評価は時代の変化とともに変転していく。

天使が踊っているようにも悪魔が踊っているようにも見えるエッシャーの多義図形のように、歴史的事象はいわば善悪の重ね合わせのような状態にある。そのため、歴史の変動とともに、一つの歴史的行為も善にも悪にもなる。歴史評価で、善悪の判断がまったく逆になることがあるのは、そのことによる。

歴史記述も、歴史家が歴史的事実をどう処理するかによって、どのような物語にでもなりうる。素材をどう料理するかは、歴史家に任されている。歴史家は事実を作り変えて、物語にする。こうして、物語としての歴史は、歴史的事実とは異なるものとなる。しかし、そういう物語がなければ、出来事に意味を与えることもできず、歴史を認識することもできない。

人間は物語る動物である。人間は語る存在であり、語ることによって理解する存在である。人間は、個人にしても、共同体にしても、自己自身を理解するためには、その歴史を語らねばならない。人間は、語り継ぐことによって過去、現在、未来をつなぐ。

しかし、語りには、虚偽がいつも忍び込んでくる。言葉は事を伝えず、言葉には虚偽がある。語ることは、必ずしも事をあらわにし、覆いを取ることを意味しない。語ることは、同時に覆い隠し、隠蔽する。歴史は語られるとともに、騙られる。

ちょうど、画家が様々な素材を用いて独自の絵を描くように、歴史家も、歴史的事実を伝える史料を用いて、歴史という物語をつくる。歴史叙述は、過去の歴史的事実を一つの物語へと組み立てていく一種の創作なのである。だからこそ、そこには、芸術の創作同様、構想力がなければならない。

歴史は物語である。歴史家は、多くの歴史的事実を取捨選択しながら、それらを連関付け

て、一つのまとまった物語をつくる。しかし、それらを一つの物語にまとめあげるには、歴史観がなければならない。歴史観がなければ、歴史は書けない。しかし、歴史観は、また歴史の産物であり、それ自身歴史に支配されている。そのため、しばしば、歴史観は歴史によって破られ、復讐を受ける。

歴史記述は多様であり、相対的である。価値図式そのものが、個人によっても、社会によっても、文化圏によっても異なるために、それに応じて、歴史的事実も異なつて判断される。時代が違うだけでも、過去への問いかけ方が変わり、違った歴史が書かれる。歴史記述には現在からの解釈が含まれているから、時代が進むにしたがつて新しい視点が現われ、歴史は何度も塗り変えられていく。絶えず新たに引き起こされる事件は、絶えず新たな歴史叙述を促す。だから、絶えず叙述し直されていく過去の記述は、相対的な価値しかもたない。

歴史家の違いによっても、歴史は多様に語られる。同じ過去の事実でも、歴史家によって視点が違うから、その評価も違つてくる。評価は、事実の客観的評価ではなく、むしろ、評価者それぞれの価値観の表現なのである。同じ一人の歴史家でさえ、現実に翻弄されながら見方を変えていくから、歴史の書き方も度々更新される。歴史家は歴史の一部なのである。

すべては相対的価値しかもたないのなら、逆に、どのような歴史記述も、すべて等しくその意味を認められることになる。相対主義を徹底するなら、かえって、われわれは何ものにも囚われず、自由な考え方をすることができる。相対性の自覚こそ、人々を自由にする。われわれも、また、それぞれに自分自身の歴史をつくつていくことができるのである。

歴史的世界は、無数の歴史的主体と歴史的出来事が時間的にも空間的にも互いに関連し合つている世界である。このような世界の中に働き出ている歴史的出来事は、それを受け取る歴史的主体の違いによつて、多種多様に映し取られる。歴史的対象は一つでも、無数の異なった視点から眺められることによつて、無数の異なった見えが現われてくる。歴史的主体の各々は一つの歴史的対象を異なった視野から見ているから、視野の数だけ歴史的対象があるように見えるのである。

様々な歴史家が、様々な言説を通して、同一の歴史事象を異なったものとして解釈しているのは、パースペクティブの違いによる。歴史家は、それぞれのパースペクティブから、異なった歴史の物語を作り上げていく。パースペクティブが異なれば、歴史的事象も別様に見える。歴史的事象は、観測者ごとに相対的にしか現われないのである。さらに、歴史家個人の判断や理解は、その歴史家が属している集団や社会の経験にも影響されるから、集団や社会の多様性に応じて、歴史解釈自体も多様である。どの集団も社会も、それぞれ独自の経験に照らして、歴史の意味づけを行なっているのである。

歴史の風景は、また、視野の近さと遠さによっても変わる。過去の歴史も、近くから見ると悲惨や不幸など醜いものが見えるが、時代を隔てて遠くから見ると美しい絵のようにさえ見える。そこでは、歴史を測定する視野も単位も変わってしまう。現在は休むことなく動いていくから、それにつれて視野も移動する。視野の変化にしたがって、過去の見えも変わる。パースペクティブ的な知覚は本来動的なものであり、歴史認識も動的な過程なのである。

歴史は、このように、二重、三重のパースペクティブから見られた万華鏡のような世界なのだから、一つの歴史の見方が絶対に正しいということはない。一つの歴史事象に、一つの意味を断定することはできない。歴史には絶対的な基準系はなく、絶対不動の定点も存在しない。さらに、歴史は常に特定のパースペクティブの内しか現われないから、歴史は完全な形では把握することができない。対象のある視点から見るときは必ず見えない部分が残り、ある観察者からの見えには盲点が生じるからである。

歴史的世界は、出来事と出来事が無限に相関している世界である。そこでは、出来事は他のすべての出来事を映し、他の出来事に映される。一つの出来事は、他のあらゆる出来事を含み、他のあらゆる出来事に含まれる。そして、出来事は相集まって、新たな出来事を生む。出来事と出来事は相互に内在し、相互に映し合い、相互に作用し合って、歴史を形成する。

歴史は創造的な過程である。歴史的主体は、この歴史的世界の命である。歴史的主体は、

自己の内に歴史的世界を映す。そして、相互に作用し、歴史を形成する。歴史的主体は歴史の中にあり、歴史は歴史的主体の中にある。歴史的主体は、歴史の内に含まれながら歴史を含み、歴史を一步前へ進める。歴史的主体は、行為を通して歴史を創造する力をもつ。歴史主体は、歴史世界を映しながら歴史世界を動かす支点なのである。

歴史的出来事の意味は、歴史的に継起する出来事の相互の関係性にある。しかも、歴史的主体の視野はそれぞれに異なっているから、同じ一つの歴史的出来事でも多様な意味に理解される。同じ出来事でも、善とも悪とも判断されるのである。自己も他者も皆一定の立場に拘束されているから、どのような歴史解釈も相対的である。歴史は相互に異質な無数の物語からなり、歴史解釈は多元的にならざるをえない。

われわれは、歴史の中にあつて歴史を視測する歴史内視測者である。歴史を歴史の内から見ること、歴史内視測なくして、歴史をとらえることはできない。歴史を歴史の外から見ることはできないのである。歴史を歴史の外から客観的に認識することができると考え、歴史の必然的法則を打ち立てようとしたところに、近代の歴史哲学の誤りがあつた。その近代の歴史哲学も近代という時代の産物にすぎなかつたように、たとえ歴史を歴史の外から見ようとしても、それ自身がまた歴史の中に組み込まれてしまう。

われわれは、歴史という劇場の中にいて、それぞれのパースペクティヴから歴史の劇を展望しているのだから、歴史は、われわれのパースペクティヴによつてそれぞれ異なつたしかたで映し取られる。その分、歴史は歴史内視測によつて歪められ、改変されていることになる。歴史は、歴史内視測者を通してることによつて、屈折するのである。こうして、われわれが歴史の中で歴史を視測し、記述し、評価すること、それ自身がまた歴史を動かしていく。歴史内視測は歴史の構造を変える。歴史は、自己自身の中に歴史内認識者を含むことによつて、自己自身を絶え間なく形成していくのである。

われわれは、歴史の内にあつて歴史を視測しているのだから、視測するという行為は、視測される歴史の性質を変える。視測は一つの行為であり、その視測は歴史内で行なわれているために、歴史において視測を行なおうとすると、それ自身が歴史に反映してしまふ。

視測者を抜きにして、歴史事実は確定できない。

未来を予言する場合にも、予言そのものは、歴史の外ではなく歴史の中で行なわれる歴史内行為だから、予言そのものが歴史の現実を攪乱する。さらに、その予言もまた攪乱された現実から反作用を受けるから、未来は予言した通りにはならない。予言したそのことが予言に反する行動を引き起し、実際の未来は予言された事実とは違ったものになるからである。

われわれは歴史に包まれているとともに、歴史を包む。歴史と歴史記述、観測されるものと観測するものは、包み包まれる関係にあつて、歴史の変動を起こしている。歴史と歴史内観測者の循環的相互作用から、完結することのない歴史の不断の運動は起きてくる。

歴史は、観測者が観測される世界の中にいる自己観測系である。歴史は、その中に自己の観測者を含み、自己自身を描写し、自己自身を記述する。われわれが歴史を認識するということは、歴史が自己の内に自己を見ることである。われわれの歴史認識は、歴史の自己認識でもある。自己認識によって、歴史は自己形成していくのである。

歴史は、自己自身を描写することによって前進する。歴史は、自己自身を自己自身の中で描写し、この自己描写によって自己自身を形成し、形成された自己自身を再び自己描写し、そのことによって、また、新たに自己自身を形成していく。そして、それはいつまでも未完成である。だから、歴史の自己認識は限りなく続く。歴史は、自己言及的な循環を通して自分自身を変革していく自己創出系なのである。

われわれは、劇場の中の観客のように、自分たちが生きている歴史的世界を、その中で観測し、解釈し、行為している。われわれは、歴史の内部観測者であり、内部行為者である。内部観測と内部行為は新しい経験を内から創発し、歴史を切り開いていく。

歴史においては、自己観測に伴うどんなにミクロな攪乱であっても、その攪乱が歴史を乱し、それが全域的な構造変動を起こす。ここでは、観測行為と観測対象は分離できないから、観測結果は観測行為と相関的にしか現われない。歴史に不確定性原理が成り立つのは、歴史が、観測するものと観測されるものの動的な相互作用によって変動していく自己観察



系だからである。

記述されるべき世界の中に記述者がいるために、記述されるべき世界の構造そのものが変えられてしまうことを、記述不安定性と言う。歴史も、その記述者を自己自身の中に巻き込んでいる記述不安定系である。劇場の中の観客が役者に影響を与えているように、われわれは歴史内観測者であり歴史内記述者であることによって、歴史を駆動しているのである。

歴史内記述は一つの行為であり、それは歴史を動かす。記述するものと記述されるものは分離することができない。記述者は歴史の中から歴史を記述し、その記述の中に歴史そのものが埋め込まれているために、記述することそのことが歴史を変える。

### 〔歴史と行為〕

行為は歴史を開く。歴史は、ただ単に眺められるのではなく、生きられねばならない。生きるということとは、ある一定の状況の中に行為を投げ入れ、状況をつくっていくということである。行為し活動することが、生きるということである。行為して活動する人間によって、歴史はつくられていく。

その意味では、状況を切り開き、状況を変革していく行為こそ、歴史を動かす行為として評価しなければならない。行為によって状況は打開され、時代は開拓されていく。だから、時代の流れに抗して、その流れを転換していく行為を、歴史を動かす積極面に位置づけねばならない。

行為の決断は、ある行為をするかしないかの選択であり、二者択一である。二者択一の行為によって、状況は変えられる。一方を選ぶ行為が歴史を限定し、歴史の形成を起す。どちらの方向に進んでいけばよいか迷っているとき、どちらか一方の行為を選択することによって、歴史は一変する。

歴史は動くのではなく、動かすものである。歴史は、ひとりで変わっていくものではない

く、変えていくものであり、そうである以上、変える者がいる。人は常に何事かを言い、何事かを為し、働いている。その行為によって歴史は動く。投げ出された行為の一撃によって、歴史空間が一変することがある。われわれは、歴史によって形成されるとともに、歴史を形成する。

歴史の生成は、現在においてわれわれが行為することと切り離すことができない。過去の全歴史が現在の行為の中に集約して流入しているとともに、そこから未来が開かれていく。行為から出来事は生じ、歴史は生じる。意欲と情熱にかられた行動、苦悩し労苦する行為を通して、過去の必然は超克され、未来の自由は開かれる。客観的な動かし得ない歴史の流れがあつて、その流れに沿って、個々人の行為が位置づけられるのではない。われわれが行為することによって歴史は形作られ、行為の中から歴史が織り出されていくのである。人間は、歴史をつくる歴史的存在なのである。

現在の一瞬一瞬の行為によって、歴史は形成されつつある。行為は歴史を動かす基軸であり、歴史の意味を変えていく転回点である。歴史によって行為が規定されるだけでなく、行為によって歴史が規定される。人間は、歴史的条件に制約されながらも、自己の行為を通して、歴史を新たに形成していく。人間は、歴史的必然に単に支配されているのではなく、逆に、歴史の場で行為することによって歴史を動かしているのである。

現在は過去によって規定されているが、それはまた、未来に投げかけられる行為によって、規定し返される。われわれは、過去から規定されていると同時に、投げ出される行為を通して、未来から歴史を規定する。歴史的世界は行為の世界である。

歴史の変動は、行為的連関の中に一つの行為が投げ込まれることによって生じる。行為的連関の場に投げ込まれた行為は、その行為的連関を組み替え、新しい秩序を生み出していく。人は、行為することによって関係を形成し、行為的連関を変えていく。

われわれは、歴史の中で、歴史を形成しつつ行為している。歴史の外で、歴史とは関係なく、行為しているのではない。だから、当然のことながら、われわれが行為するということは、無限の相互連関性によって成り立っている歴史的世界を乱す。相互連関性の中にど

のような行為が投げ込まれるかによって、世界の形成の方向は変わりうる。かくて、歴史がどのような方向に進むかは分からない。

行為するということは選択するということである。この無数の行為の選択が無数の対称性の破れを構成し、歴史の過程や結果を非決定的なものにする。行為の選択と決断こそ、歴史の新しさを創造する。現在における行為の決断と実行の中に、過去と現在のあらゆる出来事が集約し、そこからシナリオのない歴史のドラマがつくられる。どのようなドラマがつくりだされるかは、その時その場での行為の選択と相互行為に依存するから、前もって予測することも、規定することも、法則化することもできない。

歴史における不断の創造は、個人が社会を限定し、行為することによってである。歴史は刻々と新たな世界を形成し、片時も同じ所にとどまることがない。歴史は、絶え間なく自己自身を再配置し続ける動的系なのである。

未来に向けて行為を投げ出すとき、ぶつかった苦難が過去の歴史に新しい光を投げかける。過去の像はわれわれの行為の投影であり、行為の変化に応じて歴史像も変化する。歴史認識の背景には、未来への予期や期待、要求や意図、動機や感情などがある。未来に向かってより深く掘削していけばいくほど、過去の像は新しい様相をもつて現われてくる。しかも、新しく得られた過去への認識がまた将来への決断を促し、未来に対する実践知を提供する。こうして、われわれは、新しい段階に飛躍していく。

人間は、前に進むためにも、後ろを振り返らねばならない。未来に向かって歴史を形作るうとするときにこそ、真の過去が見えてくる。未来を開拓するためにも、過去は必要なのである。このとき、過去は模範となり、抛り所となる。われわれは、過去に学ぶことによって、前に進むことができるのである。そればかりか、過去もまた、この未来への新しい行為によって更新され、その知識もより深められ、生きたものとなる。

未来への行為の必要性は、また、過去の歴史を復興する。しかし、復興された過去は、純粹にあった通りの過去ではない。過去も、更新されるとき、理想化される。こうして、歴史は、やむことのない復帰と再生によって、螺旋的に歴史を創造していく。

過去の記憶は単なる記録や保存ではない。われわれは、未来に対して行為を投げ出すことによって、過去の記憶からそれに相応しい記憶を呼び戻し、まったくどうなるか分からない未来に対処していく。だから、行為の投げ出しのしかたによって、過去の記憶は絶えず新しく蘇ってくる。

自己の可能性に向けて自己自身を投げ出すという行為が、歴史に対する問いかけを呼び起こし、それが歴史理解となる。われわれは、行為することによって理解し、理解することによって行為する。われわれは、前に向かって生き、後ろに向かって理解するのである。

われわれは、歴史の中で、身体を通して行為している生きた主体である。そういう行為する主体によって、歴史は認識される。われわれは、舞台の上に身を投じている役者のように、歴史の中に身をもって飛び込み、歴史を認識しているのである。

現在は、過去と未来の単なる接点ではなく、過去から未来への転回点である。われわれが立っている現在という時点は、そこにすべての過去が宿つるとともに、刻一刻と未来を作り出す支点である。そして、この現在という支点に行為がある。現在における行為の中にこそ、過去と未来は現前している。

過去・現在・未来へと連続する単なる時間があつて、その中で、私は行為しているのではない。私の行為の瞬間瞬間の中から、過去、現在、未来の歴史が紡ぎ出されてくるのである。どんな行為でも、過去・現在・未来という歴史的時間を瞬間ごとに組み替えている。

歴史は、現在の瞬間瞬間のところで生まれ出ている。そこには、歴史が飛躍する非連続点がある。現在の行為の瞬間、創造の瞬間において、われわれは過去を乗り越え、未来を開いていくのである。

歴史に限定される行為ばかりでなく、歴史を限定する行為というものを考えなければ、変動してやまない歴史は考えることができない。なるほど、われわれは、歴史の中に好むと好まざるにかかわらず産み落とされている。そのかぎり、われわれは歴史によって限定されているが、しかし、歴史を限定するのわれわれである。歴史と行為の相互限定によつ

て、歴史的世界は変動していく。歴史の変動は、歴史内行為と歴史の相互限定から生じるのである。このように、形成されるものの中に形成するものがある歴史の自己形成の動きを、歴史の外から決定論的に記述することはできない。

われわれは、日々、歴史のただ中を生きている。われわれは、歴史の中で行為しながら、歴史を形成している。誰も歴史の外に止まることはできない。われわれは、歴史の中にいて歴史を動かす歴史内行為者である。歴史の単なる傍観者ではない。

歴史は、その中で演じられる歴史内行為者の行為によって、内部から変更されていく。歴史は、その内部行為者によって、その規則そのものが変えられていく。だから、このような歴史を、歴史の外から決定論的法則によって縛ることはできない。たとえ法則で縛っても、歴史は気軽にその法則を破って飛躍していく。

その意味では、渦中の行為によってこそ、歴史は開かれると言わねばならない。渦中に身を投じ、意を決して新たな未来に突入していく行為こそ、偉大な行為である。

渦中の行為は観察される行為ではなく、身体を通して実践される行為である。身体なくして行為することはできない。人は身体を通じた行為の中で体験し、その体験の中にこそ新しいものが生まれる。われわれは渦中を生き、渦中で死んでいくのである。

渦中の行為の中には、原因も結果も、分別も反省もない。渦中の行為を動かすものは衝動や情熱であって、それは合理的理性を越えている。ひたむきに専心没頭し、止むに止まらず行なわれる行為こそ、歴史を動かす。没入する行為の中にこそ、真の自己がある。

はじめに行為がある。行為なくして歴史は形成されない。われわれがどのように行為し、どのように動くかということによって、歴史は新たに形成されていく。行為は、歴史を動かす主軸である。歴史の中に行為があると同時に、行為の中に歴史がある。

歴史学が記述する行為の外面的記述、紀元何年と言われるような均一な歴史的時間の上に位置づけられた客観的な行為は、同じ行為でも、精気のない実感のわかない行為に見える。

渦中の行為は、後からの反省ではつかむことができないのである。渦中の行為を外から客観的につかもうとすれば、それ自身が別なものになってしまう。

右往左往しながらも現場を動き切り開いてきた政治家、現実を翻弄されながらも命をかけて決然と立った革命家の行為、これら渦中に身を投じて歴史を動かしてきた行為の真実は、歴史学によって客観的に描くことはできない。

歴史は、絶えず新しい創造に向かって生成発展していく。不断の創造、それが歴史である。だからこそ、状況に変化を起し、事態を切り開き、まったく新たなものをつくり出す創造的行為を評価しなければならない。歴史は、ひとりでに変化していくのではなく、個々人の苦闘を通して形成されていくものである。

歴史の変革に着目するなら、最初に新しいものをつくり出し、新しい考えを提出し、新しい行動に出る少数の例外者の創造的力に注目しなければならない。それは、最初は極く小さなゆらぎにすぎなくても、それがやがて人々の相乗的な相互作用の中で拡大し、既存の秩序を崩壊に導くとともに、新しい秩序をつくっていく。

少数の例外者の創造的行為が相互連関性の場に投げ出されることによって、相互連関性そのものが組み替えられ、かくて、新しい時代が切り開かれていく。歴史には、時代を大きく展開させていく転回点と言うべきものがあり、そこには、ほとんど例外なく、偉大な個人の一途な行為が光芒を放っているものである。

偉大な英雄や天才や偉人、これを、歴史の創造を担う創造的個人として高く評価しなければならぬ。創造的個人は、歴史の道筋に決定的な影響を与える傑出した個人である。これら創造的活動をする卓越した個人は、苦難を乗り越え、時代を動かしていく。そのような創造的個人の創造的行為によって、歴史は創造されていくのである。

歴史的個人は、そこへと歴史の力が集まり、そこから新しい力が湧き出てくる歴史の焦点である。歴史を動かす傑出した個人の事蹟には、過去から現在に至るその社会のあらゆる出来事が集約しているとともに、そこから、新しい創造的出来事が生み出されてくる。傑

出した個人は時代を反映するとともに、時代を形成する。

傑出した個人の行動は、他の多くの人々の行動様式を変え、大勢の人々を巻き込みながら、歴史の方向に決定的な影響を与える。世界の歴史を大きく塗り変えるような巨大な変革も、もとは、偉大な一革命家の心の中に灯った火から出発している。日毎に新しく形成されていく生きた歴史は、そのような創造的個人の創造的行動から生み出されてくるのである。

行為によって歴史が開かれるとすれば、偉大な発明や発見が社会を一変させることにも注目しておかねばならない。発明・発見史上偉大な業績を残した天才や技術改良に尽くした名もなき技術者が、歴史変動に果たした役割は大きいと言わねばならない。長い人類史を振り返ってみても、新しい道具の発明や製作が社会を大きく変えてきた。

発明や発見や決断など、創造の時間は一回的な時間であり、瞬間である。その瞬間のところに、歴史の分岐点が形成される。過去を集めて未来へ突入する現在の瞬間に、歴史をつくる行為がある。歴史をつくる行為は歴史的時間を限定し、新しい歴史的時間を創造していく。そういう創造的行為によって、一時代を区切るエポックが形成される。エポックとしての歴史的時間は非連続であり、そこに歴史の飛躍もある。

歴史には何ら法則性はない。人類の長い歴史においては、歴史的個人の勇氣ある行動や偶然の発明・発見など、独創的行為が歴史を思わぬ方向に動かし、予測不可能な大きな変動を起こしてきたのである。

行為によって世界は開かれる。行為によって変革が起き、ものごとの意味が変えられるのである。そして、そこから、人間の歴史は大きく変わる。人は環境に規定されながらも、環境の制約を乗り越え、環境を新しくつくっていくことができる。われわれは、必ずしも、歴史的必然に支配されてはいない。

行為こそ歴史を開く。そして、そこに自由がある。人間は歴史を変革し、新しい歴史を未来につくっていく。なるほど、われわれは過去の歴史的条件に制約されているが、しかし、われわれは、現在における行為によってそれを克服し、歴史を新しく形成していくこ

とができる。そこに、行為の自由がある。

歴史は、歴史法則に支配されてはいない。人間は、行為によって、歴史法則を破る自由をもっている。法則を破る自由な行為が、歴史を新しく形成していく。歴史がすでにつくられていることに注目すれば、そこに必然と運命があると言わねばならないが、歴史をつくっていくことができることに注目すれば、そこに自由の地平が開かれてくる。われわれは、必然と自由との戦いを通して、未来を開拓していくのである。

未来の歴史は、現在における決断一つでどのようにも形成されていく。そこには予測不可能性があるが、予測することができない創造性にこそ、自由は宿っている。現在の瞬間は創造的であり、創造の瞬間にこそ自由がある。

人間の営む歴史は創造的進化の過程であり、絶えず変化し生成してやまない生命の運動である。

為すことは成ることであり、為すことなくして成ることはない。生成の中に行為があるとともに、行為の中に生成がある。

### 倫理について

#### 〔社会〕

人間は関係においてある存在であり、関係なくしてありえない存在である。この点では、人間関係が先にあつて、はじめて、一人の人間は当の人間であることができる。この人と人との関係こそ、社会というものの成立する場所なのである。

自己と他者は、関係のうちにある。関係なくして、自己も他者もありえない。しかも、自己と他者は、分離されていると同時に結合されている。分離されながら結合していること、



それが関係である。

われわれの社会は、様々な関係によって結ばれる多くの自己と他者によって成り立っている。しかも、自己と他者は、関係のうちにあつて、相互に限定し合っている。

関係は常に変動しており、この関係の変動に応じて、個人も常に変動している。さらに、個人の変動とともに、関係も変動し、社会も変動する。

人間の営む社会は相互連関性によって成り立っている。社会を構成する多種多様な要素は、互いに関係し、相互作用しながら、相互に影響し合い、相互に結びついている。すべてのものが相関的であるから、どの要素も孤立しては存在することができず、他から切り離すこともできない。

無限の相互連関性からなる人間の社会は、常に変化する流動であり、生成である。それは、多くの相互作用によつて常に動いてやまない生成する世界である。社会の各部分、各要素は絶えず動いており、その動きが全体に広がり、社会は絶えず変化し流動していく。

各個体は互いに関係し、関係の網の目をつくっている。そのため、一つの個体の振る舞いは、この場において、他の個体に影響を与える。また、逆に、一つの個体は、この場において、他の個体から影響を受け、場の振動とともに変化する。かくて、この場にあるものは、静止することなく、絶えず変動し、それとともに、場自身も変動する。

人間の営む社会は、関係体としての個々人が相互に作用することによって、次々と新しい構造を創発していく動的系である。社会を構成する無数の個人は、互いに関係し、互いに影響し、互いに結びついて、相互作用のネットワークを形成している。このネットワークから、新しい社会構造が生み出される。

社会は、そこに静止して存在するものではなく、絶えることなく生成変化していく世界の一部である。ここでは、各要素は関係によつてのみあり、関係によつてのみ変化する。社会は、過程であり、生成変化であり、新しいものを絶え間なく創造していく働きである。

社会にあつては、小さな偶然の出来事が増幅され、拡大され、大きな変化を生み出すことがしばしばある。偶然の出来事に左右されて、一つの方向へ対称性が破れる。一旦、対称性が破れると、その方向に向かつて、自己増幅的に自己形成が行なわれる。

人間の営む社会は、生命同様、外部と物資やエネルギーや情報を出し入れしている開放系であり、絶えず外部から物や知識が入り込んでいる。そのため、社会は、いつも内部にゆらぎをもっており、それが環境の変動に応じて増幅され、絶えず新しい形態と構造を生み出していく。人間の営む社会は、環境との相互作用を通して、外部環境の情報を読み込みながら、新しい構造を創発し、環境の変動に対して適応していく生きた系なのである。

社会現象は、生命現象同様、しばしば循環によって成立しており、どれが何の原因であるか明確に決定できない場合が多い。ここでは、むしろ、互いが互いにとつて、原因でもあり、結果でもあるという循環的相互作用が成り立っている。この循環的過程では、原因結果の連鎖は、巡り巡って自己自身へと回帰してくる。

社会の構成要素である個々人が表現する言動は、他者に影響を及ぼすとともに、その影響は、円環的・再帰的に自己自身に帰ってくる。そのため、それは、また、個々人の振る舞いを変えていく要因ともなり、かくて、また、次の振る舞いが生み出されてくる。そのようにして、個々人の言動は再生産される。この自己回帰的な運動の繰り返しによって、自己自身は自己を変革していく。生きた系は、そのように、自己言及的に自己自身を創出する。

社会の自己変革にとつては、自己反省作用はなくてはならないものである。これによって、社会は新しく問い直され、新しい方向も構想される。観察者は、そのような評価や構想の能力によって、社会の自己形成に参加することができる。その意味では、多くの批判者を内に抱えた社会でなければ、活力ある社会とは言えない。

社会は、人生がそうであるように、まえもつて決定された法則や計画に従って動いていくような系ではない。人間の営む社会は、予測不可能な環境の変化と、それに対する予測不

可能な対応との相互作用によって、その時その時の状況次第で、自己自身の形態や構造を決定していく。社会は、そのような非決定的な系であって、一つの社会がどのような新しい秩序をつくりだしていくかは確定的ではないし、予測することもできない。

社会は、不可逆な発展過程であり、常に形成的であり、創造的である。社会発展の方向が、将来どのような道筋を通って、どのような新しい形態を生み出すかということが予知することができないのも、この不可逆性からくることでもある。

われわれの社会は、秩序ある状態と混沌とした状態の狭間にあって変動している。というより、秩序と混沌の狭間にあるとき、社会は変動する。この変動の過程では、いつも、秩序と混沌が混在している。秩序から混沌へ、混沌から秩序への二つの動きが相交わって、社会は変動している。

社会も、混沌と秩序の狭間において、生き物同様、進化していく。秩序の中に混沌があり、混沌の中に秩序があり、秩序と混沌が交差するところが生成の場であり、創発の場である。

ここでは、諸要素がいつもゆらいでおり、そのゆらぎが大きくなって全体に及び、しばしば予測不可能な混沌状態に陥る。しかし、また、そこから新しい秩序も生まれてくる。社会も、あまりにも秩序相に近づきすぎると、硬直化し、環境への対応力を失ってしまうが、そのような状態になると、それに対する反作用のゆらぎが成長して、硬直化した組織の分解が起きる。また、その分解が進んで、あまりにも無秩序な混沌状態に近づきすぎると、そこから、それを秩序づける新たな動きが出てくる。

一つの秩序の中に、次の新しい秩序を目指す異分子のゆらぎが生じ、それがやがて諸要素の相互作用の中で拡大され、これが既成の秩序の崩壊をもたらす。このとき、無秩序と混沌状態が顔を出す。しかし、それは、また、新しい秩序をつくりだす力ともなる。

秩序から混沌への崩壊の方向にしても、混沌から秩序への形成の方向にしても、社会の変動過程では、その内部に常にゆらぎがある。そのゆらぎが増幅されて、無秩序化も秩序化ももたらされる。どの社会も内部にゆらぎをもっているが、このゆらぎが吸収しきれなく

なるとき、ゆらぎは大きく育ち、ある分岐点を越えると、その社会は急激に解体していったり、新しい構造をつくっていったりする。最初のゆらぎが取るに足りない小さなものであっても、それが重なって、ある臨界点を越えると、大きな変動がもたらされる。

社会が環境に対する適応力をもつには、むしろ、内部に不均質なゆらぎが温存され、多種多様な性質をもつ要素が混在していた方がよい。その方が、社会は、新しい秩序をつくりだして、新しい環境に柔軟に対応し、発展していく可能性がある。ゆらぎが秩序の中の混沌だとすれば、この混沌の中にこそ、新しい秩序は育まれているのだと言える。

秩序から混沌へ、混沌から秩序へ至る過程の中で、社会のもつ意味は問い直され、新しい意味が付与されていく。無秩序化と混沌状態は、新しい意味の模索の時期である。そこには、いつも、既成の社会の意味や価値や規範を問い直す例外的個人の行為がある。

社会の例外者が起こす出来事は、最初は、まったく些細な出来事であるかもしれない。しかし、その些細な出来事が、その後、すべてを変化させてしまうようなこととはしばしばある。その意味では、社会の例外者こそ、創造的力を担っているとと言える。社会が活力を維持し存続していくには、例外者を常に抱えておく必要がある。

社会は、秩序から混沌へ、混沌から秩序へ、絶えず変動しているのだが、その変動を起こす個人々人を無視してはならない。特に、自己自身の独自の主体的行為によって、新しい時代を切り開こうとする自立的個人の先駆的な行為には、注目しなければならない。

社会の秩序崩壊にしても、秩序形成にしても、どちらも、諸要素の相互連関性の場に個人の行為が投げ込まれることによって起きてくる。ある一人の個人の行為が、重々無尽の相互連関性の場で、次々と他に影響を及ぼし、それが相乗的に作用して、社会の自己形成は起きてくる。

## 【行為】

行為は関係によって規定されるとともに、関係は行為によって規定される。社会の変化と

創造は、この行為と関係の相互限定から生じる。この点に注目するなら、関係に合わせて行なわれる行為ばかりでなく、関係から逸れて、逆に関係を動かす行為も考えなければならぬ。そのことによって、関係の変動は起きるのである。

われわれは、自己と他者との関係のうちに生きている。そして、この関係から、自己のあり方も、他者のあり方も規定されている。その意味では、自己のうちには、他者が含まれていると言える。他者と関係のない自己はありえない。自己が自己であるという自己自覚は、自己が他者との関係においてあるということと切り離すことができない。

統一ある人格的主体は、多くの役割を演じ多種多様な面を見せるペルソナとしての人格と別物ではない。われわれは、いわば十一面観音のような存在であり、多であることにおいて一である存在なのである。自己とは他者との関係である。この他者との多種多様な関係の結び目が、通常、人格的主体と呼ばれているものである。

自己は行為を通して他者を限定し、他者は行為を通して自己を限定する。自己は他者から限定され、他者も自己から限定される。自己と他者は相互限定関係にある。

われわれの身振りや言語や振る舞いなど、個々人の行為は、自己と他者の関係によって変化するとともに、自己と他者の関係を変化させる。

行為の意味も、自己と他者の関係、間主観性の場において決まる。行為の意味は、単に自我の主観的な意図や動機によって決まるのではなく、間主観性の場に置かれた時にのみ客観的に規定される。ある行為は、間主観性の場で、他者によって、他者の視野から理解され解釈されることを通してのみ意味をもつ。しかも、その意味は、自己と他者の関係によって様々に変化する。さらに、この変化する意味に従って、自己と他者の関係も変化する。

相互行為は自己と他者の関係においてのみ可能であると同時に、相互行為によって、自己と他者の関係も変動していく。相互行為は間主観性の場で可能であるとともに、相互行為そのものが間主観性の場を変えていく。

行為の意味は、行為が置かれる連関性によって絶えず変換されていく。ある動作がある行為を意味するということは、必ずしも一義的に決まることではない。同じ行為であっても、同じ意味を表わすとは限らない。投げ込まれる場や関係に応じて、行為の意味は常に変動するのである。行為の意味は関係によって決定されるのであり、自己の側にも、他者の側にも、還元することはできない。

行為の意味は、行為が置かれている文脈の中で解釈されるとも言える。その文脈には、物や時間や場所など無人称的文脈もあれば、あなたや彼のような人称的文脈もある。それらの文脈によって、私の行為は、多様な意味をもちうるのである。

行為は意志や意図に基づいてなされる場合が多い。しかし、それが何を意味するかは、それだけでは決まらない。行為というものを、単に意図や動機など、主観の方からだけ意味づけることはできない。

行為は身体を通してなされる。身体なくしては、行為することができない。行為がまだ心の中で思い描かれているだけでは、行為ではない。行為は、身体を通して現実の世界に実現された時、はじめて行為となる。しかも、身体行為は、関係を表現するばかりではなく、関係を規定する。

言語行為も、関係に規定されると同時に、関係を規定する。このことによって、関係は変動し、世界も変動していく。

言語表現が間主観的機能をもち、自己と他者の関係、および自己と他者によってつくられる場を表現するとすれば、言語表現は、当然、この関係や場によって規定される。しかし、また、逆に、この関係や場においてなされる言語行為は、それがなされることによって、また、当の関係や場を変えてもいく。言語行為は、他者との関係の場で行なわれ、他者に対して何事かを伝達し、他者を動かす。そして、新しい状況をつくりだす。それは、一つの社会的行為なのである。

われわれの言動は、文脈によって、絶えず違った仕方解釈されていく。そのために、行

為や表現の意味は絶えず動いていく。意味は、一義的に決定されるものではなく、文脈によって絶え間なく変化し、変動していくものである。意味は、空間的にも、時間的にも、絶えず移り替えられていき、確定しない。むしろ、確定しないからこそ、相互理解は必要になり、そのためのコミュニケーションが成り立つのである。

他者の理解と言っても、それは、他者の本心に考えていることを見抜くことではない。他者の理解とは、むしろ、相手の表現を通して、それが、私自身の図式から見た場合にどのような位置づけられ、どのように映るかということの理解である。

その意味では、ある種の誤解が、社会の進展にとっては重要な働きをしていると言わねばならない。私の言動が、多くの他者によって、私の意図したところとは違った仕方理解されていくことによつて、私の言動は、私の意図を越えて社会的に意味づけられ、解釈されていく。理解は誤解なくしてありえない。誤解があるからこそ、コミュニケーションも進展し、自己と他者の関係の発展もある。自己と他者の間にまったく同一の世界と意味しか与えられていないのなら、自己と他者の間で語り合う必要もないであろう。

行為の連鎖がどのように進行していくかは、その場その場での自己や他者の多様な行為の選択に依存しているから、まえもって予測することも、規定することも、法則化することもできない。行為の連鎖は、無数の行為の選択という無数の対称性の破れによつて構成されている。だから、その過程も結果も非決定的になる。

一般に、われわれの行為連鎖は、二重の不確実性をもっている。それは、人と人が相互に連鎖する世界の中で、自己も他者も互いに限定されながら、しかも、次の瞬間どのような行為に出るかまえもって決定しておくことができないことによる。人と人の行為的連鎖によつて成り立つ社会も、いつも、このような螺旋的に絡み合った不確実性と非決定性によつて成り立っている。また、それゆえにこそ、われわれの行為的連鎖は絶えず変化し、社会も絶えず変動していくのである。

しかし、相互行為に二重の不確実性があるからこそ、われわれは、自分自身の行為を、不確実性をより少なくする方向に修正し、そこから一定の社会関係をつくりあげていくので

ある。その意味では、社会関係が出来るには、二重の不確実性という事態は必要だということになる。

行為と関係の相互限定関係から、社会の生成は起きてくる。その意味では、社会の生成・変化にとって、相互連関性における個人の行為は不可欠である。相互連関性における個人の行為は、どんなにささやかなものであっても、その相互連関性を変化させていく。相互連関性における行為こそ、社会の変動をもたらすのである。

われわれは、相互連関性の中に生きている。しかも、この相互連関性の世界には、その中に、その世界を解釈し、意味づけ、行為する主体が含まれる。世界を解釈し、そこで行為する人間も、また、その世界の中においてあり、それを除いては、世界そのものが成り立たない。だから、そこでの主体の行為は、世界の相互連関性を変える。

われわれの行為は、社会の生成変化を行為しているものであり、大きくは、世界の生成に参加しているのである。

一つの行為が、相互連関性の中で、次々と他に影響を及ぼし、及ぼした影響から、自らも影響される。また、別の行為の影響が、同じように全体に波及し、その全体からも、自ら影響される。そのような重々無尽の行為の連関から、それらの行為以上のものが生み出されてくる。

歴史上では、しばしば、既存の社会であるべき役割を引き受けず、既存の社会体制にあえて反抗的行動をとる例外者がいる。だが、これが、社会の変動を呼び起こし、新しい時代を切り開いてもいく。役割期待に添わない行動も、社会の変革を呼び起こす積極的行動である場合もある。そのような例外的個人は、既存の社会で与えられた役割を果たす代わりに、その社会を変革する役割を自分自身で創造していったことになる。

行為は、行為者の個性と状況の関数である。行為者の個性もそれを取り囲む状況も多種多様である上に、その状況は、行為者の個性や志向によって解釈され規定された状況であるから、一つの状況に対する行為のあり方は、ほとんど無限に存在することになる。一つの



状況に対応するのに、一つの行動様式しか許されていないわけではない。

行為の意味や価値が状況によって決まり、しかも、状況の変化によって絶えず変化していくとすれば、われわれは、自己が置かれている状況をよく読み、自己の行為を判断する必要がある。もともと、この場合、状況に適合し流れに逆らわずに行動するのも、流れに抗し自己の信念を貫くのも、どちらも意味をもつ。もことが縦横に連関し、常に変化していく世界では、意味のない行為はない。

行為がある意図のもとに計画される場合を考えてみても、当然のことながら、その行為がなされる状況が読み込まねばならない。どんなによい意図のもとに計画された行為でも、それがどのような状況のもとになされるかを十分加味しておかなければ、その行為は失敗に終わったり、かえって悪い結果をもたらすことがある。

行為が投げ出される場合は、諸要素の相互連関によって成り立っているから、一つの要素のわずかな動きも、全体に波及して、全体の変動を呼び起こす。かくて、状況は刻々と変わっていく。相互連関の場合は、常に変化し、片時も同じであることはないから、そこに投げ出される行為の意味や価値も、場の変化に応じて絶えず変動する。

行為は無限の相互連関性の中にあり、その中で、評価され、意味づけられる。だから、行為が投げ出される場や状況を考慮しなければ、それがどのような意味をもつ行為かということが決定できない。

行為は、身体行為にしても、言語行為にしても、それだけで意味をもつのではなく、それが置かれている文脈との関係で、その意味が定まる。現に、どの行為も、それが、いつ、どこで、どのようになされるかということによって、その善し悪しさえ評価される。しかも、文脈は多種多様である上に、絶えず変化しているから、そこに投げ出される行為の意味も、それに応じて絶えず変動する。

われわれは、常に不確実な状況に面している。それはいつも予想外のことを生み出すから、行為のシナリオをまえもって描いておいても、多くの場合、その通りになるとは限らない。

現実にはシナリオのない芝居であり、予測不可能なことばかりである。行為の計画が成功するかしないかは、不確実な相互関連性の場が決めるとも言える。

投げ出された行為が成功するかしないかは、常に偶然に左右されている。偶然の不思議な力が、一つの行為をどのような方向にも導いていく。それは、初めの計画では読み込めなかった盲点をいつも突いてくる。しかし、人間の力では左右できない偶然に挑戦するところに、行為の実行の際どさがある。

予想される現実の状況をどんなに読み込もうとしても、なお読み切れないものがあるからこそ、行為の計画は、決断によって、実行に移されねばならない。

われわれは、結局、自己と自己を取り囲む状況を見て、自己自身で行動を決断しなければならぬことになる。決断は、誰か他人に代わってもらうことはできない。その意味では、決断する時は、それが人生や社会を左右する重大なものであればあるほど、人はいつも孤独と言わねばならない。行為の決断とその結果の責任が、決断した自己自身に帰せられるのもそのためである。

行為の責任は、自分自身が負う以外にない。また、それゆえにこそ、われわれは自由というものをもっているのである。行為の決断は、どこまでも自発的に出てくるものであるからこそ、決断の中に自由がある。

われわれは、行為の渦中にある時、すべての分別を離れている。逆に言えば、行為の渦中にある時、自己は自己と一つになっている。行為の前には、あれこれと予想し、思い悩み、計算し、恐れもするが、行為の渦中には、それらはない。行為に没入している時、そこに真の自己がある。

一旦投げ出された行為の結果は、もはや、行為者のものではない。われわれが面している状況や場は、要素と要素の重々無尽の相互関連性によって動いているから、そこに投げ出された行為は、その相互関連の場で絶えず評価替えされ、意味づけし直されていく。したがって、われわれは、しばしば、自分は一体何をしたことになるのか分からないという当

惑に面することがある。行為は、いつも、複雑な相互連関の場に呑み込まれていくからである。

投げ出された行為は、相互連関性の世界の中に組み込まれ、現実化する。ここでは、私の行為は、私を離れて、もはや、私のものではない事実となる。私の行為は、相互連関性の中で、多くの他者によって、それぞれの視野から解釈され、あるいは称賛され、あるいは誤解され、あるいは批判され、あるいは糾弾されて、事実として一人歩きしていく。われわれの行為は、現実の障害にぶつかり、偶然事や運命的事柄に翻弄され、多くの他者に別様に理解されながら事実化していく。

相互連関性の世界に投げ出された行為は、多くの意図せざる結果さえ招く。よい意図から行なわれた行為が悪い結果を招いたり、悪い意図から行なわれた行為がよい結果をもたらしたりする。最善の目的と緻密な計画のもとに行なわれた行為が、最悪の結果を招いたり、逆に、怪我の功名といわれるように、愚かな行為が最善の結果をもたらしたりする。

時代は、一種の運命として立ちはだかるものであるが、しかし、それは、自己自身の積極的な行動によって切り開けないものではない。運命は、完全に人を支配しているものではない。とすれば、時代状況がどのようなであっても、自己の信ずるところに従って行動し道を切り開く積極的行為が、何ものにも代えがたいものとして評価されねばならない。

状況の変化に合わせて柔軟に対処していく行為ばかりでなく、逆に、状況に積極的に立ち向かい、状況を変えていく行為がある。われわれは、状況に合わせて生きていくばかりでなく、状況を変革していくことができる。場が変わることによって、行為も変わるが、行為が変わることによって、場も変わる。

われわれの行為は、どんなに些細な行為であっても、世界の生成を働いている。われわれは、行為することによって、世界の生成に参加している。

生成流転する世界の中での一つの行為は、その中に生成流転する世界を映し取っていると同時に、その中から生成流転する世界を紡ぎ出してくる。どんな行為も、無意味なもの

して運命づけられてはいない。

われわれの行為は、状況や時代、さらに自然万物の大きな流れに支えられている。しかし、それは、また、そのような場でわれわれが行為するということと別物ではない。生成の中行為があると同時に、行為が生成を起こす。生成によって行為はあると同時に、行為によって生成は起きる。この世界は絶えざる変化であり、生成である。われわれは生成の中にあり、生成を行為しているのである。

### 〔価値〕

人と人との関係の理法としての倫理も、関係の変動に応じて変動していく。倫理とは、人と人との関係の秩序を維持するための理法なのだが、人と人との関係は常に変動しているから、変動する関係に対する一律不変の規範や原理は存在しない。

行為の価値は、先天的な価値序列から一義的に決められるものではない。もともと、われわれの行為は、無数の要素が相互に関連した場に投げ出されるという形で実現されるから、投げ出された行為は相互関連性の場に規定される。行為の価値が、行為そのものによっても決定できず、価値の表からも決定することができないのはそのことによる。

価値図式そのものが、個人によっても、社会によっても、時代によっても、文化圏によっても異なるために、それに応じて、ある一つの行為が異なって価値判断されることがしばしばある。しかし、このことは、社会の不安定さを示すというよりも、むしろ、社会の動的あり方を可能にするものと言わねばならない。価値評価の違いや行き違いなどによって、社会は常に変動していく。それぞれに異なる価値体系の相関性によって、社会は変動し、自己形成していくのである。

相互関連性の場合は、そこに投げ出されるわれわれの行為によっても変動し、その変動とともに、われわれがもつ価値の表も変動する。そのため、われわれの行為の価値は、変動する連関性とともに、絶えず変動する。

人間の営む社会は、常に変動するものであるが、その社会の変動の局面に応じて、必要とされる徳も変わる。例えば、社会が比較的秩序を保っている状態にあつては、信頼や謙譲や規律、仁や礼が重んじられる。それらは、人間関係や共同社会の秩序を維持していくのに必要な価値だからである。しかし、社会の秩序が動揺をきたし、社会が一つの秩序から別の新しい秩序へ動いていくような変動期にあつては、状況に柔軟に対応していくための徳が必要になってくる。この場合は、思慮とか賢明などが尊ばれることになる。また、無秩序から新しい秩序を形成していかねばならないような状況にあつては、むしろ、矜持とか忍耐とか勇氣の徳が注目されることになる。必要とされる徳も状況によつて変わり、相対的なのである。

人間の営む現実の社会は、ある程度の秩序をもつとともに、無秩序をも抱えている。秩序の中に無秩序があり、無秩序の中に秩序があり、両者が絡み合つて、現実の社会は生成変化している。それに応じて、倫理も、また、信から不信へ、不信から信へ、信と不信が交互に錯綜しながら、社会の生成を表現している。とすれば、信頼とともに、非信頼という徳も、同時に必要なのだということになる。

われわれの社会が秩序と無秩序が絡み合つて生成変化していくものだとすれば、その時々々の状況に適した倫理と、それに対応した徳目を考えねばならない。思慮という徳は、人生の変化する状況に合わせてながら、自己自身より良い行為の仕方を追求する実践知である。ここでは、行為のあるべき基準は必ずしも一般法則や規範そのものにはなく、それをいかに状況に対して適用するかを考え合わせた一種の直観的な判断に置かれる。

思慮という徳は賢明さにも通じる。賢明な人は、洞察力と思考力を通して、与えられた状況の中で最も適切な道を見出し、人生の様々な困難を正しく切り抜けていく。賢明な人は、また、現在の状況ばかりでなく、将来の状況をも考慮に入れて、それに備えた行動をとるから、状況が変化しても慌てることなく、適切に生きていく。賢明さは、われわれがよりよく生きていく上で必要な徳である。

行為は、関係を組み替え直し、連関性を変え、状況を切り開いていく。とすれば、この場

合は、むしろ、関係を動かし、連関性を変え、状況を新しく切り開いていく積極的行為が必要である。勇氣という徳が尊ばれるのもこのことによる。それは、困難に直面しても屈伏することなく、忍耐強く立ち向かい、創造的で偉大な業績を成し遂げる意志の力である。

どこでも、倫理的徳目は相互に矛盾対立するが、社会を常に生成変化するものとみれば、これらは矛盾ではなくなる。矛盾は、むしろ、社会を止めて、その秩序の相においてのみ見ようとすることから起きる。われわれの社会は、秩序の中に混沌があり、混沌の中に秩序があり、秩序と混沌が混在しながら、常に生成変化するものである。倫理も、この生成変化の相において見られねばならない。

その行為が正しいかどうかは、その行為の置かれる状況を考慮に入れなければならない。いつも、ある状況のもとではどのようなようになさねばならないかが、考えらるべきなのである。行為の正しさは、規範によってだけでは決まらず、その行為がなされる文脈や文法、使用規則によって決まってくるものだからである。

もともと、義務と義務は矛盾対立する。われわれの行為は常に複雑な状況のもとで行なわれる行為であるから、われわれは、多くの義務を同時に遂行しなければならない。そのために、義務間の矛盾葛藤が生じ、われわれは悩まねばならないことになる。どのような行為を選択しても、一つの義務を守れば、もう一つの義務に反することになる。しかも、行為は一つしか選択できないから、無条件に拘束力を要求できる普遍的な義務を見出すことは、現実には不可能だということになる。

われわれに与えられている義務は多様であるから、われわれは、それらの中で一つを選択し、決定しなければならない。何を選択するかは、自己の信念に基づく。しかし、この良心による行為の決断は二者択一の道しか残っていない。

状況倫理は、自己の行為を規範に照らし合わせて律するよりも、何よりも、状況に応じて決断することを重んずる。その意味では、われわれは、決断を下さねばならない時には、その状況に応じて、しばしば道徳的誤りを冒さねばならない時があるのである。

われわれは、置かれている状況と諸価値間との緊張関係の中で、自己自身で自己の行動を  
決断しなければならない。自己自身による決断というところに、自由というものがある。

われわれは、多種多様で絶えず変化していく状況に対して、その場その場で、柔軟に対処  
していかなねばならない。この場合、求められるのは、与えられた状況に対して行なわれる  
行為の適切さである。行為の正邪善悪は、行為が遂行される場所・時・機会などの状況に  
対して適切か不適切かによって判断されねばならない。

一つの行為が適切か不適切かは、原則のみによっては決まらない。それは、むしろ、原則  
を個別的な状況にどのように適用し、どのような行為を決断するかによる。そして、この  
行為の適不適にこそ、行為の倫理性は問われねばならない。どのような行為も、状況に規  
定されている。

行為の形は、常に変化する状況と常に変化する自己との相互作用を通してつくられていく。  
とすれば、われわれは、絶え間なく変動する状況を読み込みながら、その場その場で、直  
面した状況に応じて、自己自身の行為を適切に選択していかなねばならない。しかし、それ  
は、どこまでも、常に変化する自己と常に変化する状況との相互作用によって決まること  
なのだから、どのような行為が最も適切かは、いつでもどこでも、誰にでも当てはまる形で  
一般化することはできない。〈汝なすべし〉という断定的な命令が、いついかなる場合でも  
絶対的なのではない。

状況倫理は、行為を選択する場合、単に原理原則だけを機械的に適用することを避ける。  
むしろ、現に起こりつつある状況との関連で、多くのことを考慮し、対立する諸価値を考  
慮の上、何が最も適した対応かを考え、柔軟な判断力によって一つの行為を決断すること  
を勧める。この場合にも、行為の選択にあつては、最終的には、自己の良心に従って決断  
し、決断したことに責任をもつということが必要である。

われわれは、ものごとが相互に関連した複雑な状況のもとに、一つの行為を投げ出す。一  
つの行為をそのような場に投げ出すということは、現実の状況とそこでの規則に身を委ね  
ることである。それは一つの冒険であつて、どのような結果が生じるかは分からない。意

志し意図し企図した通りの結果になるとは限らない。

行為が投げ出される場合は相互連関性のあるから、そこには予測することのできない偶然が入り込む。偶然はどのような結果でも生み出す力をもっている。だから、行為の結果は非決定的である。意志し意図した通りの結果を得られないことがあるのは、そのことによる。

よい意志から行なわれた行為でも、悪い結果を招いたり、悪い意志から行なわれた行為でも、よい結果をもたらしたりする。その意味では、どんなによい意志からなされた行為でも、誤りを犯す危険にいつもさらされているのである。しかし、たとえ意志し意図しなかつたことであっても、自己の行為の結果に対しては、責任をまたねばならない。

一般に、われわれの行為については、その内面的動機や心情や信念のみを重視するだけでは、行為の結果に対する責任がおろそかになる。どんなに純粋な動機や心情や信念からであっても、行為の結果が悪害をもたらした場合には、その結果に対する責任を免れない。

どのような善意志から行なわれた行為であっても、その行為が投げ出された状況が悪ければ、よい結果を生むとは限らない。それでもなお、その結果への責任を取るのが、責任倫理の立場である。ここでは、行為を生み出した行為主体の意志や意図、心情や動機は、行為そのものの善悪を判断する重要な要因とはみなされない。

行為によって状況は打開され、社会は変革され、時代は切り開かれていく。だから、状況に適合していく行為だけでなく、逆に、状況をつくっていく行為にも注目しなければならぬ。

英雄的行為は、状況を切り開き、状況をつくり出していく行為の典型である。英雄は、与えられた状況の困難に対して、危険も孤独も死も恐れず果敢に戦い、並外れた勇氣と知力と胆力によって、新しい時代を切り開いていく。彼の前には避けることのできない運命が立ちだかっているが、彼はそれにくじけることなく、自らの力によってそれと戦い、運命を打開していく。彼の行為は強力な意志によって支えられ、しかも、それは通常の節度



や分別を越え、限度を越えている。

英雄のもつ徳は、なによりも（勇気）である。英雄は、どのような苦難に対しても屈伏することなく、それに耐え、勇敢に戦っていく。英雄は、不屈の精神をもって、あるべき理想に邁進していく。英雄は、いかなる困難があろうとも、自己が一旦決断したことは、断念することなく断固としてやり抜いていく。

英雄の勇気ある行為によって、社会は大きく変革されていく。その行為は、既成の社会秩序から見れば、道徳法則にも従わず、人倫の掟をも破り、法や慣例をも無視する悪なる行為である場合がある。しかし、この悪なる行為が、社会を動かし、時代を動かし、歴史を創造していく。その意味では、悪には創造性が宿り、積極的意味があると云わねばならない。

英雄は例外者であり、しかも、創造的例外者である。英雄は、その行為によって、秩序から混沌へ、混沌から秩序へ、時代を大きく変革していく。その変革を可能にするのは、英雄の主体的行為である。時代の大きな変革や歴史の変動を起こすものは、そのような創造的例外者の創造的行為による。

英雄は、おおむね変革者である。英雄は、旧秩序と戦い、新秩序を樹立していく。英雄は、時代の流れに反抗して戦い、自己の信念を貫いて行動する。それが、混沌から秩序へ、歴史を大きく動かしていく。英雄は時代が生み出すとともに、時代を生み出す。英雄は、一つの秩序からもう一つの新しい秩序に移行する歴史の変動期に登場する。

歴史的創造を担う創造的個人は、英雄ばかりではない。宗教や学問、芸術や技術の分野に登場してくる天才たちも、歴史の創造を担う創造的個人である。これらの天才は、その人格を通して行為や作品や理論や発明などによって、歴史に大きな影響を与える。彼らは、その個性的な人格を通して、独創的な思想や形式や方法を創造することによって、旧来の価値を越えて、新しい価値を創造していく。そのことによって、古い時代は去り、新しい時代は訪れる。

強い意志に基づく天才の行動と創造がなければ、歴史は動かないし、社会はいつまでも停

滞したものに終わるであろう。新たな価値を創造する能動的主体の積極的行為によって、状況は変革され、社会は新しく形成されていくのである。

歴史的にみても、今まで、偉大な英雄や天才や聖者が、当時の社会の非難に抗して、その悲劇的な生を通して、新しい価値を創造し、新しい時代を形成していった。われわれの社会は、そのような創造的行為によって、新しく編成し直され、新しく自己自身を形成していく。また、そのことによって、社会は、いつもその創造性を失わないでいるのである。

どんな障害をもものともしない天才の実践的な行為が、社会の変動をもたらす。天才は、多くの場合、その時代の例外者であるが、この例外者の創造的力が新しい時代を創造していく。天才は時代の常識に抗し、古いものとの抗争を通して、新しい価値を創造していく。創造的個人の主体的行為によって、社会は一変する。天才の苦闘を通して、新しい歴史は形成されるのである。天才は、新しい時代を創造する生命の躍動点である。

生成こそ価値の源泉である。ここでは、単なる秩序維持は普遍的な価値ではない。常に変転し常に創造する活動性こそ、価値の源泉でなければならない。

常に自己自身を形成していく流動的な社会では、行為の善悪も相対的にしか現われない。価値判断は、その時々々の文化的・歴史的状况によって形成される。

行為は、行為そのものによってではなく、行為がなされる状況によって、多様に評価される。行為の善悪も、その行為そのものによって決まるのではなく、それが行なわれる相手、場所、時など、状況によって決まってくる。しかも、状況は常に変化しているから、そこでなされる行為の善悪も常に変動する。

何ごとも、それ自体において価値をもつのではなく、そのものが置かれている諸関係によって、価値は生ずる。だから、行為の善悪も、状況次第で変動する。それゆえ、ある状況のもとでは善い行為が、別の状況では悪く、ある状況では悪である行為が、別の状況では善ともなる。

われわれが営む共同社会は常に動いている。それに応じて、善悪も互いに絡み合いながら、社会の生成発展に貢献している。その意味でも、善悪は、また、相対的・相関的なものだと考えねばならない。

行為には、本来、善悪というものはない。ある面から悪なる行為と思われたものでも、善にもなりうるし、ある面から善なる行為と思われたものでも、悪にもなりうる。また、善から善が生じるわけでもなく、悪から悪が生じるわけでもない。善から悪が、悪から善が生じることもしばしばある。一つの行為が善となり悪となるのは、状況と関係により、それは相対的なものである。

ものごとの善悪は、相対的・相関的なものである。同じ一つの事柄に関しても、善悪どれでも述語づけることができる。善悪は、一つの事柄が他に対してもつ相反する二つの面だと言ふべきかもしれない。善悪は互いに絡み合っている。

一つの行為は、相互連関性の場を通して、思わぬところに影響を与えている。だから、善なる行為でも悪ともなり、悪なる行為でも善ともなりうる。とすれば、本来、われわれの行為には、善悪はないのだと言わねばならない。善悪は、むしろ、相互連関性の場から、後になって判断される反省概念にすぎない。

善悪は相対的概念であり、相補的概念である。善と悪は互いに互いを必要としており、互いに依存し合い、相転換して、歴史の生成と創造を担っている。善と悪は、ともに、世界の生成に寄与している。しかも、世界は常にこの生成の場にあるとすれば、われわれは、常に善悪の彼岸に立っているのだと言わねばならない。

世界の生成が起きてくる原初の混沌は、善悪以前のところにある。それは、善でもなく悪でもなく、また、善でもあり悪でもある。われわれの一時一瞬の行為は、いつも、この善悪を超えた混沌に通じている。

われわれは、生成変化する世界において行為していると同時に、このわれわれの行為によって、世界の生成変化そのものが起きてくる。行為のあるべきあり方も、生成の世界にお

いて捉えねばならない。

われわれは、行為することによって、行為の根源に至り着き、生成の根源を知ることができ。宇宙の根源はあらゆる創造の原動力であり、この原動力に根差した行為は、生死を超越している。行為を通して、生成する宇宙の根源と一つになる時、人間は真に自由を得る。

生成する宇宙にあつては、善悪の区別はなくなる。人間の本性が生成する宇宙にその根源をもっているとするなら、そこには善も悪も存在しない。生成する宇宙の根源は善悪の彼岸にある。むしろ、相対的な善と悪はこの根源から派生してくるものだと言うべきであろう。

宇宙の限らない創造活動の表現として、われわれの行為がある。われわれの行為は、単におのれ一個の意志だけから成し遂げられるのではなく、生成変化する社会や自然や宇宙そのものの支えがあつて成り立つ。行為の価値の源泉も、最終的には、この生成変化する宇宙の根源に求めねばならない。

流れに任す行為と、流れを起こす行為は、一つにならねばならない。流れを起こす行為が流れの中にあり、流れに任す行為が流れを起こす。生成の中に行為があるとともに、行為の中に生成がある。

## 宗教について (1)

### [畏怖]

宗教は、大いなるものへの畏怖から出発する。万物に宿る宇宙の不思議な力への畏怖こそ、宗教の本質である。

人間は、人間自身の力を超えた偉大な宇宙の力を怖れた。原初の人間が、異常なもの、不

思議なもの、災いをもたらすものを、特に怖れた背景には、宇宙に宿る偉大な力への無限の畏怖の念があった。

人々が、この畏怖の念から、大いなる力をもった自然を偉大な生命力をもったものとして崇拜したのも不思議ではない。人々は、天空、太陽、月、星、雷、風、大地、草、木、土、石、海、山、洞窟、水、火など、自然のすべてのものに宿る大いなる生命力の中に神的なものを見ていたのである。

天地に宿る自然万物は偉大な力を持ち、その偉大な力によって、人間に豊かな恵みを授けてくれると同時に、恐ろしい猛威も振るった。この大自然の力の前で、人間は無力であった。人々は、この大いなる自然の力を恐れ、大自然の睿智を越えた力に畏怖の念を懐いたのである。

この宗教感情は、人間が偉大な力をもった宇宙の中に属しているという感情によって完成する。大自然の偉大な力によって自己が生かされているという感情、自己と万物が一つの大きな生命によって貫かれて、共に大いなるものうちに生かされているという感情、それが宗教的感情の帰結である。

宗教とは、大いなるものへの畏怖と帰一、他ならぬ宇宙生命への畏怖と帰一の感情である。諸宗教が立てている精霊、靈魂、神々、絶対者、仏などは、宇宙の根源的生命の表現である。

無限の活動力としての宇宙生命の場では、人間、動物、植物、物質、すべてのものがその根源へ帰一する。根源的な宇宙生命への合一の感情こそ、宗教の原初的感情である。

原始宗教においても、古代宗教においても、高度宗教においても、例外なく行なわれている様々な宗教儀礼は、人間が大いなるものを畏怖し、大いなるものに帰一しているという宗教感情の表現であり象徴である。人間は、儀礼を通して、大いなるものに通じるのである。

人間をはじめ、あらゆる生きとし生けるものが、大宇宙の一部であり、大宇宙を映す小宇宙であることを、諸宗教は、儀礼や神話を通して象徴的に表現している。人間、動物、植物、物質の個体の一つ一つが宇宙の命の表現であり、その中に全宇宙が働き出ていること、したがって、また、すべてが宇宙全体とつながっており、宇宙の根源的生命に帰一するということを、宗教は、無数の表現形式を通して、語り続けてきたのである。

太陽の運行、月の満ち欠け、四季の変化、昼と夜の交代、潮の満干、どれをとっても、宇宙は周期を描いて絶えず動いている。人間も、また、この宇宙の運行を映している。人間は宇宙の中にあり、宇宙は人間の中にある。われわれは大なる宇宙の中に生きているとともに、われわれの中に大なる宇宙が生きている。

人間が人間として大地に立ったその時から、人間は、世界の中に組み込まれたあり方から離脱し、世界の中でありながら、世界の外に立つことになった。そして、人間は、世界を自己自身の外なるものとして認識すると同時に、自己自身を世界の外なるものとして認識した。人間が世界から開かれるとともに、世界が人間に開かれたのである。

以来、世界は、人間にとって、一つの大きなものとして立ち現われ、人間は、これに対して、畏怖という感情によって応えた。そして、人間は、また、この大きなものを、世界内存在によって表現した。聖なる石や聖なる木、神像や聖画、神殿や寺院、教典や聖人、それらは大きなものの象徴である。この象徴を通して、人間は、大きなものにつながり、大きなものに帰一する。

世界から開かれ、世界が開かれてあるということは、人間に大きな不安をもたらした。人間が人間として大地に立った時、何よりも先に追ってきたものは、大自然の力に対する自己の無力と不安であった。この時、人間は、自己自身の存在の根拠の不確かさを自覚した。かくて、人は問う。世界はどのようにして生まれてきたのか。人間はどこから来てどこへ行くのか。人間は、世界の中にあるとともに、世界を問う者である。人間は、世界を自覚するとともに、その世界における自己自身を自覚した。この時、人間にとって、世界と自己は限らない謎として迫ってきた。このような場面の中に、宗教感情は生まれる。

しかし、大いなるものへの帰一の感情の中で、人間は再び世界と合一する。人間が世界の外に立ち、世界と自己が分離したところから、大いなるものへの畏怖も、自己自身への不安も起きてくる。しかし、大いなるものへの感情において、再び世界と自己は結びつき、自己の安定した場を得ることができる。世界と自己を大いなるものの中で再び連関づけ、自己を支える根源的基盤を求めるところこそ、宗教に他ならない。この時、人は、存在の根拠の不確かさの自覚を越えて、再びより深い存在の確かな根拠を見出すことができる。

### 〔大地〕

原初の人間が目前に広がる広大な大地に見たものは、何よりも、植物や動物を育む無尽蔵な産出力であつたであろう。大地は、この無限の産出力ゆえに崇拜された。大地は、植物、動物、人間、すべての生きとし生けるものを生み出す限りない力であつた。大地のもとで、植物、動物、人間は、一つの生命の糸によつて結ばれていた。

大地は、無限の産出力であり、あらゆる生命とその豊穡の源泉であり、それ自身が無尽蔵な生命であり、生成そのものであつた。とすれば、これが万物を生み養う偉大な母と観念されたのも不思議ではない。

太古の人々にとつて、大地は、何よりも、そこからあらゆる生命体の生成してくる場であり、そこに万物が根を下ろす土台であり、そこを通して宇宙の無限の生命力が無尽蔵に発現してくる源泉であつた。それは、あらゆる生き物の生死を超えた永遠性をもつていた。この永遠の生きた大地が、神として、しかも、偉大な母神として崇拜されたのである。人間はこの大地にしっかりと根を下ろし、この大地を通して宇宙の根源的的生命につながっていた。

しかし、冬になれば、草花は枯れ、木々は葉を落とし、穀物も取り入れられ、野山の獣や鳥たちもねぐらに籠り、虫たちはその短い一生を終えて大地に帰る。大地は、また、あらゆる生命がそこへと帰り、そこへと死し、そこへと衰えていく懐でもあつた。かくて、あらゆる生命の源泉であり、無限の生成力の源と考えられた大地は、同時に、あらゆる生命

がそこへと帰っていく死の場所とも考えられた。人間も、動物も、植物も大地から生まれ、そして大地に帰っていく。

命あるものが大地から生まれ大地に帰るといふ（生から死）への方向は、また（死から生）、つまり大地に帰ったものが再び大地から生まれてくるという再生の思想へと発展していく。大地は、生きものが死し、死したものがそこから再生してくる場であり、母胎であった。生とは大地の胎内を離れることであり、死とは大地の胎内へ帰ることである。とすれば、その大地の胎内から、再び命あるものが生まれ出ると太古の人々が考えたのも、不思議なことではない。

大地の霊力、生命力は、大地から出て、あらゆる生きものの中を通過して大地に帰り、これが永遠に繰り返される。この生命の永遠回帰、永遠の循環こそ、原初の人々が信じて疑わなかったことであった。この世界に存在するものがどんなに変転しようとも、宇宙の目に見えない生命力は果てしない循環の中で保存される。

## 〔死〕

宗教感情の発生にとつて、死の自覚は大きな意味をもっている。原初の人々は、死を恐れ、死霊を恐れたが、この恐怖の感情にも、目に見えない偉大な力への畏怖の感情が現われている。そして、人は、埋葬という行為によつて、人間の死が大いなるものへの帰一に他ならないことを表現した。

人はなぜ死ぬのか。人はどこから来て、どこへ去るのであるか。死後の世界は果たしてあるのだろうか。昔も問われ、今も問われ、なお答えられないこの永遠の問いは、人間が人間として大地に立った時以来の問いであった。と同時に、この死の自覚とともに、世界もまた巨大な問いと化した。この世界はどこから来て、いかにして存在するに至ったのであるか。宗教は、人類誕生以来、これら、人間の死と世界の存在についての問いに、多くの神話や儀礼を通して答えてきた。宗教というものの大きな出発点が、この死の問題であった。



古代宗教は、この人間の死を、人間を超える大いなるものへの帰還としてとらえた。死とは宇宙生命への帰還に他ならない。人間は、宇宙の大いなる根源から来て、宇宙の大いなる根源へ帰る。人間が人間として大地に立った時以来、死の儀礼は、死が大いなるものへの帰一、宇宙生命への帰一に他ならないことを語ってきた。

人間は、死を通して宇宙生命へと回帰し、またそこから再生してくる。それは、生の終着点であると同時に、生の源でもある。死ぬことと生まれることは一つである。死は生であり、生は死である。生から死、死から生への無限の循環の中に、人は生まれ人は死し、その根源的生命は永遠である。

沈んでも昇る太陽、欠けても満つる月、消えても現われる星、滅ぼすと同時に甦らせる大地、死しても甦る植物は、人々に死と再生の哲学を教えた。死は終わりではなく、新しい生の始まりであることを教えたのは、大自然の循環であった。人間の生死も、自然と連続しており、大自然の循環の中に組み込まれたものであった。自然の永遠の循環に加わることよって、死者も、永遠の生を受け、不死となる。宇宙生命への畏怖の念から出発した古代宗教は、宇宙生命への帰一の感情に、その最も深い基盤を見出したのである。

それどころか、古代宗教では、宇宙そのものも死と再生を繰り返して、常に更新されるものと考えられてきた。太陽や季節をはじめ、月や大地や植物など、多くの循環するものが、宇宙そのものの死と再生、周期的な更新という観念を生み出した。

宇宙も、周期的更新を繰り返して、永遠の生命を保つ。宇宙感情は、人類が人類としてその営みを始めた時以来懐かれてきた感情である。それは、宗教そのものがそこから出発した感情でもあった。宇宙生命は、この宇宙に存在するあらゆるものに宿って、それに生命を与えている。

古代人は、宇宙の生命力は永遠であり、永劫に回帰するものと感じていた。この宇宙は、永遠の生成であり、不断の流動変化であり、無限の創造である。宇宙の根源的生命は、万物を通して自分自身を現わし出す。万物は、宇宙の根源的生命に貫かれて、常に生成変化している。ここでは、人間も、動物も、植物も、すべて、宇宙の根源へ帰属している。人

間をはじめ生きとし生けるものの死は、この根源的宇宙生命への帰還に他ならない。

### 〔創成〕

混沌から万物の生成を説く世界創成神話は、一般に、ある種の原初の物質や胚素から世界がおのずと生成してきたと考える。この生成型創成説は、世界がある混沌状態から生成してきたという。世界の多くの創成神話に共通する観念は、混沌からの万物の生成という観念である。すべてのものとその秩序は、形なき混沌から次々と生成してくと考えられたのである。

生成型創成神話は、世界創成を（生成）という原理によって説く。つまり、原初の混沌状態からの万物の生成を物語る。世界と神々そのものが無限に生成してくるものと考えられたのである。それは、存在を生成という原理によってとらえる。

古代神話は、事物の存在を（生む）という原理によって説明しようとしている。宇宙の根源に物を産出する無限の力が働き出しており、この生産力によって万物は生成してくと、古代人は考えた。宇宙の生産力は無尽蔵であり、そこから、あらゆるものが生み出されてくる。そこには、無限の生命力に対する古代人の深い信仰がある。

どこの神話でも、一から二が分裂し、分裂した二が一に結合して、また新しい二を生み出すという論理によって、神々が次から次へと生まれてくる生成の系譜が形づくられる。それは、神話の論理であり、生成の弁証法である。一から二への分裂、二から一への結合、そして、対立者の戦いを通して、万物は生み出され、世界は、混沌から秩序へ生成発展していく。かくて、光と闇、時間と空間、天と地、太陽と月、昼と夜、星、地下、陸と海、山と川、野、金属や石、動物や植物、そして人間など、万物が生み出され、その秩序が形成される。

世界のどこにもある創成神話は、万物はいかにして生じるか、神々はいかにして生まれ出るか、国土はいかにして出来たか、人類はいかにして生まれ来たったかなどについて説くものである。そこには、世界の存在に対する驚異の感情がある。この世界に対する驚異

の感情こそ、宗教感情がそこから発する出発点であった。

### 〔儀礼〕

生と死をはじめとして、人間のすべての営みは、宇宙の循環の中で営まれる。人間が人間として大地に立った時以来、諸儀礼は、人間の生そのものが宇宙秩序の中にあり、宇宙秩序が人間の生そのものの中に宿っているということを表現してきた。儀礼は、人間存在が宇宙秩序の中にある存在だという原初的宇宙感情の象徴的表現なのである。

宇宙生命への畏怖という宗教感情は、宗教的象徴として表現され、その象徴の体系が儀礼である。古代社会の儀礼は、宇宙論的な意味体系の中で、人間存在の根源的意味を、その象徴群によって表現する。それゆえ、儀礼に参加することによって、人間は単に個人として存在するのではなく、大宇宙の中の小宇宙として、全体の中の部分としてあることを、人は理解する。そして、自己一個の生と死を越えて、自己の生命は、永遠に存在する宇宙の生命と一つであることを理解するのである。この時、人は、その存在の意味を獲得し、安定的基盤を得て、一個の人格として統合される。儀礼が人々を結びつけ、社会の統合原理となるのも、そのことによる。

古代社会の思考様式は、普遍を特殊によって表わす象徴思考である。古代人の象徴思考は、部分の中に全体を、小さなものの中に大きなものを集約して表現しようとする。古代人は、象徴と象徴の連鎖によって構成される象徴体系をもち、それによって世界観を表現する。宗教は、象徴を通して世界と人間に究極の意味を与える象徴の体系である。

聖なる時間と聖なる空間の交差するところにおいて成り立つ宗教儀礼は、その中で、時間と空間の交差する宇宙そのものを表現する。人々は、この儀礼の聖なる時空を通して、宇宙と交感する。人間をはじめ生きとし生けるものは、宇宙の大なる生命にあずかり、それを分かち合っている。古代の儀礼は、そのことを、繰り返され定型化された身体行為によって表現していたのである。

### 〔罪と悪〕

いつの世も、この世は、災い、不正、不条理、苦、空しさに満ちていた。現世は悪であった。この悪は、古代の宗教世界でも、ずっと早い時期、人間がおよそ文明というものを生み出した時に、すでに深く自覚されていたことであつた。大いなるものへの畏怖から出発した宗教は、この悪の自覚によつて、より深められる。

世界の多くの神話が語る人間の楽園喪失の物語や墮罪の物語には、人間が世界から離反し、世界から見放されてあるということ、世界から離脱し遠ざかってしまったということの自覚を表現しているとみななければならない。神話が創造された原初において、すでに、人間は、もとの全一な世界から分離し、完全さと充足を失つた存在とみられている。そして、それを、原初の人々は、罪と受け取つたのである。その意味では、人間は、罪を背負うこととなくして、人間ではありえない。世界から離反することなくして、人間ではありえない。

人間が人間として生きていくには、神への反抗なくしては生きていくことができない。その意味では、人間は、最初から罪ある存在であり、同時に、罰せられてある存在である。人間が人間として存在しうるのは、人間が悪への自由をもっているからである。

キリスト教や仏教などの高度宗教は、この罪や悪の問題を、人間存在の根底に巣くう問題として、より深く自覚した。宇宙の根源的生命からの離反、これが罪であり、その結果が悪である。これを深く自覚することによつて、宇宙の根源的生命へと復帰すること、それが宗教の目指すところである。そして、これは、キリスト教や仏教など、高度宗教において、より高度な完成を見たのである。

## 宗教について (2)

### [死と苦]

死は、誰も避けることができない。生あるものは、すべて死を免れない。死は、誰もが必ず行き着く場所である。人間は、死を前にして無力である。

人間は、絶えず死に臨んで生きている。ある意味で、人間は、一瞬一瞬に死につつ生きているとも言える。人間は、最初から、死ぬべきものとして生まれる。生まれることの中に、すでに、死が含まれている。

死は生を無意味化する。われわれは絶えず生に執着し、生の存続のためにあらゆる努力を払うが、死の前では、それも空しい努力に終わる。どんなに努力しても、死は生に勝利し、生の意味を剥奪してしまう。このことに気づいた時、人は、一体何のために生きているのか、その人生の意味を問う。われわれの存在そのものの意味を問う。

存在の根底にあらわになってくる死の場から人生を眺めるなら、われわれの人生は空しい幻のようにしか見えない。われわれの日常の生活も実在感を失い、われわれ自身から遠のいていく。さらに、あらゆる事物が実在性を失って、幻影のようにさえ見えてくる。この世に存在するすべてのものが、何ら根拠をもたない虚構のようにはしか見えない。昔から説かれてきた人生の空しさというものの背景にも、そういう死の自覚というものがあつたであろう。

仏教が絶えず説いてきた諸行無常の教えも、その空無性を指摘してあますところがない。この世の一切の存在は流転してやむことがない。恒常的に存在するものは何一つなく、すべては時とともに無に帰していく。いかなる存在も、無常から逃れることはできない。人間も、他の事物も、永遠に存続することはなく、本来、空である。

人間の死は、すべてを空しくする。生前に所有していた物でも、獲得した名誉でも、人の絆でも、すべて死によって失われる。人間存在が、死にさしかけられた存在であり、時間的に限られた存在であるということは、存在そのものの、生そのものの意味を剥奪し、人間存在の根底に潜む空無性を浮かび上がらせる。

われわれ自身の存在が一つの問いと化した時、世界と世界に存在するすべてのものも問いと化す。自己も、他者も、その他すべての事物も、あらゆるものが、一個の疑問と化し、何の根拠ももたない不安定なものとなる。そこでは、すべての存在が虚無の場に浮遊した

あやふやなものとなり、いかなる存在基盤もたないものとなる。

死の自覚を通して、あらゆる存在の時間性、有限性、虚無性が自覚され、世界そのものが一つの問いと化した時、われわれは、自己自身と世界のより根源的な根拠を求める。宗教が生まれ出てくるのは、このような場面においてである。死の自覚がなかったなら、宗教は生み出されなかったであろう。

死は自己がなくなることなのだが、そのことを自覚することは、逆に、本来の自己、真の自己を求める出発点となる。われわれは、死を通して、自己自身へ帰る。今まで宗教が求め続けてきた生と死が一つになる解脱の境地や、生も死も含めてすべてを永遠根源的なものにまかせる救いの境涯は、自己が本来の自己に帰るところなのである。

人生は、また、常に何かを求めながら、それが得られない苦に満ちている。この時、われわれは、自分自身の人生を重荷と感じる。さらに、自分の力ではどうすることもできない無力感に襲われ、悩まされる。人間存在の負荷性の自覚も、また、そこを超えて、絶対的自由と永遠なる生を求める宗教心の湧き出てくる源泉である。

生きるということは、憂いや悲しみ、不幸や苦悩とともにあるということである。われわれは、絶えず憎しみに会い、愛するものからは別れなければならず、求めても得ることができず、常に熾烈な欲望に苛まれている。人生は苦である。

人間はいつも若さや健康や不死を求めるが、それをいつまでも保持していることはできない。人生は苦に満ちている。

人間世界は、怨みや憎しみ、恐怖や闘争に満ちている。人間の生は、不幸と悲慘、孤独と不安に支配されている。人間世界は苦悩の世界である。われわれの人生も、怒りや憎しみ、貪りや愚かさに支配されて生きる煩悩の生である。われわれの人生は、生や死に迷いながら生きていく生である。そこには本来の自己はなく、自己は見失われたままである。

誰もが、生きていくかぎり、老い、病にかかり、死んでいかねばならない。生まれると

いうことは、若い、病み、死ぬものとして生まれるということである。生まれてくるものは死なねばならない。それは、免れることのできない運命である。それでいて、人間はこの生にいつまでも執着しているから、この存在の時間性はまた苦として受け取られる。生まれてくるものは苦しまねばならない。生そのものが苦である。苦は人間存在の本質である。

人生は苦である。人間存在は、欲望に支配されているがゆえに苦である。人間は、渴愛や貪欲、過度な欲望に駆り立てられることによって、瞋恚や愚痴、迷妄や顛倒に陥る。人間は煩惱に支配された存在なのである。

人間存在は無限の負荷性をもっている。それは、過去から現在、現在から未来にわたって継続される業の無限の連鎖によって生じる。人間の苦は無限の世界苦となる。宗教は、このような無限の負荷性からの出離を求めて生じてくる。

原始仏教や大乘仏教が特に問題にした苦の問題は、深くこの人間存在の負荷性を見ていた。そこには、人間の生を重荷と解する深い宗教的自覚があった。それがあってこそ、永遠の解脱や救いを求める宗教心は出てくる。

しかし、もしも、原始仏教の説く八つの正しい道が単なる道徳の実践を主張しているだけなら、それによつては、この人間存在に巣くつているどうにもならない煩惱は断ずることができず、苦を脱することもできないであろう。単なる道徳によつてだけでは、人は救われもせず、解脱にも至りえない。宗教は、この道徳を越えるところにあるのでなければならぬ。

### 【解脱】

宗教は、人間存在の無力の自覚から出発する。死の問題にしても、苦の問題にしても、それらは、人間自身の問題でありながら、人間の力を越える問題である。しかも、人間は、そのように多くの問題に対して無力な存在であることを自覚する。人生には常に破綻がある。死や苦の問題は、この人生の破綻を通して立ち現われ、人間存在の無意味性を露呈す

る。

しかし、また、この無意味性を自己の問題として自覚することによって、人間は、人間を超えるものを知る。人間は、無力な存在であるが、その無力を自覚することによって、人間を超えるものを見出し、それに自己の根拠を置くことができる。かくて、自己の本来のあり方に目覚める。

宗教は、非本来的生から本来的生を回復しようとする人生の要求である。本来的生に自覚め、真の生へと再生すること、それが宗教である。人は、そこではじめて生死を超え、真に生きることができる。

人は、煩惱に惑わされ、迷妄に陥るからこそ、道を踏み誤る。だから、正しい道を成就することは、言葉で言うほど容易ではない。人間は、常に食欲や瞋恚や愚痴に溺れ、ものごとくに執着し、迷う存在である。しかし、この迷える凡夫こそ救われねばならない。

解脱とか悟りと言えば、自己の努力や自力の行によって、煩惱の渦巻くこの世の自己を乗り越えて、一切の煩惱が消えた彼岸に到達することだと受け取られがちであるが、真の解脱や悟りはそのようなものではない。真の解脱や悟りは、煩惱の渦巻くこの世の自己をそのままにして、より大きな世界におのずと生かされることでなければならない。

宗教的体験は、自己が全くの無に等しいものとして放棄されると同時に、その自己が自己を超える大いなるものに救い取られるという体験である。その時、自己の本来あるべきあり方が立ち現われてくる。それが解脱とか回心と言われるものである。

大なる生命に生かされ、宇宙の根源に満たされることが、解脱とか悟りと言われるものである。一切のはからいを捨て、自己に死して大いなるものうちに生きることが、解脱である。自己は、死して再生する。そこでは、自己ばかりでなく、自己を取り巻く他のあらゆるもの、世界の万物も同時に再生する。そして、自己と自己の外なる万象は、大いなる場において一つになり、融合する。



宗教は、人間が人間を超えるものに生かされてあることの自覚である。自己が自己を放棄し、自己に死す時、自己は自己を超えるものに生かされる。しかも、この自己を超えるものは、同時に、自己の内に宿るものである。自己を超え自己を貫く場に生かされる時、自己も他己も、すべて存在するものは、そのあるがままのあり方を露呈し、万物はつながる。

生も死も、宇宙の根源的生命の場に生かされて一つである。生は宇宙の根源的生命からの現われであり、死はそこへの帰還であって、この根源的場では、生死は一つである。自己は、生においても、死においても、この大いなる真生命に生かされ、その働きを働く。生も死も、それ自身が宇宙の真生命の働きである。

宗教は、自己の生命が、その全体をかけて、その根源を求める要求である。解脱とか悟りというものは、自己の生命の根源を求め、宇宙の根源的生命に生かされてある自己を見出すことである。

人間をはじめ、生きとし生けるものすべてが宇宙の大生命の中に生かされているとともに、宇宙の大生命は生きとし生けるものすべての中に働き出ている。

宗教は、自己の探究であり、自己の根源の探究である。しかし、それは、また、自己がもはや自己ではなく、宇宙の根源的生命と一つになったところへ帰ることでもある。宇宙の真生命に生かされてある自己を発見する時、自己の身心も、他者の身心も、脱落して宇宙の真生命と一つになる。

自己を投げ出して、宇宙の真理の中に脱落する時こそ、宇宙の真理の方から、進んで、その根源的真理をまざまざと顕わし出す。それが、真の解脱であり、悟りである。宇宙の真生命に自己が生かされるには、宇宙の真理の方から照らし出されるということがなければならぬ。

### 〔 根源的生命 〕

どの宗教も、宇宙の根源的力への依存を表明している。だが、宇宙の根源的力は目に見え

るものでもなく、形あるものでもない。それでいて、それは万物を生み出し、われわれを内から支えている偉大な力である。宗教とは、この宇宙の根源的力に、われわれが全面的に依存しているということへの自覚である。

われわれは、最初から、宇宙に遍在する根源的生命の中にいる。宇宙の中の一微塵のようなわれわれの個体の中にも、常に宇宙の全生命が働き出ており、われわれを支えているのである。

万物は宇宙の大なる生命の表現である。この宇宙に存在するすべてのものが、それぞれに大なる宇宙の表現点として、それぞれに光り輝いている世界、それが解脱や悟りの世界に開かれてくる世界である。ここでは、松を吹く風の音、鳥の声、虫の声など、およそ目前に表現されるものは、すべて宇宙の大なる生命の現われだということになる。

自然は、常にわれわれに語りかけ働きかける。春、花が咲き、秋、木の葉が散るのも宇宙の語りかけであり、溪谷の惜しむことのない響きも、宇宙生命の働きかけである。

宇宙の塵のごとき人体も、地・水・火・風からなる宇宙と連続しており、宇宙と一つである。自己と大地自然には隔てがなく、自己と大地自然は一つである。しかも、この大地自然がそのまま宇宙生命の表現であり、自己の真理に他ならない。

寒蝉おとこむしは、短い夏を夏とも知ることなく、命を限り鳴き続け、そして死ぬ。寒蝉も、生に徹し、死に徹している。いかに生死に迷い煩惱に惑わされていても、すべてのものは、それ自体としては、常にそのような宇宙的生命に生かされているのだと言わねばならない。

万物のあるがままのあり方、それがそのまま真理の現われであり、宇宙の真生命の顕現である。解脱や悟りの場が開かれてくる世界は、そのような万物のありのままの世界である。

この世界に存在するものを離れて、それとは別に真理があるのではない。この世界に存在するものは、みな真理である。日月星辰、山川草木、鳥獣虫魚、すべての動きが、宇宙の真生命の働きである。

永遠に存在する真理は、そのまま、この世界の生成消滅する存在として現われ出ている。現象している存在そのものが、そのまま永遠の相を現わしている。真理は現象しなければならぬ。目前の存在は、水に映る月のように、そのまま真理の現われなのである。本質は現象であり、真理は存在である。

われわれの目前に働き出ているものは、すべて真理の働きである。この世界で生成消滅を繰り返す存在も、そのまま宇宙の真生命の働きである。存在は真理の中にあり、真理は存在の中にあり、存在と真理は一つである。

この宇宙に存在するすべての個体は、大宇宙を映す小宇宙である。万物は宇宙の中に働き出ているとともに、宇宙は万物の中に働き出ている。万物は宇宙の命の表現であり、宇宙の根源的生命の活動である。水の中に魚が住むとともに、魚の中に水が住む。

#### 〔相互連関〕

宇宙の真生命が万物となって現われ出る時、万物は、それ自身の自性を現わす。とともに、万物は、宇宙の真生命の場で互いに連関し、互いに映し合い、互いにつながり、限りない無礙の世界を形づくる。

万物は、それぞれのものが他のすべてのものによってあり、他のすべてのものはそれぞれによってある。一つのもものがそれ自身としてあるということは、同時にまた、それが他のすべてのものにあるということでもある。それぞれのものは、相互に働きかけるとともに、働きかけられてもいる。

万物は、それぞれが他を映し合っているから、一つのものも、それを映し取る個体の違いによって、様々な映し取られている。この世界も、各個体のそれぞれの視点から見られており、千差万別に映し取られている。また、各個体も、他の個体によって千差万別に映し取られている。

この世界は、空間的にも、時間的にも、一の中に多があり、多の中に一があり、一が一切であり、一切が一であり、万物が重々無尽に連関している無礙の世界である。

宇宙に遍在する根源的生命は、無数の世界万物となって表現されている。同時に、世界万物はそれぞれに独自であり、どれ一つとして同じものはない。しかし、それは、また、宇宙の根源的生命に貫かれてもいる。一は多であり、多は一である。

世界の中に水があるばかりでなく、水の中にも世界がある。雲の中にも、風の中にも、火の中にも、一茎の草の中にも、一本の杖の中にも世界はあり、世界のあるところに悟りの世界がある。この世界のどんなにささやかなものの中にも、全世界が宿っている。

この宇宙は相互に連関し合った無数の事象からなり、事象と事象は互いに結合し合って、全体を形づくるとともに、そのことによって、宇宙全体を表現する。宇宙の中のすべての事象は、他のすべての事象を映し、かくて、宇宙全体を映す。

この宇宙は、相互に連関し合った無限の事象から出来ている。この宇宙の中のすべての出来事は、全体から切り離されたものではなく、すべてが絡み合って起きるものである。

人間ばかりでなく、動物も、植物も、鉱物も、地球全体、宇宙全体が、孤立した存在ではなく、互いにつながっている。存在は連続している。万物は、宇宙的生命を宿すものとして、みな同じ命をもち、同じ命でつながっている。われわれ人間も、この宇宙の生あるもの、生なきものすべての恩恵を受けている。とすれば、人間だけでなく、宇宙万物が、そのまま宇宙生命に帰一し、悟りに入りうると考えねばならない。

われわれの身体は、単に、皮膚に囲まれ、骨格に支えられた一個の局限された個体のみではなく、それを超えて、宇宙全体に拡がっている。われわれの真の身体は、むしろ、この大なる宇宙と一つになるところにある。というより、この大なる宇宙そのものが、一個の身体なのである。

人間をはじめ、生きとし生けるものの生と死は、宇宙生命の循環の中の一過程にすぎない。

死も、単なる消滅ではなく、より大きな宇宙的生命への融合である。

この世界に存在する多様な個体は、一つ一つが区別されて、全く同一のものはない。それは、多様性そのものの世界である。しかし、同時に、それらは互いに連続し、同一の宇宙生命に貫かれ、一つである。

この宇宙は、物と心が一つになっている世界である。その源泉に帰れば、物と心は、海水と波のように、一つであって別々ではない。ここでは、物の中で心が働き、心の中で物が働き、両者は一つである。

身心が一つになって働いている生命体は、物心一如の宇宙の表現である。われわれが体験する原体験は、物でも心でもなく、それらが分かれ出てくる以前のものである。それが反省されることによって、物と心が分かれ出てくる。

宗教的な解脱や悟りの場を開かれてくる世界は、万物一如の世界である。ここでは、物と心、身と心、主観と客観、人間と自然の対立はなく、すべては一つである。宗教は、このような対立が出てくる以前の根源に帰り、そこから、万象のつながりと融合を見ている。

### 〔生成と時〕

生成消滅するもの、生成変化するものは否定されるべきものではない。生成消滅する無常な世界は、そのまま、宇宙の大なる生命の働きとして、肯定されねばならない。

生成流転する世界そのものうちに、真理は働き出ている。真理は、常住不変の存在として固定されてはならない。むしろ、真理は、常に活動し運動し創造する宇宙の働きそのものでなければならぬ。生成変化そのものが真理である。生成消滅する世界の背後に、常住不変の本体の世界を考える必要はない。

宇宙の根源的生命は無限の活動であり、不断の創造であり、永遠の生成である。それは、相互に関連する無限の事象として表現される。

この世界は絶えざる生成の世界である。過去・現在・未来の三様相をもった不可逆な時間  
も、この絶えざる生成から出てくるものと考えねばならない。時間があるから生成がある  
のではなく、生成があるから時間がある。時は生成してくるのである。不断に生成してい  
る世界を、外からながめるとき、過去・現在・未来の三様相をもった時間が生まれてくる。

しかし、世界の生成の一断面を切り取ってくるなら、そこには、世界の一瞬の像が現われ  
てくる。この瞬間の断面においては、時間はなく、通常の時間観念も消滅する。瞬間は、  
永遠に通じている。この永遠の今のもとに立つなら、瞬間瞬間が永遠であって、時間はも  
はや過ぎ行くものではなくなる。瞬間は、時であって、時でない。永遠の今の瞬間におい  
て、永遠と時間は呼応している。一瞬がなければ、永遠も時間もない。永遠が時と接触す  
るところ、それが瞬間である。

昔から、宗教は、この永遠の今において、永遠なもの一つになろうとしてきた。永遠の  
今の瞬間において、現在の深い根底が永遠に他ならないことを自覚したのである。この永  
遠の今の瞬間において、時を超え、永遠と一つになることによって、永遠に生きることが  
できる。

しかし、この永遠の今は、ただ一点に静止しているものではない。瞬間は常に動く。瞬間  
を止まったものとみることが、ちょうど映画の一コマを止めて見るように、幻である。永  
遠の今の世界は、そのまま生成の世界であり、常なる創造の世界である。

永遠なものは、瞬間を通して、時間の場に働き出してくる。そうでなければ、絶えざる創造  
ということもありえない。この創造の場に、宇宙生命が瞬間ごとに働き出している。生成と  
は、単なる変遷とか変化ではなく、そこに永遠の真理が現成<sup>げんじょう</sup>することである。宇宙は瞬間  
瞬間に変化する純粹な活動であり、生成そのものである。

万物の相互連関性は、時間的な生成変化を呼び起こす。相互連関性から、(同時に)世界  
が起きてくる。この(同時)こそ、永遠の今、絶対現在を意味している。一瞬間における  
世界と次の瞬間における世界とは、非連続であるとともに連続である。

永遠の今においては、過去・現在・未来という時間の区別はなく、すべては絶対現在の瞬間の世界に相入している。過去も、未来も、ともに絶対現在の瞬間の中に折り込まれている。過去や未来は、むしろ、この絶対現在の瞬間から生成して行く。

確かに、この宇宙の時間は不可逆な時間であり、過去・現在・未来を取り替えることはできない。宇宙は、絶えざる生成発展であり、常に自己を創造し、進化する。そして、それは、常なる生成の中で、不可逆な時間を形成する。この不可逆な時間は、瞬間瞬間の中に宇宙の根源的活動力が働き出ることによって形成される。

われわれは、絶えず何ごとかをなし、行為して生きている。この行為がなければ、生成ということもありえない。なるほど、われわれの行為は、この広大な宇宙の生成変化から見れば、ほとんど無限小と言ってもよいようなちっぽけな行為にすぎない。しかし、それでも、われわれは、この行為を通して、宇宙の生成に参加している。ほんのわずかであっても、われわれは、行為することによって、宇宙の存在連関を変えている。

人間にしても、動物にしても、植物にしても、物質にしても、天体にしても、各個体が相互連関性の中で行為し、行動し、運動するといふことがなければ、宇宙の根源的生命も働き出ることができない。われわれの行為は、その意味で、宇宙の生成を働いているのである。われわれは、生成を行為しているのである。

われわれは、無始無終の無限の時の流れのほんの一息のような短い時の中に生まれ、行為し、そして、死す。しかし、それでも、われわれは、時の中で行為し、時をむしろ形成している。死ぬことさえも一つの行為であり、時の流れを変えている。時はそこにあるのではなく、行為によって形成されるのである。

この世界は、時間的にも、空間的にも、無限の相互連関によって成り立っている。われわれは、無限の存在連関の中に生きており、そこでの行為は、その存在連関を変えている。したがって、その中で行為するといふことは、それ自身、巡り巡って世界を動かすことにつながる。

行為するということは、宇宙の働きを働いていることである。宇宙の行為を行為していることである。特に、宗教的行為は、このような宇宙的行為を自覚的に働く。ただひたすら打坐することも、ただひたすら祈ることも、それ自身が宇宙の働きの表現であり、宇宙の働きを働くことである。

われわれの行為の持続によって、この宇宙のすべてのものが意味をもってくる。日々行為しているわれわれは万物につながっており、したがって、その行為は、人から人に、物から物に受け継がれ、その連鎖が世界を成り立たせている。行為するということ、すでに、宇宙の命の現われである。宇宙の命は、われわれの行為を通して現われる。

宇宙の真理は、どこにでも遍在しているからといって、何もしないのではそれ自身現われて来ない。行を行なってこそ、そこにまざまざと宇宙の真理は顕現してくる。行為することなくして、宇宙の真生命は働き出てこない。

この宇宙は、無限の生成であり、絶えざる創造であり、不断の活動である。人間の行為や動物の行動、植物の変化、物質や天体の運動、それらは、みな、相互連関性の中で常に流動変化していく宇宙の自己表現であり、それ自身が、それぞれ宇宙の創造的契機である。

宇宙の中に存在するあらゆる個体は、それ自身、常に運動し、変化し、行動し、行為することによって、生成変化する大宇宙を表現する。人間の行為も、常に生成流転する大なる宇宙の働きの表現である。われわれは、行為することによって、宇宙の自己形成に参加している。宗教の実践行為、つまり行は、このことを象徴的に表現している。

### 〔迷い〕

それでも、われわれは煩惱に迷う存在である。われわれの心は、なお、貪欲や瞋恚、愚痴や愛欲、怨憎の煩惱に悩まされ、常に動揺している。われわれが住む現実の世界は、死や苦に悩まされる煩惱の世界であることに変わりはない。



もちろん、それでもなお、真理の世界はある。われわれは煩惱に迷う存在ではあるが、しかし、われわれは、煩惱具足の身のままで、宇宙の真生命に支えられている。

悟りや解脱の世界は、われわれが生きる現実の世界から遠く離れたところに望まれるものではなく、苦悩と汚辱に満ちた現実の世界のただ中にある。迷いの世界も、悟りの世界も、煩惱の世界も、解脱の世界も、今このこの世界以外のものではない。宗教的世界は、単なる解脱や悟りの世界ではなく、そこには、苦悩、煩悶、闘争、すべてがある。

いかなる煩惱も宇宙の真生命の働きだとすれば、大乘仏教が常に主張してきたように、煩惱即菩提ということになる。煩惱と菩提は、別々のものではない。人間はどうしようもない業をもち、その心は無明の闇に覆われているが、そうであればなおのこと、その業や無明にこそ、私の命はあらわになっているのである。湖面に映る月は波が立てば消えるが、しかし、月は依然として照り輝いている。

われわれ人間は、また、生死しじふに迷う存在である。常に、死を恐れ、死に不安を懐き、生の意味に思い煩う存在である。われわれが住む現実の世界は、死に悩み生に悩む世界である。われわれは、この世に生まれてきたかぎり、生死の迷いから免れることはできない。なるほど、生死の迷いから解放されることを願って、人は解脱や悟りを求めるのだが、生死の迷いは常につきまとうから、それほど容易に解脱や悟りを得ることはできない。

もちろん、だからといって、解脱や悟りの世界がないわけではない。われわれは生死に迷う存在ではあるが、しかし、なお、そのままで、宇宙の真生命に支えられている。解脱や悟りを得るといふことは、むしろ、この生死の迷いをそのままにして、その根底に働き出している宇宙の真生命を体得することである。

われわれの迷いの心の中にも、悟りの心は働いている。われわれの迷いの心も、宇宙の真理につながっている。迷いと悟りは、相反かはんしながらも相即している。迷いと悟りは、表裏をなして一体である。

たとえ、この世界が心の迷いによって生じているものであるにしても、そのあるがままの

姿は真理の本質の現われである。したがって、心の迷いも恨むべきではない。迷いの世界を知る者は悟りの世界を知り、悟りの世界を証する者は迷いの世界を証す。生も死も、迷いも悟りも、すべて真理の展開である。

人間存在は常に生死に迷う存在であるが、その迷いそのものが、宇宙の真生命の表現である。迷いの世界の中にこそ、悟りの世界を見なければならぬ。宗教的世界は、迷いを包み込む世界でなければならない。解脱や悟りと言われるものは、迷いそのものから解放されることではなく、迷いそのものの中に宇宙の真生命の働きを見ることなのである。

人間はどこまでも生死に迷う存在であるが、しかし、この人間の迷いそのものも、宇宙の真生命の場で行なわれていることである。それは、生きとし生けるものが、そこへと死し、そこから生まれ来る永遠の場である。この永遠の場から、人間は、生死に迷う存在として、この世に生まれて来る。とすれば、生死に迷う人間は、また、この永遠の場へと帰って行かねばならない。

迷いと悟りは、表裏をなして一体である。われわれが生死に迷っている足下に、涅槃の世界はある。われわれは、最初から、永遠の場で生死しているのである。生死の世界を離れ、そこを超越して、涅槃の世界に入るのはない。生死の世界がすなわち涅槃の世界なのである。

生死の中にこそ涅槃はあり、涅槃の中にこそ生死はある。迷いの中にこそ悟りはあり、悟りの中にこそ迷いはある。迷いと悟りは矛盾するが、この矛盾するもの的一致という逆説の中にこそ、宗教的真理は宿っている。生死を超える宇宙の真生命こそ、生死を生死たらしめているものである。生死は宇宙の大生命に包まれている。

悟りや解脱の世界は、この世での日常的生から遠く離れた彼岸にあるのではない。むしろ、この世の日常的生そのものの中にこそ、宇宙の大なる働きは働き出ている。日常的生そのものの中に帰ることが、宗教の終着点である。日常的生における一挙手一投足こそ、宇宙の表現なのである。

### 宗教について (3)

#### 〔罪と救い〕

人間世界の悪を生み出す煩惱や自己愛が、他ならぬ自己自身の中に深く巣くっていることに気づく時、人は深い罪の意識をもつに至る。罪は自己自身の奥底に沈殿し、それが自己を根底から衝き動かしている。しかも、人間存在に巣くっているこの罪は、人間の力ではどうすることもできない。罪の前でも、人間は無力である。

人間存在の根底に悪が巣くいて、人間が根本的に罪ある存在であり、人間がこれに対して無力だとすれば、どんなに善行を積んでも、この根源の罪悪は克服できないということになる。真の救いは、自己の努力で善根を積むことによって得られるのではなく、一方的に神や仏の方から赦されるのでなければならない。それが、真の救いというものであろう。

一般に、道德の延長上に、宗教をとらえることはできない。道德は、自己の力と努力によって、自己の内の罪悪性を克服しようとする。悪を否定して善を目指すのが、道德である。しかし、このような道德の立場では、人間の奥底に潜む罪悪性は克服できない。

真の宗教的立場に至り着くには、この道德的立場が、その自己矛盾ゆえに崩れ去らねばならない。そして、何よりも、道德的立場が依って立っていた自己が投げ出されねばならない。その時、はじめて、善悪の対立は越えられ、罪あるままで救われるという宗教の立場が開かれてくる。道德は罪悪を否定するが、宗教は罪悪を救す。

宗教の場が開かれてくるためには、善と悪の葛藤の中で苦悩するということがなければならぬ。善を求めながらも、それをなすことができない自己の無力に絶望し懊惱わうぼうするとうことがなければならぬ。自分自身の内に潜むどうにもならない罪悪性に呻吟うげんすることを通してのみ、宗教への道は開かれる。

人間の本性は悪であり、人間は本来罪を背負っている存在であるという自覚によって、宗

教はそのより深い根底に達する。宗教が深く自覚する人間の罪悪性は、人間が人間としてあることそのことが、もともと、世界から離反し、神から離反しているということ、さらに、離反なくして、人間は人間でありえないということの意味する。しかも、それが人間存在の根底をなしている。この離反性の自覚なくして、宗教はありえない。

人間が人間として世界の中に立ったその時から、人間の前に世界は開かれると同時に、人間は世界から離反した。人間は、世界から離反し、大地から離反し、自然から離反し、神から離反している離反する存在である。そのことが、罪悪性の意識の中にはある。

その意味では、人間は悲惨である。永遠なもの、偉大なものを前にして、罪ある人間は、何の優るところもなく、誇るところもない。永遠なものを欠如した存在、それが人間である。このような欠如を背負って生きなければならないことは、人間にとって重荷である。人間が生きているということは、重荷を背負って生きていることである。宗教は、この人間存在の負荷性の自覚によって、より深まる。

人間存在が罪悪性をもった存在であるというこの自覚から、救いを求める心は起きてくる。自己自身の内なる罪を自覚する時、人は苦悩する。しかし、人間が苦悩する存在だということとは、また、救われる存在だということでもある。宗教は、罪ある生を送りながらも、同時にそれを自覚し、それに苦悩することから出てくる人間の止むことのない希求なのである。

宗教心は、自己の無力や弱さの自覚から湧き出てくる。人間は、悪に走りやすく、罪に溺れやすく、煩惱に埋没する存在である。それを自覚する時、人は自己自身の惨めさを知る。だが、このことは、人間にとって幸いである。人間が自己の無力や惨めさを自覚して、はじめて自己を超えるものに折り、任ずということが出てくるからである。この時、自己は、自己を超える大いなるものに生かされてあることを知る。この自覚こそ宗教なのである。

自己の力を頼む立場から、自己を大いなる絶対者に任せきる立場への転換点に、まごころ回心と言われる精神的転回が見られる。この精神的転換は、われわれに新しい自己の誕生の体験をさせる。人は新しく生まれ変わり、自己も、自己を取り巻く世界も、すべてが一変し、新

しい意味をもって受け取られる。それは、自己の有限性の自覚から自己の無限性の自覚への転換であり、挫折を通して、自己が自己を超えるものに帰属する体験である。

分裂と苦悩を通して、自己が絶対者の場に投げ出される時、新しい生を得ることができ、自己自身への絶望を通してのみ、絶対者のもとに生まれ変わることも可能なのである。

自己の無力を自覚する時、われわれは、自分自身の惨めさの中で、絶望感を深くする。しかし、この絶望を突き抜けて、自己自身を投げ出し、無に等しいものになった時、逆に、自己を超える大いなるものに生かされ、それに絶対的に依存している自己を見出す。人間は無力であるが、無力であるからこそ救われるのである。

宗教は、人間を超える絶対的なものへの絶対的信頼の感情である。自己を超える大いなるものを見出すことが、自己の本来のあり方に目覚めるということである。宗教的覚醒とは、そのような真の自己、新しい自己を見出すことである。

絶対依存の感情は、信仰という形で表現される。人間を超える偉大な力に絶対的に帰属しているという宗教独特の感覚は、単なる知性によってはとらえられない。それは、信じるという行為によってしか得られない。しかも、宗教が信仰の方向へ徹底される時には、仏教にしても、キリスト教にしても、ただ信仰によってのみ救いは与えられるとされる。それは、信仰によってのみ罪なしとされる、または、罪あるままに救われるとされる。

宗教的真理は、いつも背理を含んでいる。宗教的真理が、逆説でしか表現されないのはそのためである。罪ある者こそ救われるとされるのも、一つの逆説である。しかし、逆説ゆえに、真理は語られる。罪を知る者こそ、神の愛や仏の慈悲を知ることができる。人間は常にその内に罪悪性をもっているが、それゆえにこそ救いがある。ここに、道徳的理性を超える宗教的真理がある。

自己の内の罪業は、それを乗り越え打ち克つべきものではない。むしろ、それをそのままにして、絶対者の働きに一切をまかせる時、救いはある。そこには、罪悪と救いという相反するものが矛盾しながら相即する宗教的真理がある。宗教的真理の場では、絶対に相反

するものが逆接的に一つになっている。

宗教は、また、絶対と相対、神と人間、仏と衆生という相矛盾したものの関係である。絶対は相対を否定し、相対は絶対を否定し、絶対と相対の間には、無限の対立がある。人間は神から離反し、衆生は仏から離反し、神と人間、仏と衆生の間には、無限の断絶がある。しかし、だからこそ、人間が悩む時、神の救いの手は差しのべられねばならない。衆生が苦しむ時、仏の救済はなければならぬ。その時、はじめて、神と人間、仏と衆生、絶対と相対は一つになり、結合される。

絶対者と相対者の間には絶対の断絶があるのだが、絶対者と相対者の自己否定が呼応することによって、両者の断絶は架橋され、両者は結合する。絶対と相対は、互いに結合しなければ、絶対でも相対でもありえない。神と人は対立し、両者の間には、埋め合わせることのできない分裂と深淵があるが、しかし、それは、また、橋渡しされねばならない。神と人との分裂と対立は宥和されねばならない。

### 〔愛と命〕

宇宙の根源的生命に支えられてあり、それに貫かれてあることへの自覚、それがあらゆる宗教に共通した感情である。神や仏は、宇宙の根源的生命の人格的象徴であり、神の愛や仏の慈悲は、宇宙の根源的生命の働きの人格的表現である。特に、宗教感情が罪の自覚から出発する時には、宇宙生命の働きの愛や慈悲として強調される。

信仰は、いずれも、決断という性格をもっている。だが、この宗教的決断それ自身がまた絶対者の愛の働きである。信じるという行為は、確かに自己の行為である。しかし、そこに自己の力を頼むところがあるなら、まだ真の信仰にはなっていない。自己を捨てて絶対者の広大な働きの中に身を投じるのが、真の宗教的決断である。そこには、どうしても、絶対者に働きかけられるということがなければならぬ。

われわれは、誰もが、宇宙の根源的生命の場に生かされて生きている。この根源的生命の働きが神の愛や仏の慈悲として受け取られる。われわれ一人一人は、この愛や慈悲の広大

無辺な円環のそれぞれの中心である。宇宙生命は、この無数の中心を通して働き出るのである。

宗教は、宇宙の真生命へ参入することによって、永遠の生を得ようとする要求である。この永遠の生への転換は、〈新しく生まれ変わる〉という直接的感情によってとらえられる。それは、新しい自己の誕生であり、新生であり、再生である。そこでは、自己の死は自己の生であり、生きている瞬間瞬間が永遠である。

自己を放棄して絶対者のもとに生まれ変わり、それに貫かれて永遠の生命を得ることこそ、宗教の本質である。人は、自己に死し神に生きることによって、永遠の命を得ることができ。神の愛の中で、生と死は一つである。

われわれのこの世での生は罪悪生死の凡夫の生であるが、その有限な生そのものが無限なものに包み込まれているということを、絶対的なものへの信仰の中で自覚する時、罪悪生死の生はそのまま永遠の生となる。

一人一人の人間は、広大な宇宙と比べれば、無限に小さな存在にすぎない。しかし、この無限に小さな存在にすぎない人間一人一人の中にこそ、大なる宇宙の生命力は働き出しており、それに支えられて、われわれは生きている。

絶対者の無限の光のもとでは、宇宙万物は互いにつながり、連続し、等しく救われている。すべての存在は同じ命によってつながっており、存在は連続している。命と光の世界では、この世に存在するすべてのものが、その命と光の中で、あるがままに、それぞれにその命の輝きを輝いている。人も物も、存在するものがおのずから真理に照らされてあるがままにある。

### 【煩惱と救】

それでもなお、われわれは、煩惱に迷う存在である。われわれは、この世に肉身を受けて生きているかぎり、煩惱から逃れることはできない。たとえ、この世の存在が真理の現わ

れであり、宇宙の真生命の表現であったとしても、そして、そのことを自覚していたとしても、われわれは、この世では様々な試練に出会い、しばしば神仏に反抗する存在でもある。人間は大いなる矛盾の中に住んでいる。宗教的世界と言っても、それは、なお、苦悩の渦巻く世界である。

われわれの心は、常に食欲や瞋恚、愚痴や愛欲、怨憎の煩悩に悩まされ、仏の知恵さえ見えなくされているが、しかし、それでも、宇宙の真生命は働き続けている。たとえ、われわれが煩悩の世界に迷い込み、真理の世界に反逆したとしても、真理の光は宇宙のすみずみにまで及び、照らし続けている。救いを得るとは、むしろ、煩悩をそのままにして、なお、その奥底に宇宙の真生命が働き出ていることを確信することである。

われわれ人間は、有限な存在者として、常に絶対者に対して反対の方向を向いている。だが、だからこそ、絶対者の方からの自己否定はあり、救いはある。これは逆説である。しかし、宗教的真理は、このような逆説でしか言い表わすことができない。

煩悩と救いは、宇宙の真生命が働き出ている現在ただ今のところで、紙の表と裏のように、一体になっているのだと考えるべきであろう。われわれが煩悩に悩み苦しんでいるその時に、すでに、その足下に救いがある。煩悩と救いは、一体なのである。

生死に迷うわれわれ人間でも、そうであるからこそ、仏の力に支えられている。信を起すとは、このことを確信することである。生死に惑うことそのことが、すでに、宇宙生命の働きに包まれているのである。したがって、救いの世界は、生死を繰り返すこの世の彼岸に見るべきではなく、この世の彼岸に見るべきだということになる。そのように考えれば、もはや、生死を離脱する必要はない。

救いの世界は、われわれが生きる現実の世界から遠く離れたところに望まれるものではなく、苦悩と汚辱と迷いに満ちた現実の世界のただ中に見られねばならない。煩悩生死の世界も、救いの世界も、今ここの世界以外のものではない。煩悩生死と救いは表裏をなし、しかも、その表裏はいつでも転換しうるものである。



宗教的世界は、単なる救いの世界ではなく、そこには、迷妄、不安、苦悩、煩悶、闘争、すべてがある。ただ、それらすべてが宇宙の真生命の働きとみるところに、救いはある。この時、われわれは、自己のはからいを捨て、宇宙の大なる生命に自己を任せ、煩悩に惑い生死に迷う人生をそのままで肯定することができる。

人間は、煩悩に惑い、生死に迷う存在である。人間は、煩悩や迷いに遮られて、常に真理を見ることができない。だが、この真理の世界は、煩悩や迷いの世界の裏側に、常に存在している。煩悩生死の世界と救いの世界は、矛盾しながらも接している。煩悩に惑い生死に迷う人間は、同時に、真理の場で惑い迷っているのである。

救いの世界は、煩悩と菩提、生死と涅槃、仏と衆生、浄土と穢土など、矛盾したものが一つになっている世界である。これは逆説である。宗教的真理は、逆説の場でこそ如実に語られる。

### 〔歴史と救い〕

人間の歴史も、煩悩生死の迷いの歴史である。人間の歴史は、殺戮や闘争、食欲や憎悪に満ちた悪行の繰り返しであった。その意味では、人間は、いつの世も、汚辱にまみれた穢土にのたうちまわってきたとも言える。

人間の歴史は人間の業によって成り立っており、ある意味で、いつの時代も末法であった。現代も、また、末法の時代なのかもしれない。現代では、人々の精神は散乱し、永遠なものも忘却されている。人間は、人間を超える永遠根源的なものから切り離されて、その存在の根拠を失い、外的にも内的にも断片化してしまっている。永遠なものへの畏敬の念を失い、人間の精神が頹落し、魂が衰弱した時代、それが現代である。

現代人は神の死の時代を生きている。現代は、神から離反した時代、あるいは仏から見放された時代と言わなければならない。

かつての末法思想には、現在の瞬間瞬間がすでに末法であり、人間の終末であって、その

瞬間瞬間のところで自己を放下し、信を立てるなら、その場でそのまま瞬時に救われると考えるような緊迫した時間感覚があった。ところが、現代では、そのような緊迫した時間感覚がなく、それを可能にする場もない。

現代の時間は、すべてのものが加速度的に過ぎ去り、すべてのものが刹那的に過ぎ去る持続なき時間である。現代人の精神の持続は、瞬間毎に寸断されており、内的時間の持続というものがない。このような時間感覚の中では、絶望から救いへの充実した瞬間がない。

このような持続を失ったところでは、生きた歴史も失われる。現代では、復帰することによって再生しうるような歴史の生きた時間がない。人々は、絶えず過去を振り捨て、現在を滑り落ち、未来にのめり込むような生き方をしている。人々は、過去からも、現在からも、ひたすら逃走していく。

本来、宗教的信や証は、歴史に水平な方向ではなく、歴史に垂直に、それを超えようとするところに見出された。だが、現代においては、そのような緊迫した時間感覚も歴史感覚もない。

なるほど、人間の歴史はいつも無明によって成り立ってきた。人間の歴史は、宿業の積み重ねであり、煩惱と迷いの歴史である。その意味では、人間の歴史は、いつも永遠なものから離反した歴史であった。まして、現代は、末期の人間がはびこる時代である。そこでは、もはや、存在を根拠づける永遠根源的なものが見失われてしまっている。この現代の虚無は、それほど簡単に救済されるものではない。

現代、このような末法の時代に、否、もはや末法でさえない法滅の時代に、悟りすまし、救われきつていくことはできない。現代は、得体の知れない盲目の意志に支配されて、どこまでも突き進み、暗い闇の中に突入していこうとしている。その潜在力は巨大であって、それほど容易に救い出せるものではない。

しかし、それでもなお、この無明によって支配されている現代も、大地へと帰還し、宇宙的生命のもとへ帰ることによって、浄化されねばならない。現代の無明も、これまでの無

明の歴史も、すべてが包まれる世界がなければならない。人間の無明の歴史は、そこから生まれ、そこへと帰る。そこでは、すべてが赦されねばならない。人間のすべての罪や悪が赦され浄化される場、宇宙の根源的生命の場は、なお働いていなければならない。